

# 那珂 24

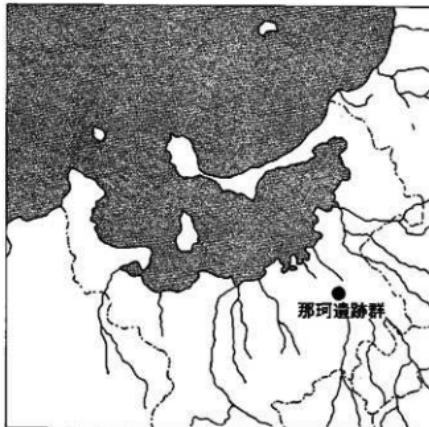
—那珂遺跡群第64次調査報告—

2000

福岡市教育委員会

N A                    K A  
那 珂 24

—那珂遺跡群第64次調査報告—



那珂遺跡群64次  
遺跡番号 NAK-64  
調査番号 9741

2000

福岡市教育委員会



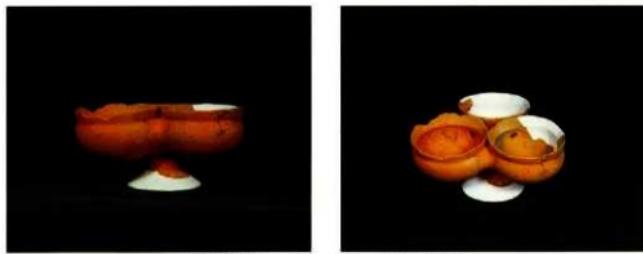
卷頭写真1 A区西側（南から）



卷頭写真2 B区西側（西から）



卷頭写真3 C区東側（東から）



卷頭写真4 SE060出土遺物（137）

## 序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第64次調査はアサヒビール株式会社博多工場敷地内で行われたもので、調査結果により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまでアサヒビール株式会社博多工場をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力を頂きましたことに対し厚くお礼申し上げます。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲 一 郎

## 例　　言

1. 本書は博多区竹下3丁目1-1において平成9年度に福岡市教育委員会が実施した那珂遺跡群第64次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、久保山勝弘が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲三、高橋健治、藤　祥子、丸山陽子が行った。
4. 製図は長家、星山　洋、藤富士寛、阿部泰之、山口朱美が行った。
5. 遺構写真は長家が遺物写真は米倉秀紀、榎本義嗣が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21'西偏する。
7. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
8. 本書の執筆・編集は長家があたった。

遺跡調査番号	9741		遺跡略号	NAK-64	
調査地地籍	博多区竹下3丁目1-1		分布地図番号	37-0085	
開発面積	8,900m <sup>2</sup>	調査対象面積	8,900m <sup>2</sup>	調査面積	5,870m <sup>2</sup>
調査期間	平成9年9月22日～平成10年8月20日		事前審査番号	6-2-231	

## 本文目次

Iはじめに .....	1
1 調査に至る経過 .....	1
2 調査体制 .....	1
II調査の記録 .....	5
1 遺跡の立地とこれまでの調査 .....	5
2 調査の経過 .....	6
3 掘立柱建物 .....	11
4 櫛状遺構 .....	12
5 穴穴住居跡 .....	12
6 土坑 .....	21
7 清 .....	28
8 井戸 .....	28
9 貯蔵穴 .....	55
10 鏊棺墓 .....	109
11 木棺墓 .....	111
12 ピット .....	112
13 その他の遺物 .....	113
14 小結 .....	114
付編 彩文土器と赤色顔料の保存処理及び自然科学的調査についての予察 .....	117

## 挿図目次

第1図 調査区位置図1 (1/50,000) .....	2
第2図 調査区位置図2 (1/3,000) .....	3
第3図 調査区位置図3 (1/1,000) .....	4
第4図 調査区分割図 (1/1,000) .....	6
第5図 調査区内土層図 (1/80) .....	7
第6図 掘立柱建物・穴穴住居跡・櫛状遺構・土坑・溝・配置図 (1/600) .....	8
第7図 SB034実測図 (1/60) .....	9
第8図 SB055・132実測図 (1/60) .....	10
第9図 SB034出土遺物実測図 (1/3) .....	11
第10図 SA131実測図 (1/60) .....	12
第11図 SC045・058実測図 (1/60) .....	13
第12図 SC066・067・075・076実測図 (1/60) .....	14
第13図 SC078実測図 (1/60) .....	15
第14図 SC045・058・066・076・078出土遺物実測図 (1/3) .....	16
第15図 SC079・080・081・082実測図 (1/60) .....	18
第16図 SC079・080・082出土遺物実測図 (1/3) .....	19

第17図	SC083・086・091・092・124実測図 (1/60)	20
第18図	SC083・086・091・092・124実測図 (1/2、1/3、1/4)	21
第19図	SK001・002・009・010・011・012実測図 (1/30)	23
第20図	SK030・046・049実測図 (1/30)	24
第21図	SK002・009・011・046・049出土遺物実測図 (1/3)	24
第22図	SK074・084・094・104・125出土遺物実測図 (1/30)	25
第23図	SK126・531・555実測図 (1/30)	26
第24図	SK074・084・094・104・126出土遺物実測図 (1/3)	27
第25図	SD062・063・064土層図 (1/30)	29
第26図	SD062・063・064出土遺物実測図 (1/3)	29
第27図	井戸・貯蔵穴配置図 (1/600)	30
第28図	SE003実測図 (1/40)	31
第29図	SE003出土遺物実測図 1 (1/3)	31
第30図	SE003出土遺物実測図 2 (1/3)	32
第31図	SE060実測図 (1/40)	33
第32図	SE060出土遺物実測図 1 (1/3)	34
第33図	SE060出土遺物実測図 2 (1/3)	35
第34図	SE061・065・068・073実測図 (1/40)	36
第35図	SE061・065・068・073出土遺物実測図 (1/3、1/4)	37
第36図	SE090実測図 (1/40)	39
第37図	SE090出土遺物実測図 1 (1/3)	41
第38図	SE090出土遺物実測図 2 (1/3)	42
第39図	SE090出土遺物実測図 3 (1/3)	43
第40図	SE090出土遺物実測図 4 (1/4)	44
第41図	SE096・102実測図 (1/40)	45
第42図	SE096出土遺物実測図 1 (1/3)	46
第43図	SE096出土遺物実測図 2、SE102出土遺物実測図 (1/3)	47
第44図	SE103・107実測図 (1/40)	48
第45図	SE103・107出土遺物実測図 (1/3)	48
第46図	SE110実測図 (1/40)	49
第47図	SE110出土遺物実測図 1 (1/3)	50
第48図	SE110出土遺物実測図 2 (1/3)	51
第49図	SE110出土遺物実測図 3 (1/3)	52
第50図	SE112・117・119・120実測図 (1/40)	54
第51図	SE112・117出土遺物実測図 (1/3)	55
第52図	SE119・120出土遺物実測図 (1/3)	56
第53図	SU005・006・007実測図 (1/50)	57
第54図	SU005出土遺物実測図、SU006出土遺物実測図 1 (1/3)	58
第55図	SU006出土遺物実測図 2 (1/3)	59
第56図	SU007出土遺物実測図 (1/3)	61

第57図	SU013・014・016・017実測図（1/50）	62
第58図	SU013・014出土遺物実測図（1/3）	63
第59図	SU016出土遺物実測図（1/2、1/3）	64
第60図	SU017出土遺物実測図（1/3）	65
第61図	SU018・021・022・023実測図（1/50）	66
第62図	SU018・021出土遺物実測図（1/3）	67
第63図	SU022・023出土遺物実測図（1/2、1/3）	68
第64図	SU024・025・026・027・028・029実測図（1/50）	69
第65図	SU024・025・026・028・029出土遺物実測図（1/3）	70
第66図	SU031・032・033・043実測図（1/50）	72
第67図	SU031・032出土遺物実測図（1/3）	73
第68図	SU033出土遺物実測図（1/3）	74
第69図	SU043出土遺物実測図（1/3）	75
第70図	SU047・050・051・052実測図（1/50）	77
第71図	SU047出土遺物実測図1（1/3）	78
第72図	SU047出土遺物実測図2（1/3）	79
第73図	SU050・051出土遺物実測図（1/3）	80
第74図	SU052出土遺物実測図（1/3）	81
第75図	SU053・054・056・097・098・099実測図（1/50）	82
第76図	SU053出土遺物実測図1（1/4、1/3）	83
第77図	SU053出土遺物実測図2（1/3）	84
第78図	SU054出土遺物実測図（1/4、1/3）	85
第79図	SU097・098・099出土遺物実測図（1/3）	86
第80図	SU100・101・105・106実測図（1/50）	87
第81図	SU100出土遺物実測図1（1/3）	88
第82図	SU100出土遺物実測図2（1/3）	89
第83図	SU101・105出土遺物実測図（1/3）	90
第84図	SU106出土遺物実測図1（1/3）	91
第85図	SU106出土遺物実測図2（1/3）	92
第86図	SU108・109・111・115・116実測図（1/50）	93
第87図	SU108・109・111出土遺物実測図（1/3）	94
第88図	SU115・118出土遺物実測図（1/3）	95
第89図	SU121・122・123実測図（1/50）	96
第90図	SU121出土遺物実測図1（1/4、1/3）	97
第91図	SU121出土遺物実測図2（1/5、1/3）	98
第92図	SU122出土遺物実測図（1/3）	99
第93図	SU123出土遺物実測図1（1/3）	100
第94図	SU123出土遺物実測図2（1/5、1/4）	101
第95図	SU123出土遺物実測図3（1/5）	102
第96図	SU123出土遺物実測図（1/4、1/3）	103

第97図	SU127・128・129・130実測図 (1/50) .....	104
第98図	SU127出土遺物実測図 (1/3) .....	105
第99図	SU128出土遺物実測図 (1/6、1/3) .....	106
第100図	SU129・130出土遺物実測図 (1/3) .....	107
第101図	甕棺墓・木棺墓・ピット及び関連遺構配置図 (1/800) .....	108
第102図	K004・019・020実測図 (1/20) .....	109
第103図	K004・019・020出土遺物実測図 (1/10) .....	110
第104図	SR059実測図 (1/20) .....	111
第105図	SR059出土遺物実測図 (1/3) .....	111
第106図	SP015・301実測図 (1/40、1/20) .....	112
第107図	SP015・301出土遺物実測図 (1/3、1/6) .....	112
第108図	その他の出土遺物実測図 (1/2、1/3) .....	113
第109図	時期別変遷図 (1/1000) .....	116

## 写 真 目 次

- 卷頭写真1 A区西側（南から）  
 卷頭写真2 B区西側（西から）  
 卷頭写真3 C区東側（東から）  
 卷頭写真4 SE060出土遺物

写真1	A区全景（東から） .....	121
写真2	A区西半全景（南から） .....	121
写真3	B区全景（南から） .....	122
写真4	B区全景（南西から） .....	122
写真5	B区全景（西から） .....	123
写真6	C区東半全景（東から） .....	123
写真7	B区段落ち部分（北西から） .....	124
写真8	C区段落ち部分（北から） .....	124
写真9	C区東壁土層1 .....	125
写真10	C区東壁土層2 .....	125
写真11	SB034（南から） .....	125
写真12	SB034（西から） .....	125
写真13	SB055（南から） .....	125
写真14	SC045（西から） .....	125
写真15	SC058（南から） .....	126
写真16	SC076（南から） .....	126
写真17	SC078（南から） .....	126
写真18	SC083（東から） .....	126
写真19	SC091（北から） .....	126

写真20	SC092 (南から)	.....	126
写真21	SC124 (南から)	.....	127
写真22	SK001 (西から)	.....	127
写真23	SK002 (東から)	.....	127
写真24	SK012 (東から)	.....	127
写真25	SK046 (西から)	.....	127
写真26	SK049 (東から)	.....	127
写真27	SK049上層	.....	128
写真28	SK104 (西から)	.....	128
写真29	SK125 (北西から)	.....	128
写真30	SK126 (東から)	.....	128
写真31	SE003 (南から)	.....	128
写真32	SE060上層出土状況 (北から)	.....	128
写真33	SE060出土状況 (西から)	.....	129
写真34	SE060最下部出土状況 (西から)	.....	129
写真35	SE061 (南から)	.....	129
写真36	SE061井筒 (南から)	.....	129
写真37	SE061完掘 (南から)	.....	129
写真38	SE073 (北西から)	.....	129
写真39	SE090 (西から)	.....	130
写真40	SE096上層出土状況 (北から)	.....	130
写真41	SE096 (内から)	.....	130
写真42	SE102 (南から)	.....	130
写真43	SE107 (西から)	.....	130
写真44	SE103 (北から)	.....	130
写真45	SE110 (内から)	.....	131
写真46	SE110井筒 (西から)	.....	131
写真47	SE110井筒A	.....	131
写真48	SE110井筒組み合わせ状況	.....	131
写真49	SE112 (北から)	.....	131
写真50	SE117 (北から)	.....	131
写真51	SE119出土状況 (北から)	.....	132
写真52	SE120 (西から)	.....	132
写真53	SU005 (南から)	.....	132
写真54	SU005土層	.....	132
写真55	SU006 (南から)	.....	132
写真56	SU006土層	.....	132
写真57	SU007 (東から)	.....	133
写真58	SU007土層	.....	133
写真59	SU013 (東から)	.....	133

写真60	SU013土層	133
写真61	SU014（北から）	133
写真62	SU014土層	133
写真63	SU016（北から）	134
写真64	SU016土層	134
写真65	SU018（東から）	134
写真66	SU018土層	134
写真67	SU022（北から）	134
写真68	SU022土層	134
写真69	SU023（南から）	135
写真70	SU023土層	135
写真71	SU023北側炭化物出土状況（西から）	135
写真72	SU023南側炭化物出土状況（西から）	135
写真73	SU024（東から）	135
写真74	SU024上層	135
写真75	SU026（北から）	136
写真76	SU026土層	136
写真77	SU031（西から）	136
写真78	SU031土層	136
写真79	SU032炭化物出土状況（西から）	136
写真80	SU032（西から）	136
写真81	SU033（北から）	137
写真82	SU033土層	137
写真83	SU043（西から）	137
写真84	SU043土層	137
写真85	SU047（南から）	137
写真86	SU047土層	137
写真87	SU050（西から）	138
写真88	SU050土層	138
写真89	SU051（西から）	138
写真90	SU051土層	138
写真91	SU052（西から）	138
写真92	SU052土層	138
写真93	SU053（西から）	139
写真94	SU053土層	139
写真95	SU054（北から）	139
写真96	SU054土層	139
写真97	SU098（北から）	139
写真98	SU098土層	139
写真99	SU099（西から）	140

写真100 SU099土層	140
写真101 SU100（南から）	140
写真102 SU100土層	140
写真103 SU106（西から）	140
写真104 SU106土層	140
写真105 SU108（西から）	141
写真106 SU108土層	141
写真107 SU111（西から）	141
写真108 SU111土層	141
写真109 SU121（西から）	141
写真110 SU121土層	141
写真111 SU122（西から）	142
写真112 SU122土層	142
写真113 SU123（東から）	142
写真114 SU123土層	142
写真115 SU127（北から）	142
写真116 SU127土層	142
写真117 SU128（西から）	143
写真118 SU128土層	143
写真119 SU129（西から）	143
写真120 SU129土層	143
写真121 SU130（西から）	143
写真122 SU130土層	143
写真123 K020（北から）	144
写真124 SR059（南から）	144
写真125 SP015（北から）	144
写真126 SP301（南から）	144
写真127 SD062出土墨書き陶器（102）	144
写真128 SE090出土土師器環（163）	144

# I は じ め に

## 1. 調査に至る経過

平成6年9月21日付けでアサヒビール株式会社博多工場 工場長塩原正義氏より福岡市教育委員会宛に博多区竹下3丁目1-1 アサヒビール株式会社博多工場内の8,900m<sup>2</sup>に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。(事前審査番号6-2-231)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群(分布地図番号37-0085・遺跡略号NAK)に含まれております、アサヒビール株式会社博多工場内でもこれまでに9次にわたる発掘調査を行っていた。また申請地の隣地では第21次・第50次の調査が行われ多くの遺構・遺物が確認されていた。このため埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨を回答しその取扱について協議を行った。この結果申請地内では貯酒タンク等の施設建設が決定しており遺構の破壊は避けられないため、現存する建物を解体撤去後直ちに対象地の北側約2,050m<sup>2</sup>の発掘調査に取りかかり、残地については本調査と並行して試掘調査を行うことで協議が成立した。以上の協議を受けて委託契約を締結し平成9・10年度に発掘調査、平成10・11年度に資料整理・報告書作成を行い記録保存を図ることとした。

発掘調査は平成9年9月22日～平成10年8月20日の期間で行った(調査番号 9741)。調査対象地は8,900m<sup>2</sup>で、調査面積は5,870m<sup>2</sup>である。また遺物はコンテナ192箱出土している。

現地での発掘調査に当たってはアサヒビール株式会社博多工場・錢高組アサヒビール博多工場工事作業所の皆様より発掘作業についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

## 2. 調査体制

事業主体 アサヒビール株式会社博多工場

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査總括 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任) 山崎純男(現任)

調査第2係長 山口謙治(前任) 力武卓治(現任)

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美

調査担当 調査第2係 長家伸

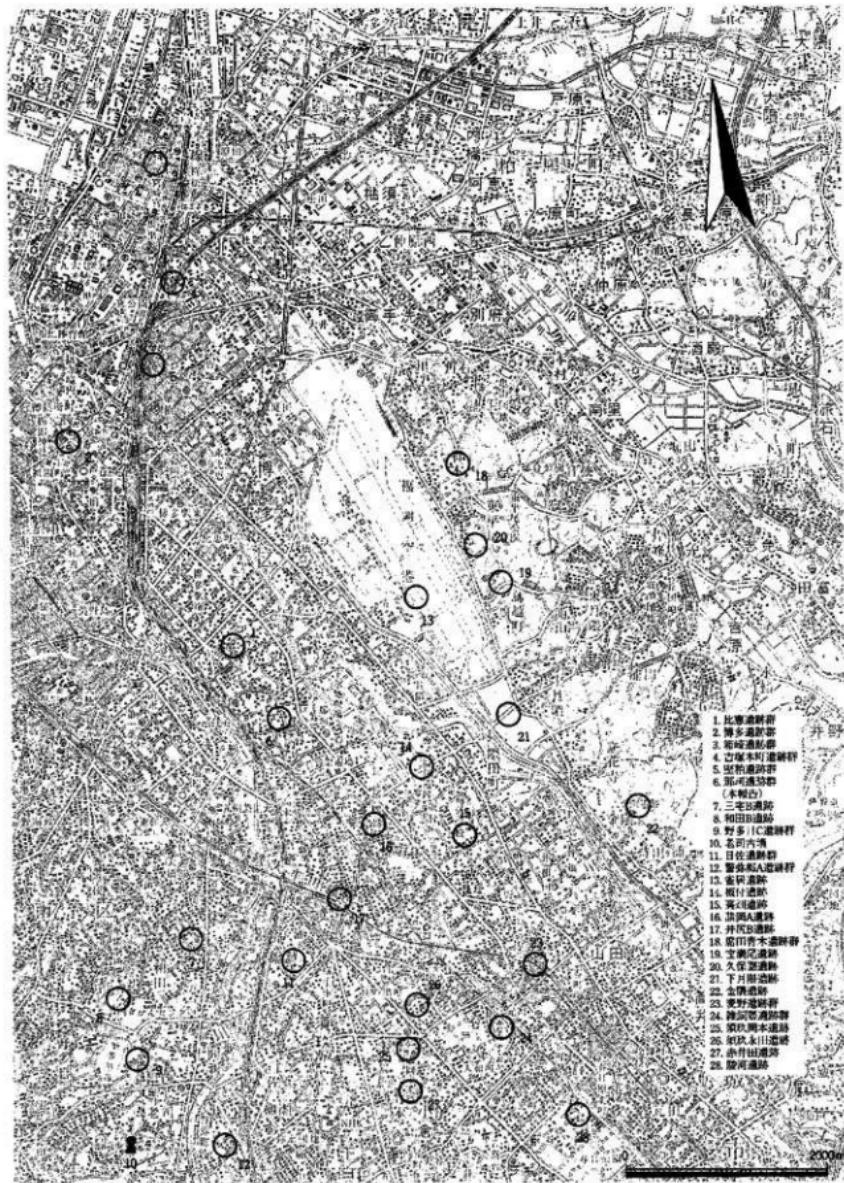
調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺岡恵美子 小川博 村本義夫 安元尚子 小路丸嘉人 平本恵子

整理作業 永田優子 指原始子 花田則子 池聖子 大音輝子 吉村智子 小池温子 中村幸子

増田ゆかり 草場恵子 高津千尋 小路丸良江 山野妙子 田端名穂子 吉川暢子

久保山勝弘 永川カツエ 本多ナツ子 有田恵子 田中トミ子 北条こず江 富永利幸

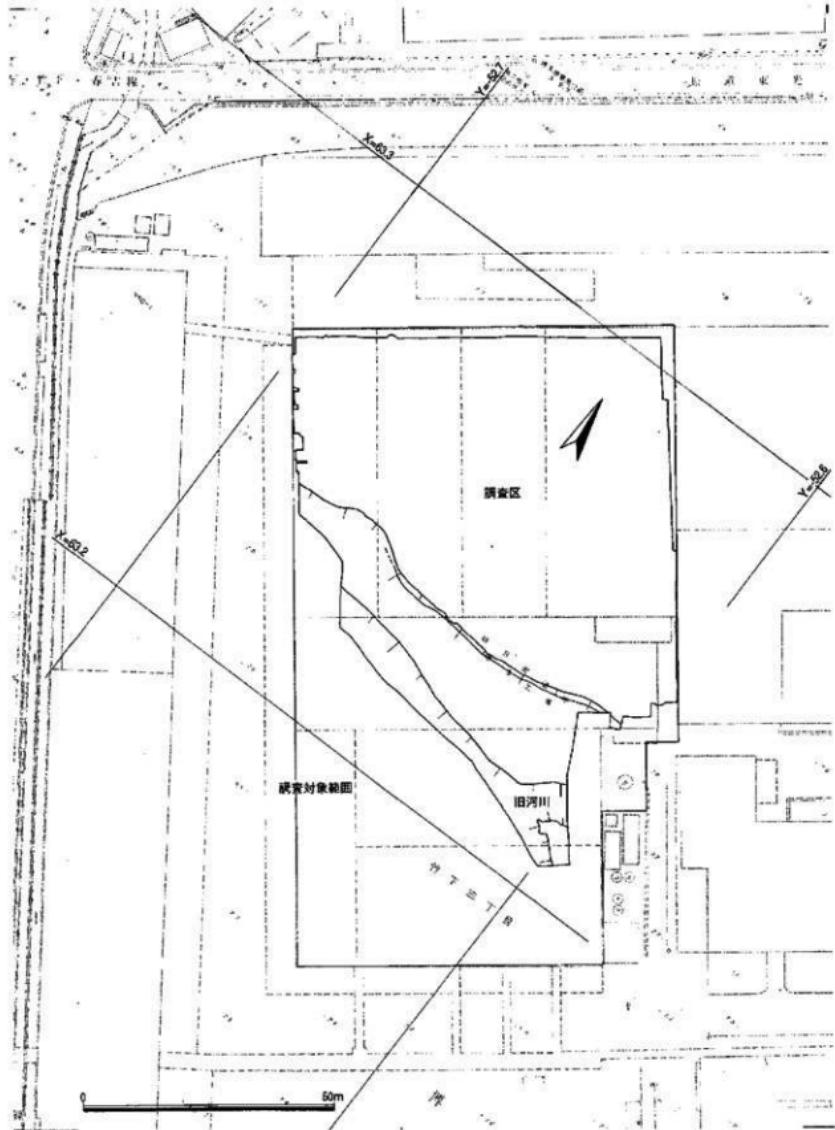
米倉国弘 小林義徳 古田恭子 森教子 泉本タミ子 岩佐亘 太田次子 石谷香代子



第1図 調査区位置図 1 (1/50,000)



第2図 調査区位置図 2 (1/3,000)



第3図 調査区位置図3 (1/1,000)

## II 調査の記録

### 1. 遺跡の立地とこれまでの調査

那珂遺跡群は福岡平野の中央部を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に立地する。これは花崗岩風化疊層を基盤としておりこの上部に阿蘇山起源の火山灰が堆積して形成されているものである。この火山灰の上層を鳥栖ローム、下層を八女粘土と呼び慣わしている。この台地及び前面の砂丘上には各時代にわたる濃密な遺構の分布が確認されており今回報告する那珂遺跡群はこの中でも中心的な遺跡群である。周辺の遺跡群については各報告書等に詳しいので今回は割愛したい。

今回の調査対象地であるアサヒビール博多工場は那珂遺跡群の北西端に位置し今までに10~12次、14次~17次、21次、50次の9次にわたりのべ15,666m<sup>2</sup>の調査が行われている。以下に工場内の調査について簡単に概要を列記しておく。

10次調査 倉庫建設に伴う調査である。標高7.2mで鳥栖ロームの遺構面を検出する。検出遺構は弥生時代後期後半の井戸2基、古墳時代の大型の掘立柱建物・溝3条・土坑、古代の溝2条、中世の溝4条・土坑である。また調査区南側は旧河川に落ち込む手前の斜面上に包含層が形成され、弥生時代前期~古代の遺物が多量に出土している。古墳後期の建物は居館と考えられている。

第11次調査 東光寺剣塚の西側にあたる。標高7.5mで弥生時代中期末の井戸1基を検出した。

第12次調査 標高7.6mで古墳時代初頭の井戸1基を調査している。

第14次調査 標高7.8mで鳥栖ロームの遺構面を検出する。旧河川による崖面が確認され、無遺物層の上層には弥生時代前期~古代の包含層が形成されている。堆積状況から時期が下るにつれ崖線が西側に前進していることが確認された。弥生時代前期~中期の貯蔵穴2基・後期の井戸5基、古墳時代後期の竪穴住居跡、古代(8世紀後半~9世紀初頭)の大型の掘立柱建物・井戸1基が出土している。建物は真北を指向しており出土遺物からも一般集落とは大きくかけ離れた内容となっている。

第15次調査 前方後円墳である東光寺剣塚古墳の重要遺跡確認調査である。墳長75mを測り周囲に三重の周濠が巡るが、外側の第2・3周濠は全周していない。墳丘に葺石ではなく埴輪が原位置から遊離した状態で出土している。墳丘の土層観察から構築途中に一定期間の中止が想定され寿陵的性格が考えられている。また主体部は複室構造の横穴式石室で全長は9mである。後室奥壁に沿って石岸形が設置されている。石室構築に際しては墳丘盛り土と平行して行われている。出土遺物・石室構造から6世紀中ごろに比定される。

第16次調査 剣塚古墳の南東部分にあたる。遺存状態は良好であり標高8.8mで鳥栖ロームの遺構面を検出する。弥生時代の甕棺墓35基・木棺墓/土坑墓14基・土坑1基、古墳時代初頭の溝1条、古代の上坑・溝などが検出されている。

第17次調査 剑塚古墳の北西側に隣接する。前方後円墳の周濠の一部を検出し「剣塚北古墳」と名づけられた。後円部径約24mに復元され、周濠から列石・埴輪の存在が想定できる。剣塚古墳に先行する5世紀後半~6世紀初頭に位置付けられる。

第21次調査 本報告地点の北側に隣接する。標高7.8mの鳥栖ロームで遺構を検出し、弥生時代の貯蔵穴13基・甕棺墓28基・土坑墓6基・溝状の祭祀坑2基、古墳時代前期の竪穴住居跡13基・後期の掘立柱建物1基、古代の井戸3基を検出した。甕棺墓については墳丘墓として復元されている。また古代の遺構・遺物の質から周辺が官人の居住空間と考えられる。

第50次調査 本報告地点の北側をA区、東側をB区として調査を行っている。A区では弥生時代の貯蔵穴6基・土坑墓2基・甕棺墓1基・祭祀坑1基、古墳時代前期の溝1基を検出す。B区では弥

生時代の井戸 8 基、古墳時代前期の溝 1 条、古墳時代後期の竪穴住居跡 3 基、井戸 3 基、古代の井戸 2 基、中世の井戸 1 基を検出している。また南側では南方向に傾斜する斜面上に包含層が形成され、弥生時代中期後半～15世紀までの遺物が多量に包含されている。

## 2. 調査の経過

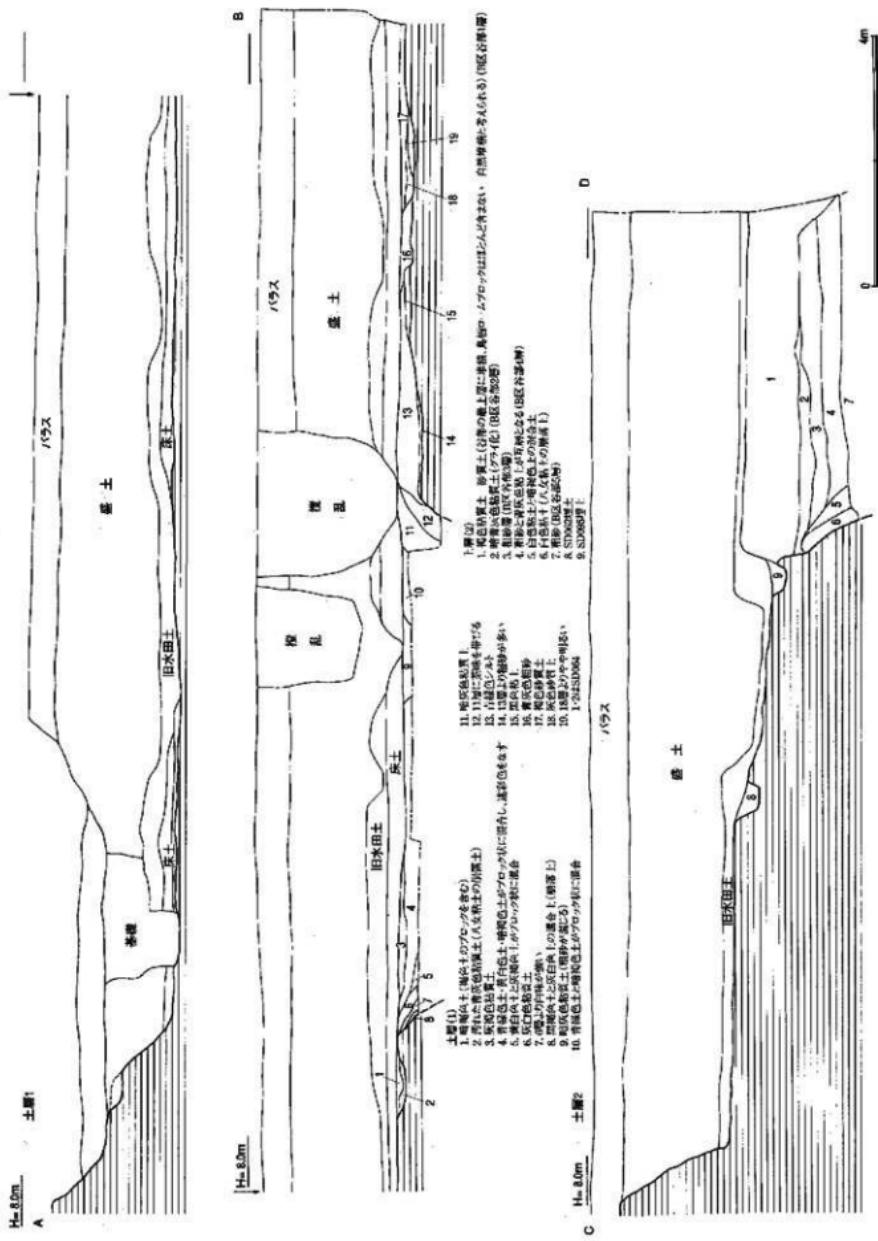
調査は貯酒タンク建築と平行して行うことが事前協議で決められており、対象地をほぼ三等分し北側から A 区・B 区・C 区と調査区を区切って行うこととした。調査方法としてはまず北側の A 区（約 2050 m<sup>2</sup>）の調査を行い終了後、A 区に貯酒タンクを建築しこの際 B 区を作業ヤードとして使用する。これに平行して発掘調査は C 区（約 4,350 m<sup>2</sup>）を行う。この後貯酒タンク建設終了後に対象地中央部分の B 区（約 2,500 m<sup>2</sup>）について調査を行うという行程計画にのっとって調査を行った。

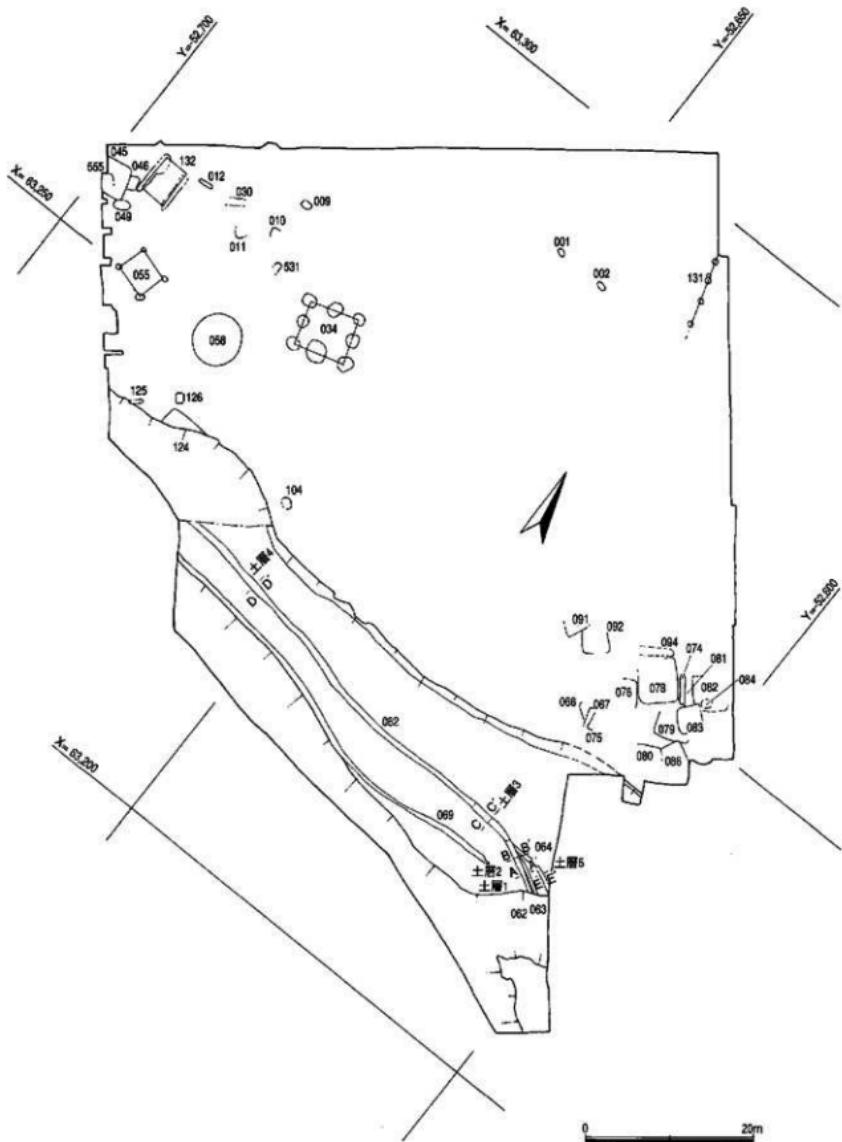
対象地には調査着手以前に既設の施設が全面に建てられており、以前の施設と併せて大きく遺構を破壊していることが想定された。表土除去は重機によって行うこととした。この結果調査区北側 2/3 程には鳥栖ロームによる台地が遺存していた。台地上は標高 7.5m ～ 7.7m を測るが施設による削平が大きく、南側の斜面近くでは遺構が残っているが、調査区の北側 1/2 では遺構の残存状態が極めて不良で密度は非常にまばらである。またこの台地を切り崩してほぼ東西方向に高さ 1.7m の段落ちが形成されている。この段落ち以南の部分では八女粘土が露出し、この直上に厚さ 20cm の耕作土が乗っており堆積状態からアサヒビル工場創設直前の耕作土と考えられる。この水田は南側の旧河川上に広がっており、河川埋没後に水田の開発を行ったものであろう。段落ちは丘陵の落ち際を耕作面確保の為に人为的に切り落として形成したものと考えられ、時期的には中世末～近世初頭以降の形成と考えられる。段落ち上面はほぼ平坦で標高 5.6m を測り、遺構はほとんど残っておらず溝・井戸などがあ



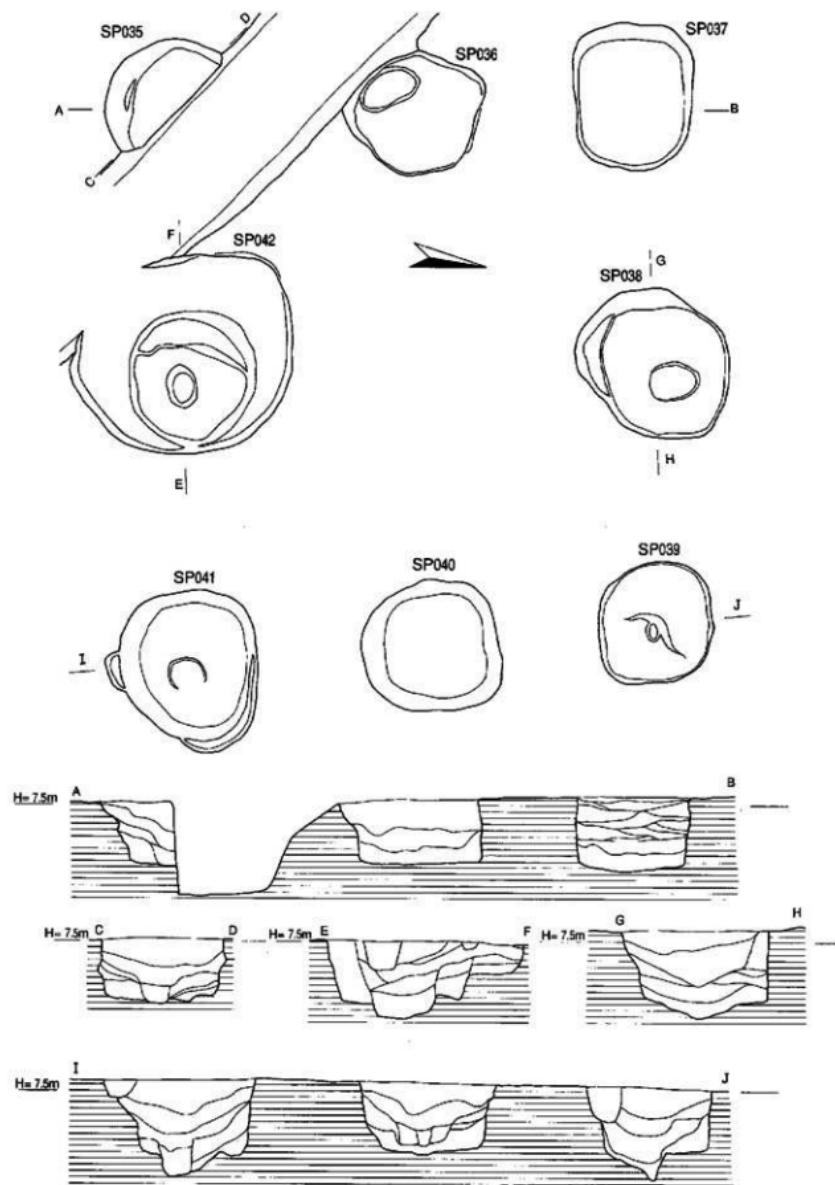
第 4 図 調査区分割図 (1/1,000)

わずかに残るのみで、C 区の旧河川崖際には倒木痕が密集している部分がある。検出遺構には掘立柱建物・竪穴住居跡・棚状遺構・井戸・貯蔵穴・甕棺墓・木棺墓・上坑・ピットがあり、時期的には弥生時代前期～中世までの遺構群を検出している。現状での遺構の分布は大まかには調査区西側には貯蔵穴・甕棺墓がまとまり、井戸も比較的集中している。また大型の建物も西側で検出している。調査区東側では古墳時代後期の竪穴住居跡が密集し、中世前半期の遺構（木棺墓・上坑・ピット）も東側部分にほぼ限られて検出されている。古墳時代前期および古代（7世紀末～11世紀後半）の遺構が散漫であるが井戸などは残存しており、削平により多くが消失したものと考えられる。

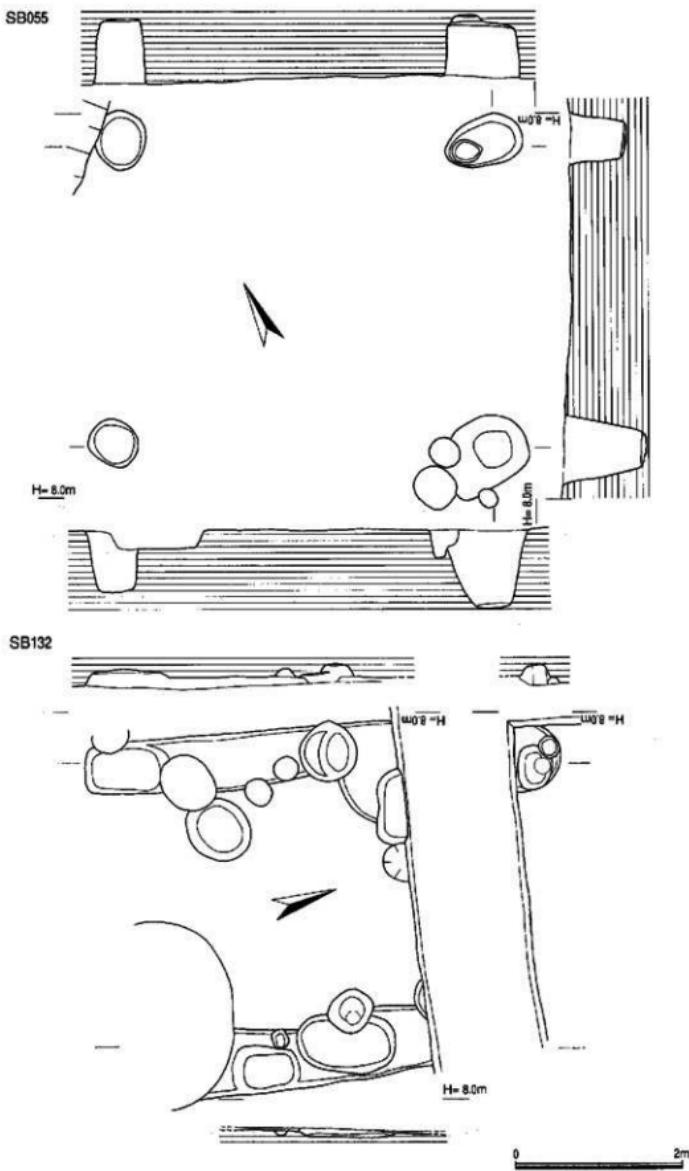




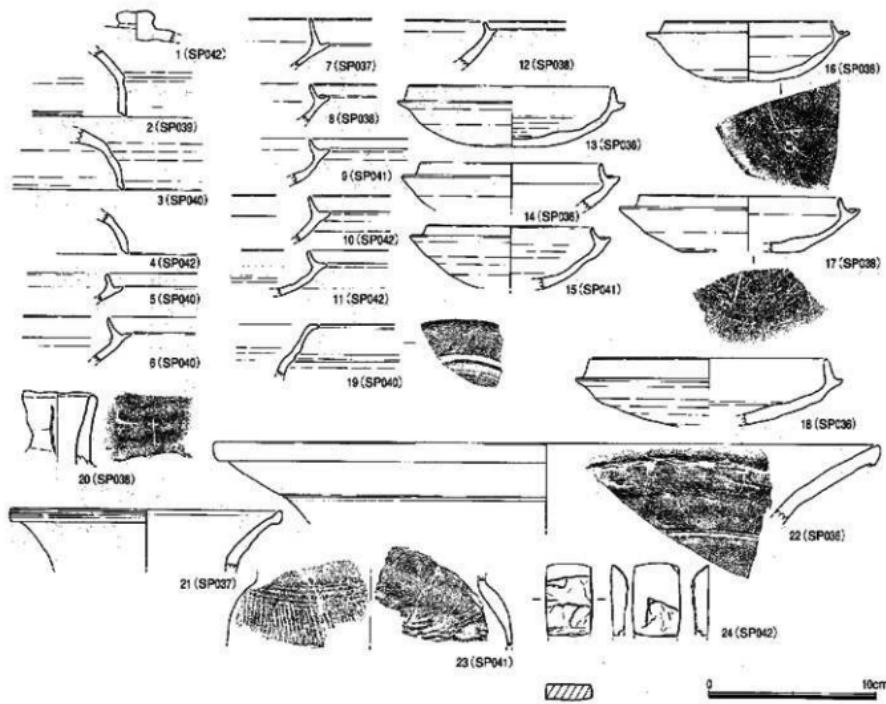
第6図 掘立柱建物・竪穴住居跡・柵状遺構・上坑・溝・配置図 (1/600)



第7図 SB034実測図 (1/60)



第8図 SB055・132実測図 (1/60)



第9図 SB034出土遺物実測図 (1/3)

### 3. 挖立柱建物 (SB)

今回確認できたのは3棟に限られるが造構面の削平による柱穴の欠失を考えると更に多くの建物の存在が考えられる。

#### S B 0 3 4 (第7図)

A区で検出する。SP035~042で構成される2間×2間の大型の建物で、建物規模は東西方向6.8m南北方向5.6mを測る。建物主軸方位はN-12°-Wである。柱穴掘り方はSP035~SP041が一辺1.5m~1.8mの隅丸(長)方形を呈しほば箱型に掘り下げている。掘削深は検出面から0.7m~1.1mで床面はゆるく中央部に向かってくぼんでいる。SP042は平面的には径2.5mの円形に掘り下げ中央部を更に径1.5mの円形に下げている。埋土の状態から複数回掘り返した痕跡が確認できる。柱痕跡はいずれも上面からは確認できないが底面近くで確認できるものや底面に圧痕が残っているものがありそこから柱径は約35cmと考えられる。出土遺物には土師器甕、須恵器壺蓋・高环・平瓶・甕・壺の小破片が出土している。時期的には小田編年Ⅳ期に対応する。

#### 出土遺物 (第9図)

1~23は須恵器である。1~4は壺蓋である。1はボタン状のつまみを有し回転ヘラ削りを行う。

5～18は蓋受けを有する壺身である。13・16・18は屈曲部のみに回転ヘラ削りを行い、17は底面全体に回転ヘラ削りを行う。19は壺の口縁部外面に沈線の上下に波状文を有する。20は平瓶の口縁部である。21・22は甕口縁部で波状文がある。23は土師器壺である。外面は平行叩き内面には當て具痕が残り、2次焼成を受けている。24は砂岩製の片刃石斧である。

#### S B 0 5 5 (第8図)

A区西端で検出する。1間×1間の建物で主軸方位をN-26°-Eにとる。建物規模は南北方向約3.7m東西方向4.5mを測る。柱埋土は周辺のピットと異なり暗褐色土がブロック状に混入した暗赤褐色土で人為的な埋め戻しが想定できる。柱痕跡は確認できなかった。出土遺物は少量で小破片のみであるが、須恵器は含まれていない。

#### S B 1 3 2 (第8図)

A区西端で検出する。上軸方位をN-19°-Eにとる1間×2間の布掘りの建物である。桁行長5mで柱間2.5m、梁行3.5mを測る。布掘り部分の埋土は暗褐色土で検出面から深さ10cm程度であるが壁は直に立ち上がっている。柱痕跡から柱径は15cmに復元できる。出土遺物は少量で時期は不明瞭であるが須恵器が含まれており占墳時代後期以降のものであろう。

### 4. 構造遺構 (SA)

#### S A 1 3 1 (第10図)

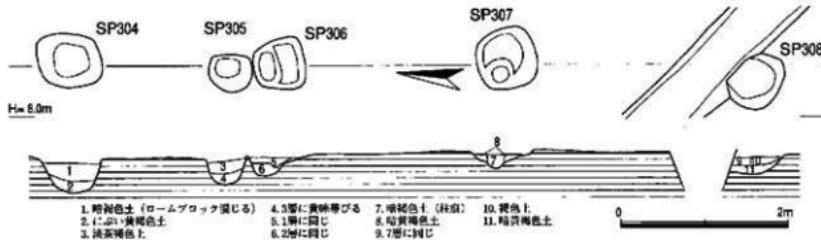
A区東端で検出する柱間2.4m～3mをはかる柱列である。主軸方位をN-7°-Wにとり隣接するSE003にほぼ平行する。掘立柱建物の桁行き部分の可能性も考えられるが梁部分の柱が確認できなかったため、区画を意図した構造遺構の一部として報告する。遺構は深さ20cm程度しか遺存しておらず延長範囲などは明らかでない。遺物は少量で時期は不詳であるが、SP304からヘラ削りを行う須恵器破片が出土している。位置的な関係からSE003に近接する時期であろうか。

### 5. 穴住居跡 (SC)

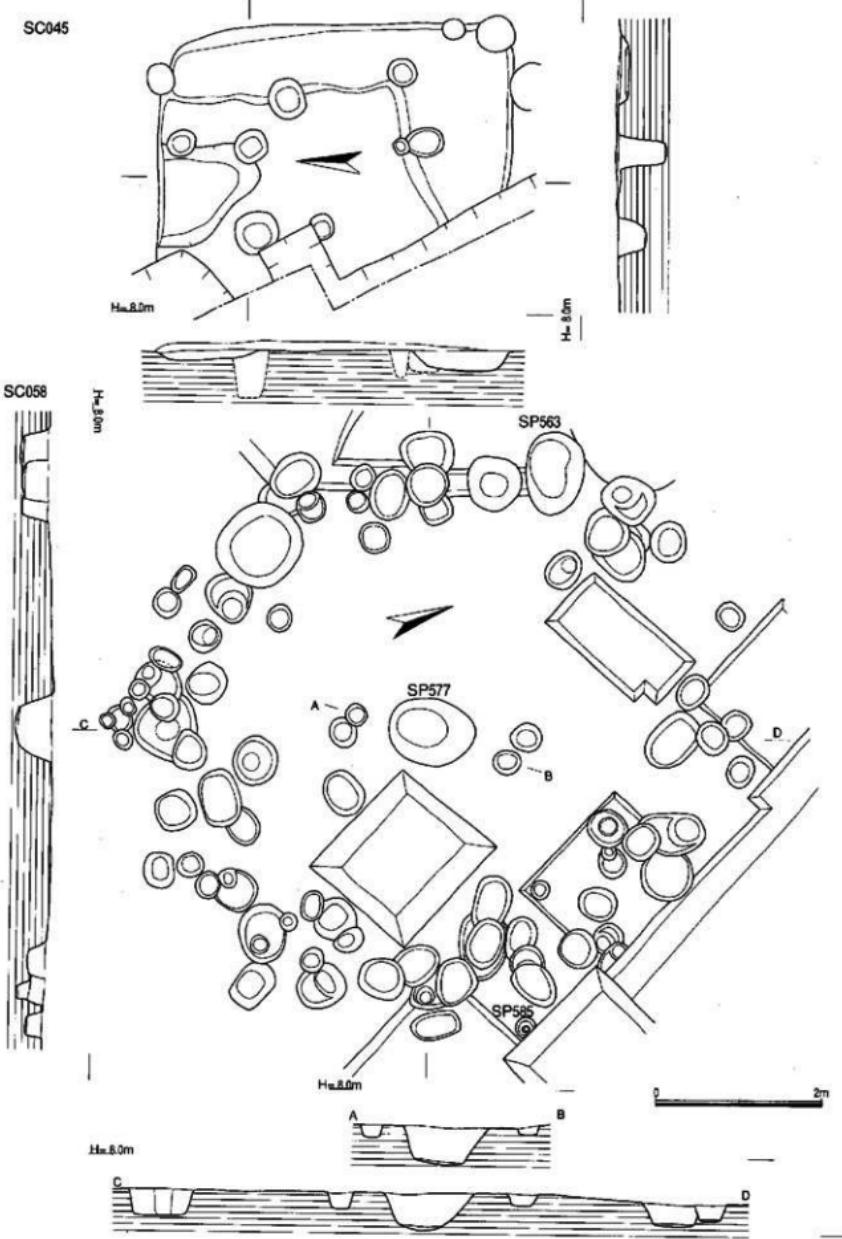
調査区内で16棟の穴住居跡を確認している。特に調査区南東隅に密集して検出しているがこれは先にも述べたように後世の削平による見かけの偏りであり本来の遺構数・分布状況を示すものではないと考えられる。また検出した穴住居のなかでも複雑等のために遺存状況が不良で形状・時期が不明瞭なものが多い。

#### S C 0 4 5 (第11図)

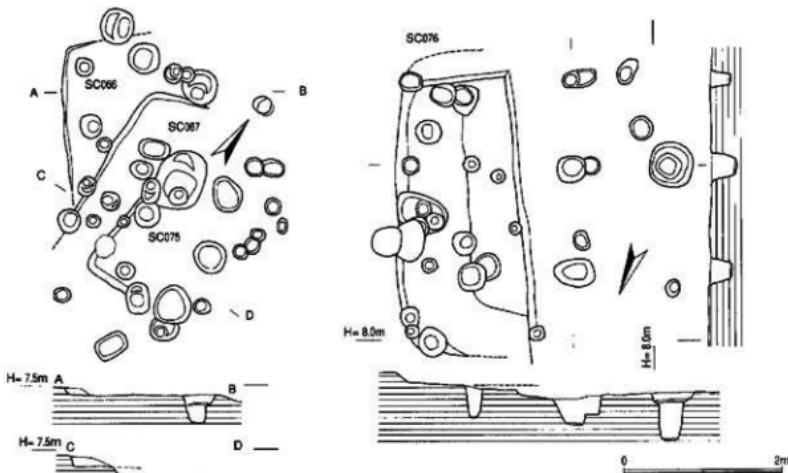
A区西隅で検出する。西側は調査区外で未掘であるが南北長4.2mを測り東西長は約4mに復元できるほぼ方形の住居跡である。埋土は暗褐色土であるが検出時には床面がほとんど露出した状態であ



第10図 SA131実測図 (1/60)



第11図 SC045・058実測図 (1/60)



第12図 SC066・067・075・076実測図 (1/60)

った。東壁一南壁沿いにはL字状に掘り込みを行いロームブロック混じりの褐色土で貼り床を行っている。また北壁中央部分には窓が痕跡的に残っている。現状では深さ10cm程度の窓みしか残っていないがこの中に埴体破片が入っており、窓破壊に伴い混入したものと考えられる。上柱穴は4本と考えられるが西側2本は未確認である。遺物は小破片のみであるが須恵器壺・蓋壊・高壺、土師器破片が出土する。小田編年のⅣ期に対応する。

**出土遺物 (第14図 25~27)** 25・26は須恵器蓋壊である。25には回転ヘラ削りを行うが26には認められない。27は滑石製の小玉である。

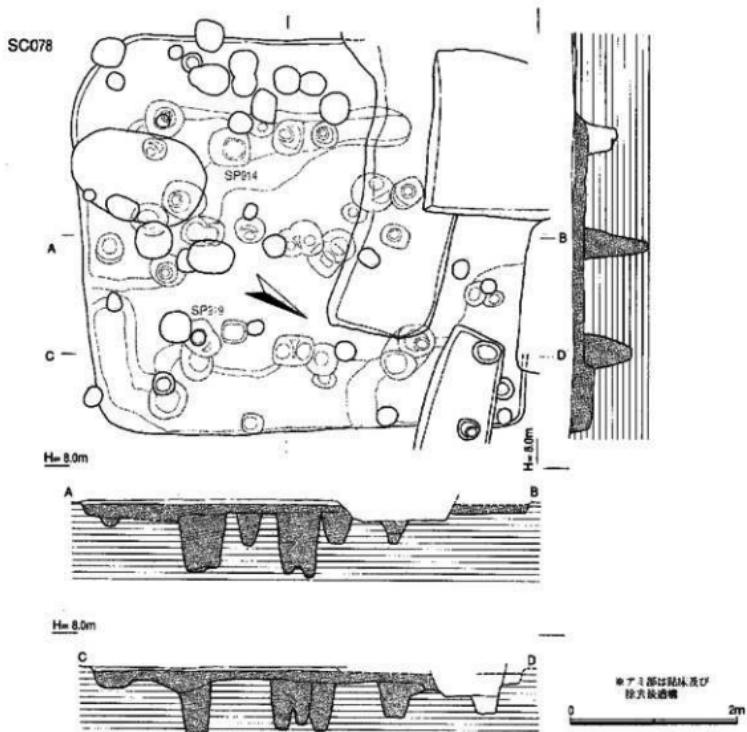
#### SC058 (第11図)

A区西側で検出する。壁が欠尖した円形の竪穴住居跡である。柱が多数円形に巡り建て替えが行われていたものと考えられるが、柱数が多く1回の建物に対応する柱群を拾い上げることができていない。柱穴埋土は黄白色土と暗褐色土の3:1の混合土である。また中央のSP577は炉跡と考えられるが埋土は暗褐色土で焼土・炭化物は混入していない。炉跡脇に長軸方向に2本1組の柱穴が2組あり少なくとも2回の建て替えを示すものであろう。遺物は破片が少量で詳細は不明だが弥生時代中期中頃～後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第14図 27~29)** 27は断面形コ字状をした壺の口縁部である。28はやや厚手の壺底部である。外面には刷毛目を有する。29は炉跡出土の壺の底部である。外面には縦方向の刷毛目が残る。また胎上には微砂粒を多く含んでいる。

#### SC066 (第12図)

C区東側で検出する。埋土は暗褐色土で西壁とコーナーの一部が残っている。SC067を切るが住居の規模については不明である。壁高は10cm弱で残りが悪く主柱も不明である。土師器小破片、須恵器蓋壊破片が出土している。



第13図 SC078実測図 (1/60)

出土遺物（第14図 30）須恵器壊身の破片である。蓋受けの立ち上がりは比較的高く仕上げている。

#### SC067 (第12図)

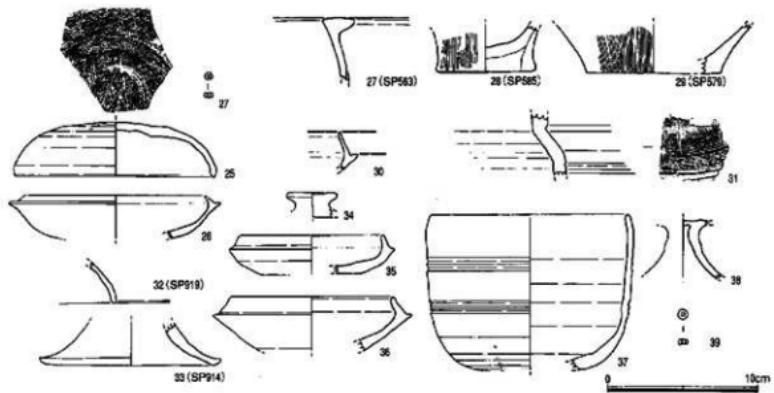
C区東側で検出する。埋土は暗褐色土で西壁とコーナーの一部が残っている。SC066に切られ壁高は10cmほどしか残っていない。主柱等の屋内施設も不明である。土師器・須恵器の小破片が出土している。

#### SC075 (第12図)

C区東側で検出する。埋土は暗褐色土で北側コーナーの一部が残っている。SC066・067との切り離し関係は明らかでない。壁高は10cm弱で主柱も不明である。土師器・須恵器小破片が出土するのみで時期は不明瞭だがSC066・067に近接するもので小田編年Ⅱ期に対応するものか。

#### SC076 (第12図)

C区東側で検出する。西半を削平により欠失するが1辺4m程度のほぼ方形に復元できる。埋土は暗褐色土で4本主柱である。竈・炉跡の痕跡は残っていない。土師器小破片、須恵器蓋壊片が出土



第14図 SC045・058・066・076・078出土遺物実測図 (1/3)

している。

**出土遺物 (第14図 31)** 須恵器の壺胴部破片である。中位に2条以上の沈線が巡り、沈線の上部と頸部には波状文が施される。

#### SC078 (第13図)

C区東側で検出し、SC076の東側に平行して隣接する。南北長5.4m、東西長4.6mのやや歪な長方形を呈する。埋上面から中世の木棺墓・ピットが切り込み住居に伴う柱が不明瞭になっているが、貼り床を除去したところ住居の軸に沿って南北方向に3列のピットを検出している。各列は等間隔にそろい壁と平行しているためこれらのピットが住居に伴うものと考えられる。また貼り床は西壁沿いを除いてほぼ全体に行われ、北壁の一部～東壁～南壁と西壁から1m東のほぼ全周にわたり溝状に更に深く掘り込んでいる。住居埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で貼り床及び貼り床除去後検出したピットは鳥栖ロームと暗褐色土1:1の混合土である。床面で焼土面・窓の痕跡などは検出していない。出土遺物は上師器・須恵器蓋・高坏・椀が出土している。

**出土遺物 (第14図 32～39)** 32・33はピット出土遺物である。32は須恵器蓋、33は土師器の脚である。34・35は貼り床出土須恵器である。34は蓋のつまみ部分である。35は坏身でヘラ削りを行わない。36～38は住居埋土出土須恵器である。36はヘラ削りを行う坏身である。37は椀で壺部に2条1組の沈線を2組施し下半は回転ヘラ削りを行う。38は小型の高坏である。39は滑石製の小玉である。

#### SC079 (第15図)

C区東側で検出する。東西長4.5m、南北長3.2mを測りやや歪な長方形を呈する。住居床面全体に厚さ5～10cmで貼り床が行われるが南～東壁沿いに更に深くなる。埋土は貼り床面までは暗褐色土で以下はブロック混じりの土である。主柱は不明で窓等の施設は不明である。上師器・須恵器小片が出土している。

**出土遺物 (第16図 40～43)** 40・41は須恵器坏身である。40はヘラ削りが行われていない。42は

土師器高坏である。脚部は接合部分から消失する。43は土師器壺である。内底面中央部分に2次的な焼成の痕跡が残る。

#### S C 0 8 0 (第15図)

C区東側で検出する。西~南半を削平により消失し住居規模は不明瞭である。北~東壁沿いにL字状に掘り込み、ロームと暗褐色土の混合土で貼り床が行われている。北壁沿い床面には被熱痕跡が残っているが焼成の痕跡等は確認できなかった。土師器・須恵器小破片が出土している。

**出土遺物** (第16図 44~47) 44は完形の須恵器壺身である。回転ヘラ削りは行わず外底はヘラで粗くなっている。45は土師器壺である。2次的な焼成のため摩滅が著しい。内面は口縁部横刷毛、胴部は斜めのヘラ削りを行う。肩の部分の張りなど形態的には叩きによって成形する壺に類似する。46・47は粘板岩製の砥石である。46は団面上面と左側面が砥面となる。上面には刃部を研いだようなラインが入る。47は手持ちの砥石である。形態は略四角柱を呈し小口部分を除いた4面が砥面となる。

#### S C 0 8 1 (第15図)

C区東側で検出する。SC082・SC083・SK074に切られる。住居の南壁の一部が残存するのみであるが、4本の上柱穴から一辺4m程度の略方形を呈すると考えられる。南壁沿いに深さ15cm程の掘り込みを有し暗褐色土と暗赤褐色土の3:1の混合土により貼り床が行なわれている。土師器・須恵器小破片が出土している。

#### S C 0 8 2 (第15図)

C区東側で検出する。SC083に南側を切られ、中央部には大きな擾乱により大半を消失している。住居規模は一辺4m程度の略方形を呈すると考えられる。埋土はローム小粒を含む暗褐色土で、西壁沿いに深さ20cm程の掘り込みを有し暗褐色土と暗赤褐色土の3:1の混合土により貼り床が行なわれている。上柱・焼上等の屋内施設は不明である。貼り床上から須恵器小破片が出土している。

**出土遺物** (第16図 48~50) 48・49は須恵器壺身である。立ち上がりはやや内傾する。50は須恵器直口壺の口縁部である。外面は縦方向に刷毛状工具でなでた後横なでを行なっている。

#### S C 0 8 3 (第17図)

C区東側で検出する。近接する住居相互の先後関係はSC081→SC082→SC083、SC081→SC078・SK074となる。東側を擾乱により消失するが、一辺3m弱のやや不整な方形を呈する小型の竪穴と考えられる。埋土はローム小粒を含む暗褐色土で底内に柱穴・焼土ではなく、底面全体が中央に向かって浅くぼみ暗褐色土と黄白色土の3:1の混合土により貼り床が行なわれている。土師器・須恵器小破片が出土している。

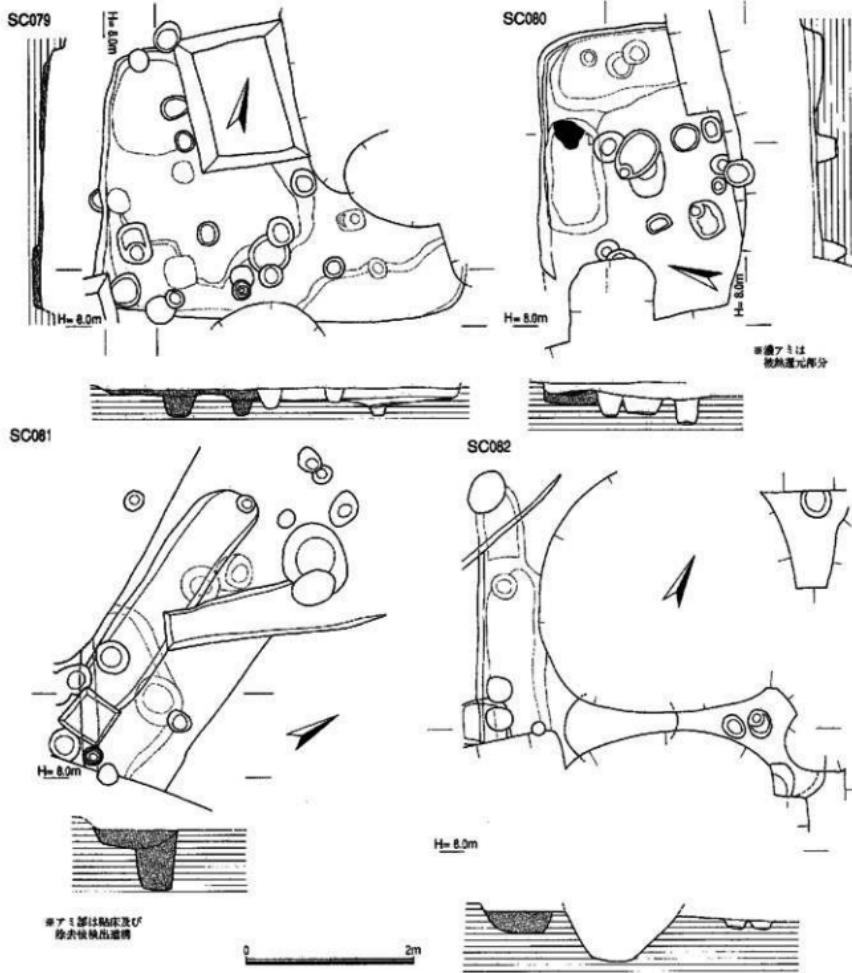
**出土遺物** (第18図 51~53) 51・52は須恵器壺蓋である。51は屈曲部に沈線が巡る。53は不明鉄製品である。小破片で錯化が著しく形状不明である。刃部の一部か。

#### S C 0 8 6 (第17図)

C区東側で検出する。SC080に切られ、東側を擾乱により消失する。埋土はローム小粒を含む暗褐色土で屋内施設は不明瞭である。底面北半分に深さ10cm弱の掘り込みがあり混合土による貼り床が行なわれている。上面出土遺物には陶磁器が混入しているが本遺構に伴う遺物としては須恵器蓋壺・壺、土師器壺・瓶破片が出土している。

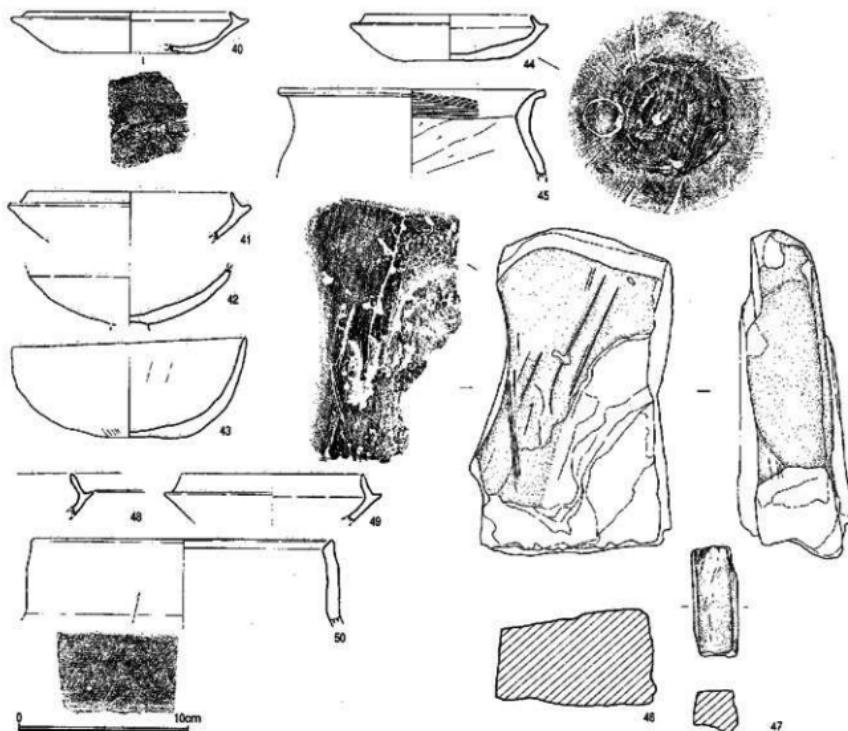
**出土遺物** (第18図 54~58) 54~56は須恵器蓋壺である。54はSC079出土破片と接合する。56は完形品で外底部はヘラ切りのまま未調整である。57は土師器壺の上半破片である。外面は縦刷毛、内面は縦方向に削り上げている。58は滑石製小玉である。

#### S C 0 9 1 (第17図)



第15図 SC079・080・081・082実測図 (1/60)

B区南端で検出する。SC092を切る竪穴で埋土は黒褐色土である。北側を搅乱で失っているため形態は不明瞭であるが、平面的には正方形を呈するものと考えられる。床面は平坦であるが柱穴等の施設は検出していない。土師器・須恵器小片が出土している。位置的な関係や遺構の類似性などからSC092に近接した時期の遺構と考えられる。



第16図 SC079・080・082出土遺物実測図 (1/3)

**出土遺物 (第18図 59)** 須恵器蓋坏である。図化できる遺物がほとんどなくこの1点のみであるが、SC092との関係からこの遺物は混入と考えられる。

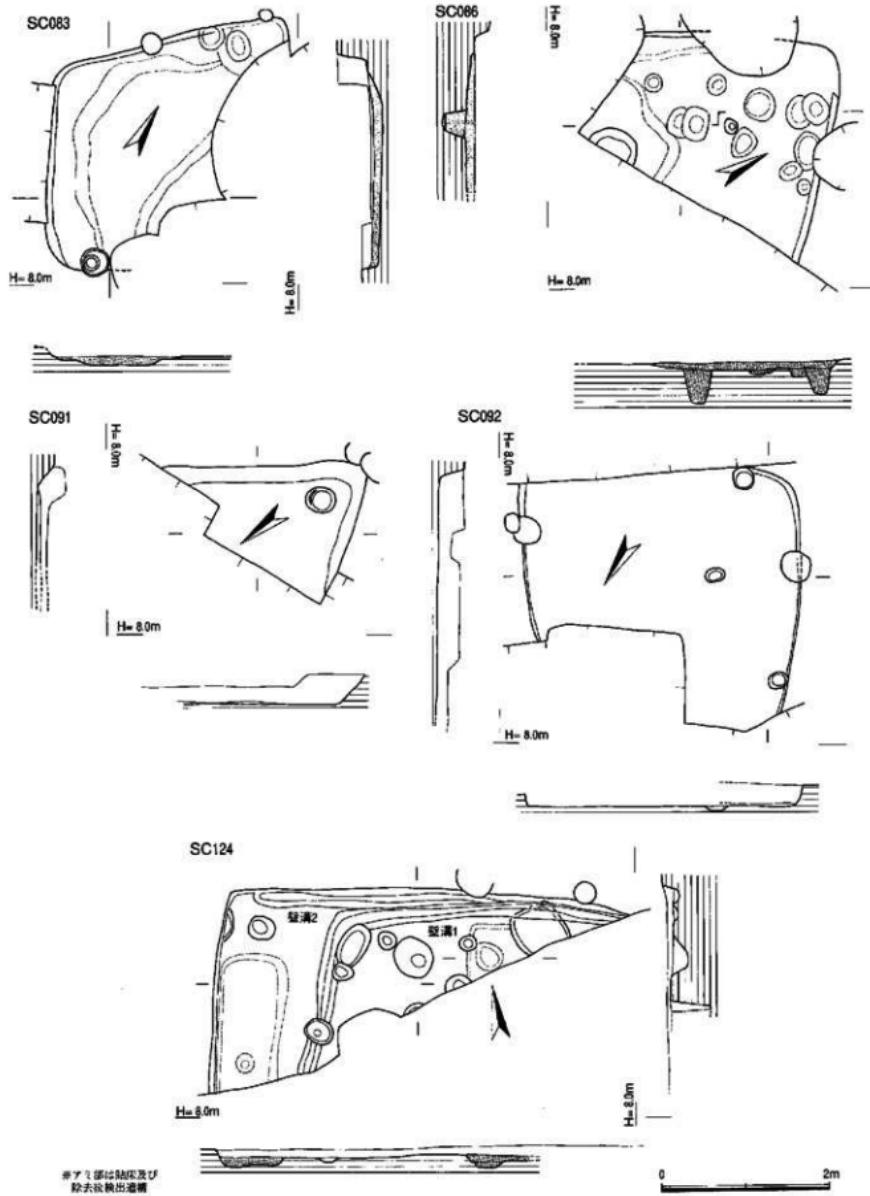
#### S C 0 9 2 (第17図)

B区南端で検出する。埋土は暗褐色土とロームの混合土で人為的な埋め戻しが考えられる。これもSC091同様で他の竪穴住居ことなり床面は平坦であるが柱穴などは認められない。平面的には一辺3.3mのややひずんだ方形を呈し壁はほぼ直立している。土師器・須恵器小破片が出土している。埋土・形状からSC091と類似した構造と考えられる。SC091・SC092とともに埋土・屋内施設が皆無であることなど竪穴住居とは異質である。時期的には小田編年の中期に対応する。

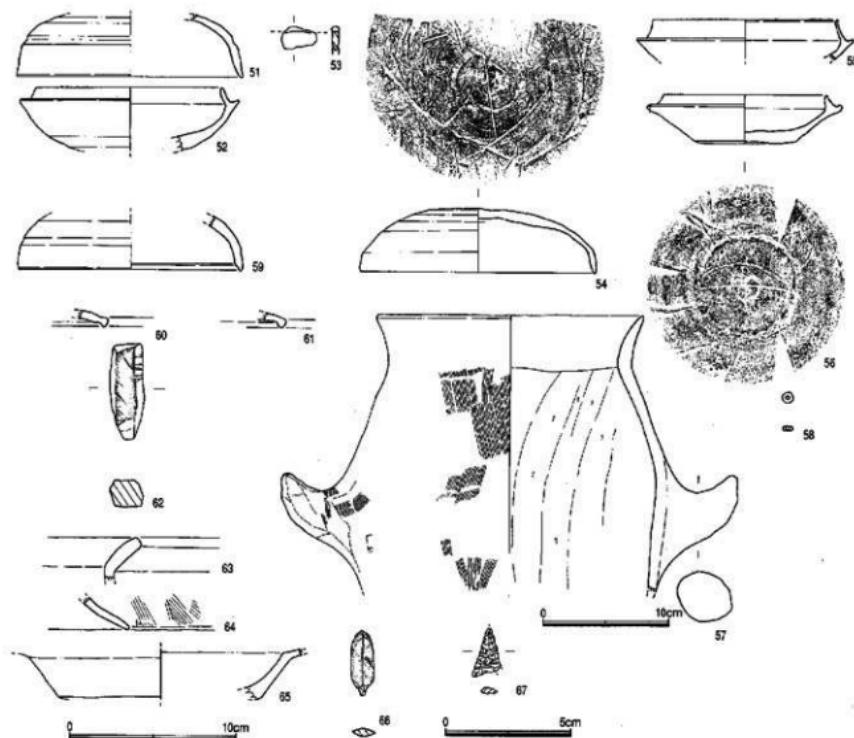
**出土遺物 (第18図 60~62)** 60・61は須恵器蓋の口縁端部である。端部をわずかに折り上げて断面三角形に作っている。62は粘板岩製の小型の砥石である。小口部分以外を底面としている。

#### S C 1 2 4 (第17図)

B区北西部で検出する。南側を搅乱により削り落とされ2/3が欠失する。当初一棟の住居として掘り下げを行ったが、床面まで掘り下げるところ壁溝が2条検出された。壁溝1が壁溝2を切っており



第17図 SC083・086・091・092・124実測図 (1/60)



第18図 SC083・086・091・092・124実測図 (67は1/2、57は1/4、その他は1/3)

竪穴住居の建て替えと考えられる。埋土は暗褐色土で平面的には切りあいは判別できなかった。貼り床はロームとの混合土で行なわれている。上柱は不明で焼土は認められなかった。遺物は小破片のみで弥生時代後期～終末に位置付けられる。

出土遺物(第18図 63～67) 63はぐく形を呈する甕の口縁部である。64は脚部の小破片である。65は高環の环屈曲部分である。66は五角形を呈する有茎の磨製石である。67は黒曜石製の石錐である。縄文時代の遺物であろう。

## 6. 上坑 (SK)

### SK001 (第19図)

A区東側で検出する。長軸95cm短軸50cm深さ25cmを測る隅丸長方形の土坑で、北側長側辺は掘り込みが広がり、壁がいったん斜めに掘削される。全体に壁は直立し底面は平坦である。埋土は汚れた暗赤褐色土である。遺物は小破片のみで時期不詳である。

### SK002 (第19図)

A区東側で検出する。長軸1.2m短軸55cm深さ30cmを測る隅丸長方形の土坑でSK001と主軸をほぼそろえている。西側に一段平坦面を有し東側が深くなっている。埋土はロームの混合土が主体で埋め戻しが行われたことが想定される。断面形態は異なるものの主軸方位をそろえていることや位置的な関係・埋土の類似性などからSK001と性格を同じくする土坑と考えられ、埋葬関連遺構の可能性もある。遺物は少量で時期は時期不詳であるが須恵器・土師器が含まれていないことから弥生時代の遺構と考えておきたい。

**出土遺物** (第21図 68) 手づくねの椀である。胎土には微砂粒が含まれ赤褐色を呈する。

**SK 0 0 9** (第19図)

A区中央西寄りで検出する。長軸1.25m短軸90cmを測る隅丸長方形の土坑で埋土は暗黄白色土である。壁は深さ20cmを測り直に掘り込まれているが、底面は西側がややいびつに深くなり、その部分から甕棺の底部などの土器片が出土している。周間に甕棺が3基検出されており、甕棺の抜き跡の可能性が考えられる。

**出土遺物** (第21図 69・70) 69は大型の壺の口縁部である。端面に刺突による施文が行われる。70は微砂粒を多く含む甕の底部破片である。焼成は良好で明赤褐色を呈する。弥生時代中期中頃以後の甕棺の底部であろう。

**SK 0 1 0** (第19図)

A区中央西寄りで検出する。搅乱により(長)方形土坑の西側コーナーのみが残存する。壁は深さ15cmを測り掘り方は直立し底面は平坦である。埋土は黒褐色土である。貯蔵穴としたものの中に形状の似るものがあるが(SU028・029)、現状では貯蔵穴とする根拠も薄いため土坑として報告する。遺物は少量で時期は不明瞭であるが弥生時代に位置付けられるであろう。

**SK 0 1 1** (第19図)

A区中央西寄りで検出する。搅乱により北側の隅丸のコーナーのみが残存する。壁は深さ20cmを測り底面は中央に向かって緩くくぼむ。埋土はローム小粒混じりの黒褐色土である。遺物は少量で上器片とともにスサ入りの整体塊が出土する。弥生時代に位置付けられるであろう。

**出土遺物** (第21図 71) 甕の底部破片である。外面に一部条痕が残る。

**SK 0 1 2** (第19図)

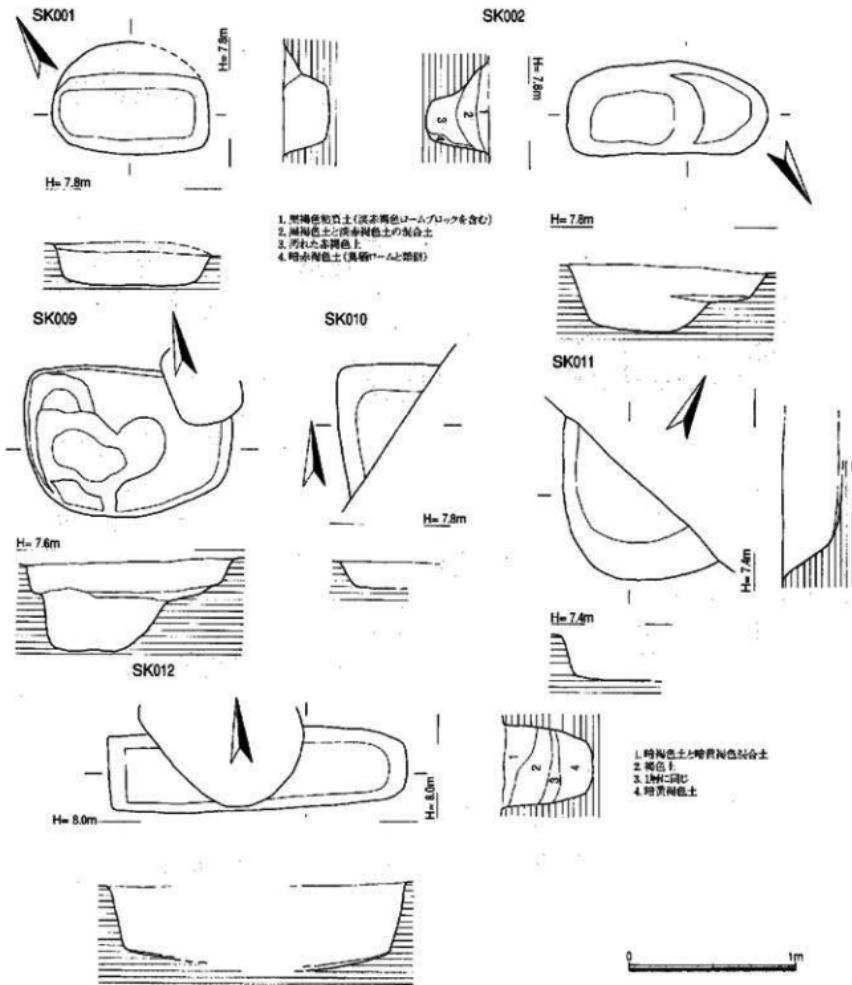
A区西側で検出する。長軸1.8m短軸50cmを測る狭長な土坑である。平面形は西側小口が角張り東側が丸く收まる舟形をなしている。また埋土は混合土・ロームが主体となっており掘削後に人為的に埋め戻したものと考えられる。遺物はほとんどなく時期不明であるが埋葬遺構の可能性がある。

**SK 0 3 0** (第20図)

A区西側で検出する。長軸1.5m以上短軸1m深さ20cmを測る。当初貯蔵穴との切り合いを逆転させていたため規模が不明確になっている。埋土は上半が暗褐色土、下半が暗黄白色土で、上半から甕棺の破片が出土している。弥生時代中期後半以降の土坑である。

**SK 0 4 6** (第20図)

A区西側で検出する。やや不正な長方形を呈し複数の土坑の切り合いとも考えられる。土層観察の結果平面で確認できなかった柱痕跡(径40cm)が認められた。これを柱穴として捉えると本報告のSP015・50次調査のSK10が柱間3.5m~4mでほぼ並ぶこととなる。これは大型の建物であるSB034を超える規模となり主軸方向はほぼ同じである。ただこのラインから東西の方向に折り返す柱穴が確認できないため今回は土坑の項で報告を行った。出土遺物には土師器・須恵器があり小田編年Ⅲb~Ⅳ期に対応する。

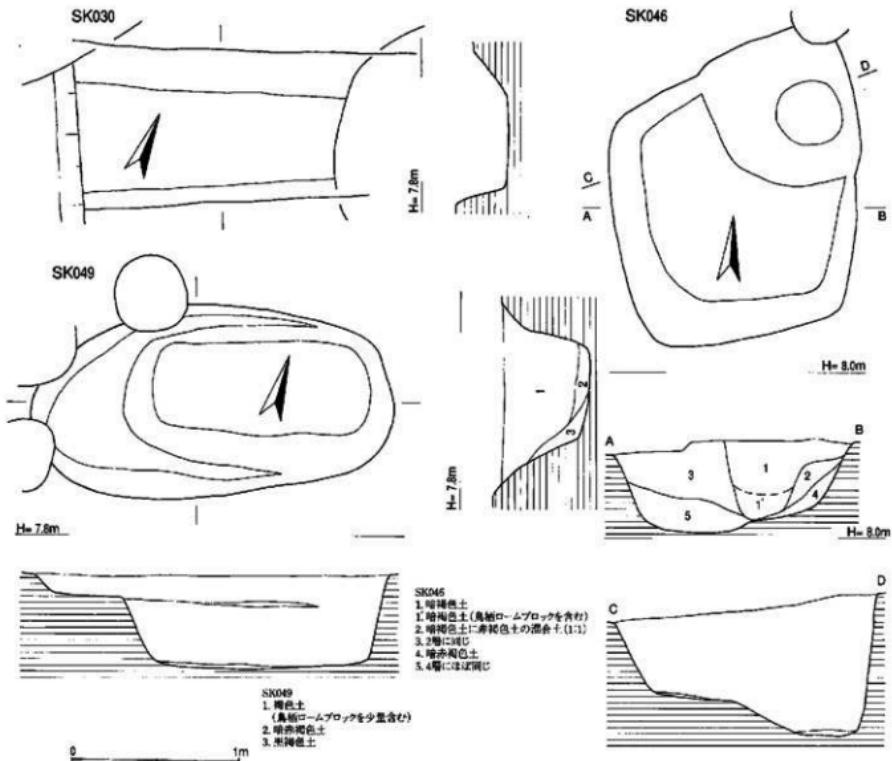


第19図 SK001・002・009・010・011・012実測図 (1/30)

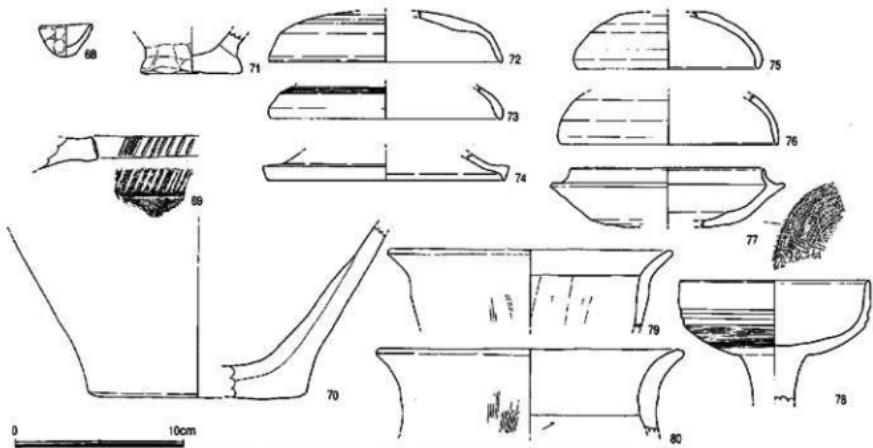
出土遺物（第21図 72～74） いずれも須恵器である。72は回転ヘラ削りを行い、73はカキ目を有する。また74は脚壠部分の破片である。

#### S K 0 4 9 (第20図)

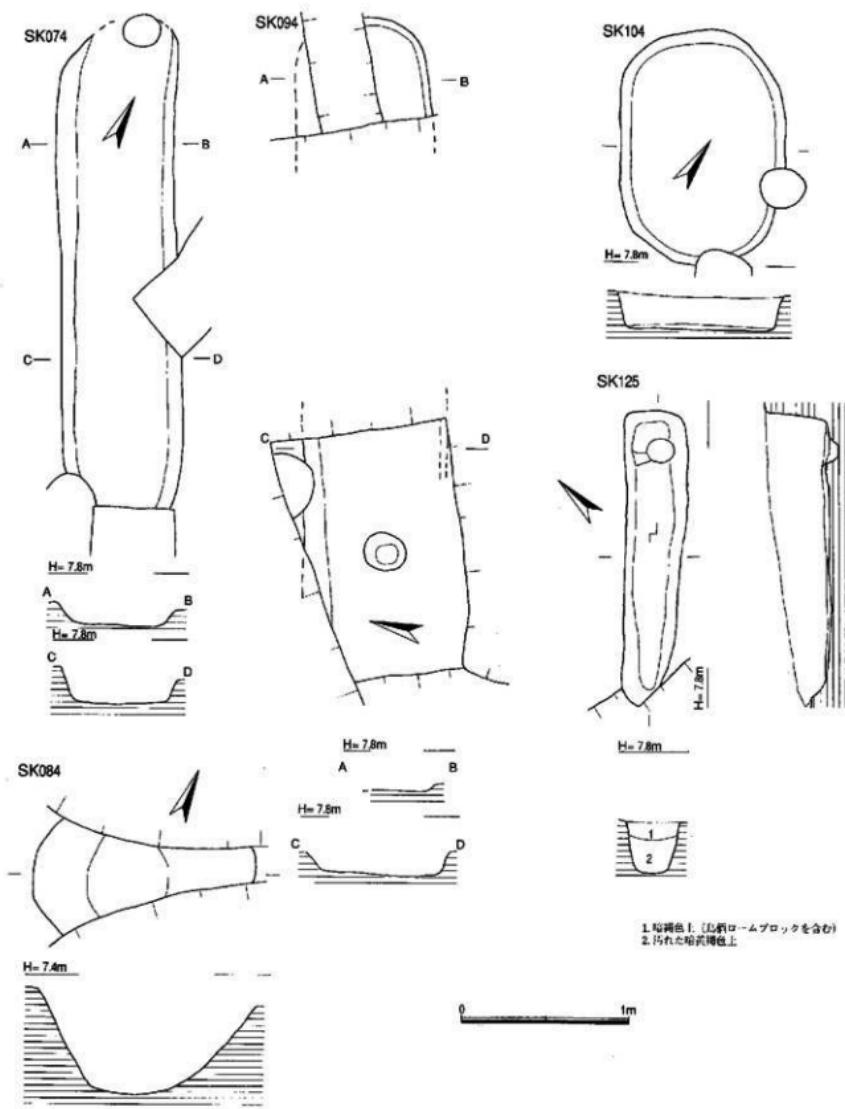
A区西側で検出する。長軸2.2m短軸1.2mを測る。西側に1段平坦面を有し東側が更に深く箱型に



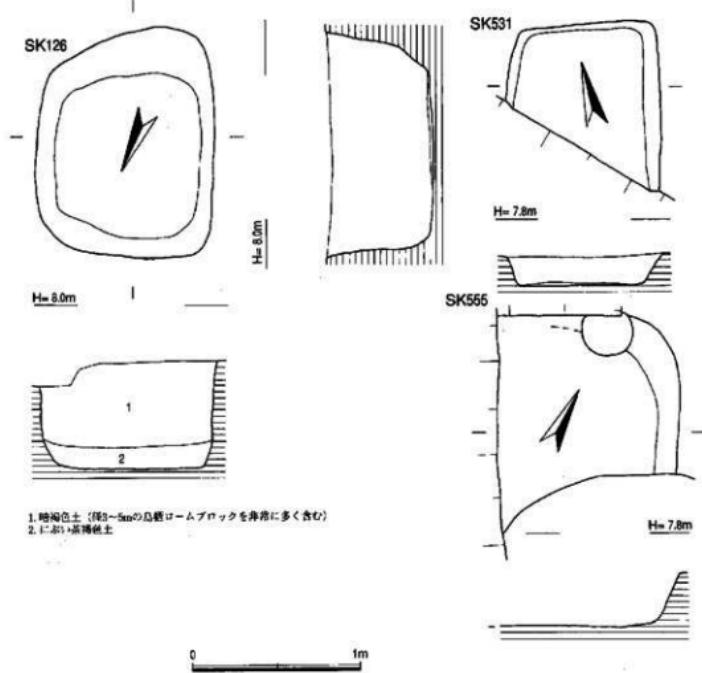
第20図 SK030・046・049実測図 (1/30)



第21図 SK002・009・011・046・049出土遺物実測図 (1/3)



第22図 SK074・084・094・104・125実測図 (1/30)



第23図 SK126・531・555実測図 (1/30)

掘削される。埋上は褐色土主体で1層から須恵器が出土している。小田編年のIV期に対応する。

**出土遺物 (第21図 75~80)** 75~78は須恵器である。75は天井部はヘラ切りのち未調整である。77は回転ヘラ削りを行う。78は無蓋の高環で外底部にカキ目を施す。79・80は土師器壺である。

#### S K 0 7 4 (第22図)

C区東側で検出する。長軸約3.2m短軸70cmを測る溝状の土坑である。深さは20cmほどで底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色上でSC081を切る。土師器壺・把手、須恵器壺蓋・壺が出土する。小田編年のVII期に対応する。

**出土遺物 (第24図 81~84)** いずれも須恵器である。82は扁平なつまみを有する。83は低平な高台を屈曲部近くに貼り付ける。84の壺には波状文が施される。

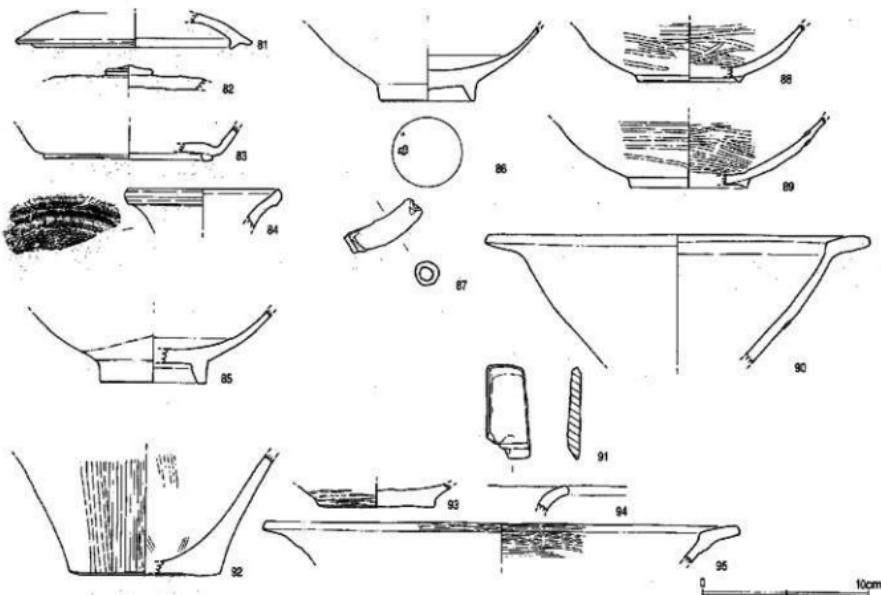
#### S K 0 8 4 (第22図)

C区東側で検出する。上面径1.3m底面径50cmを測る平面略円形の土坑である。埋土はべたべたした黒灰色土である。白磁、同安窯系青磁破片が出土する。12世紀後半に位置付けられる。

#### 出土遺物 (第24図 85) V類の白磁碗である。内底面に沈線が巡る。

#### S K 0 9 4 (第22図)

C区東側で検出する。長軸3.7m以上幅1mを測る溝状の土坑である。深さは10cmほどで底面はほ



第24図 SK074・084・094・104・126出土遺物実測図 (1/3)

ば平坦で凹凸はない。埋土は暗褐色土でロームブロックの混入はない。上師器、瓦器、陶器、白磁が出土する。中世前半期の11世紀後半～12世紀に位置付けられる。

**出土遺物 (第24図 86～89)** 86はV類の白磁碗である。外底面に粘土塊が付着する。87は短軸陶器の注口である。胎土は精良で灰白色を呈する。88・89は丸器碗である。

#### S K 1 0 4 (第22図)

B区西側で検出し、SU105・106を切る。長軸1.4m短軸1mを測る平面小判形の土坑である。深さは20cmほどで底面はほぼ平坦で凹凸はない。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。遺物は小破片のみで弥生時代中期に位置付けられる。

**出土遺物 (第24図 90・91)** 90は鉢である。口縁部はやや内傾し断面逆L字形に仕上げる。91は凝灰岩製の磨製片刃石斧である。

#### S K 1 2 5 (第22図)

B区西側で検出する。長軸1.8m短軸35cmを測る狭長な土坑で、一方の小口は角張り対反側は丸くする船形の平面形を呈する。底面には緩やかな凹凸があり北東側小口が一段掘り窪められる。2層からは人為的な埋め立てが想定できる。規模・形状はSK012に類似し、土坑墓の可能性が考えられる。遺物は細片が少量で時期不明であるが須恵器破片は出土していない。

#### S K 1 2 6 (第23図)

B区西側で検出する。長軸1.4m短軸1.1mを測る平面略長方形土坑である。深さは70cmで壁は直立し底面は平坦である。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。遺物は黒曜石剝片および土器

小破片のみで弥生時代中期に位置付けられる。

出土遺物（第24図 92～95） 92は甕底部である。外面に縦方向の刷毛目が残る。93は壺の底部である。94は如意形の甕口縁部である。95は鍔状を呈する壺の口縁部である。外面は剥落しているが内面には横方向の磨きが残る。

#### SK 531 (第23図)

A区西側で検出する。擾乱で西側を欠失するが幅1mを測る土坑である。深さは20cmで底面は平坦である。埋土は暗褐色土である。形状はSK010に非常によく似る。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。遺物は土器小破片のみで時期不詳である。

#### SK 555 (第23図)

A区西側で検出する。SU050および擾乱でコーナー部分のみ残存する。擾乱で西側を欠失するが幅1mを測る土坑である。深さは30cmで底面は平坦である。遺物は小破片1点のみで時期不詳である。

### 7. 溝 (SD)

調査区南側段落ち以下の八女粘土露出部分で溝を4条検出する。いずれもほぼ東西方向に伸びており台地の傾斜に平行して掘削されている。

#### SD 062 (第25図)

切り落とされた下段の中央を東西に掘削された溝である。断面形は東側が皿状で西側は逆台形を呈する。埋土には砂性土が不規則に混入しており流水のあったことがわかる。土師器、須恵器、陶磁器が出土しており、12世紀後半～13世紀の埋没と考えられる。

出土遺物（第26図 96～105） 96～100は白磁である。96は高台付き皿である。外面下半は露胎となる。97～100はIV類・V類の碗である。101は龍泉窯系青磁碗である。102は陶器壺の底部である。外底面に「林」と墨書きされる。103は糸引きで板状压痕が残る土師器小皿である。104は瓦器碗である。105は土師器で摩滅のため調整は判然としないが内面は黒褐色を呈する。

#### SD 063 (第25図)

C区下段の東端で検出する。SD062に切られている。土層観察からSD063を掘りなおしてSD062を掘削したものと考えられる。図示していないが白磁の細片が出土しておりSD062と近接した時期の溝であろう。

#### 出土遺物（第26図 106・107） いずれも須恵器蓋である。106はボタン状のつまみを有する。

#### SD 064 (第25図)

C区下段の東端で検出し、SE065・SD062に切られている。断面浅皿状の溝である。出土遺物には陶磁器は含まれていないが造構の位置的な関係からSD063・064と同様の時期に属する可能性が高い。

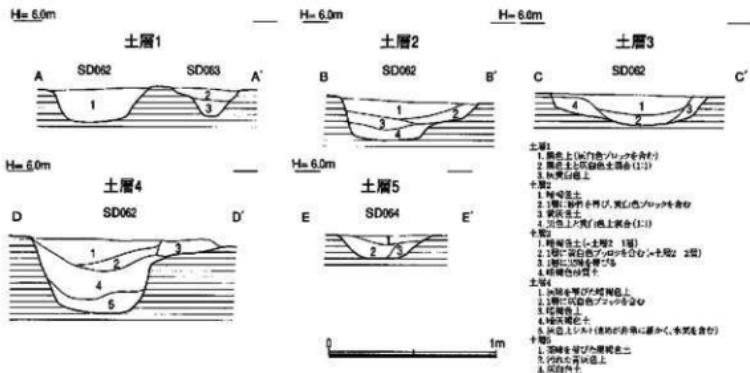
出土遺物（第26図 108・109） いずれも須恵器である。蓋は断面三角形に折り曲げるもので、坏は低平な高台を屈曲部近くに貼り付ける。

#### SD 069 (第6図)

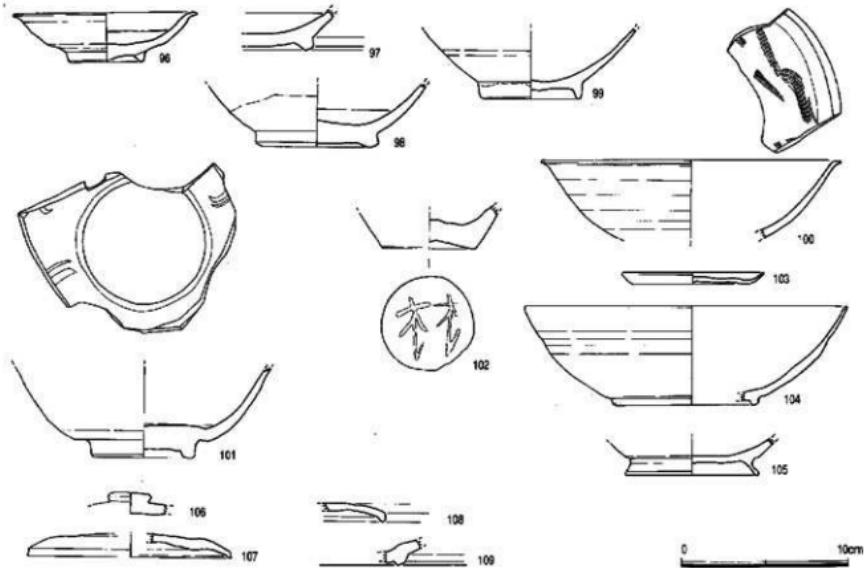
台地の崖際沿いに伸びる。断面台形を呈し溝底には径3cmほどの杭を打ち込んでいる。染付けを含むB区谷部埋土を切り込んでおり近世以降の掘削と考えられる。

### 8. 井戸 (SE)

井戸は16基検出している。時期的な内訳は弥生時代8基、古墳時代2基、古代4基、中世2基である。弥生時代の井戸は調査区の中央部でまとまって検出されている。対応する住居跡は未検出で削平



第25図 SD062・063・064土層図 (1/30)

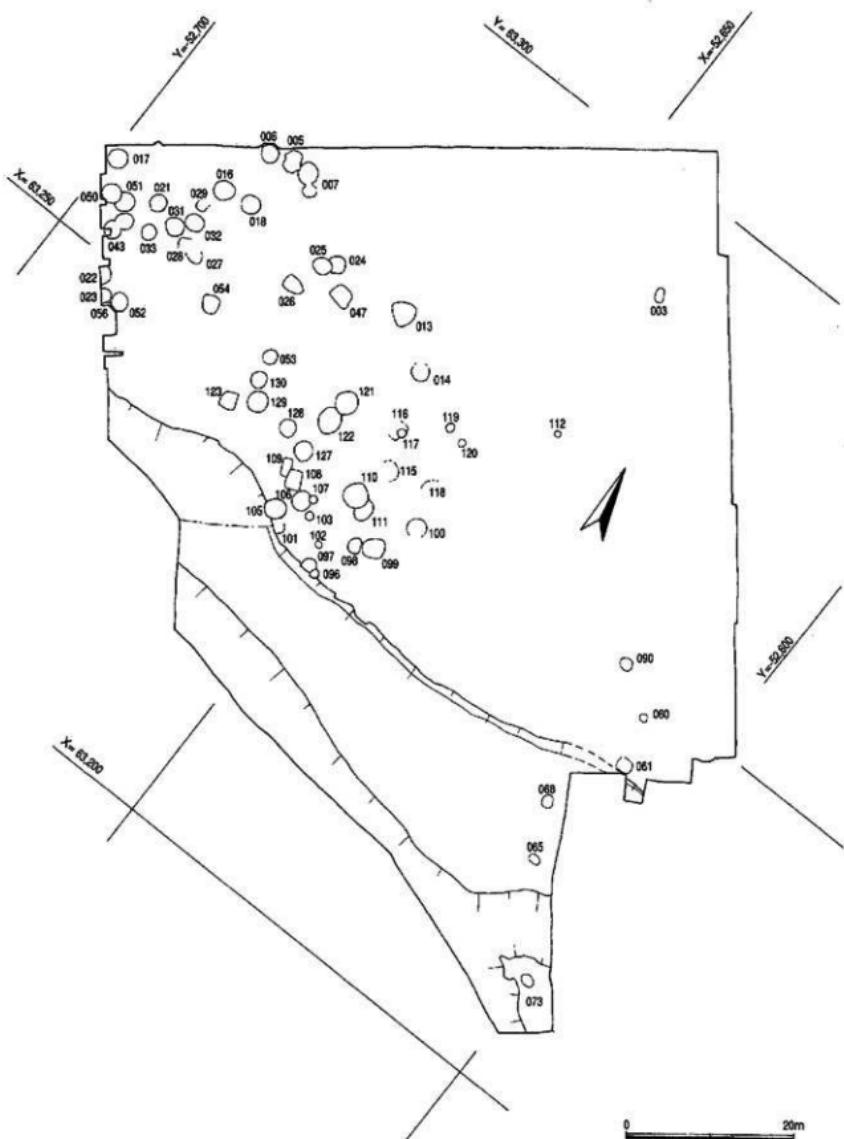


第26図 SD062・063・064出土遺物実測図 (1/3)

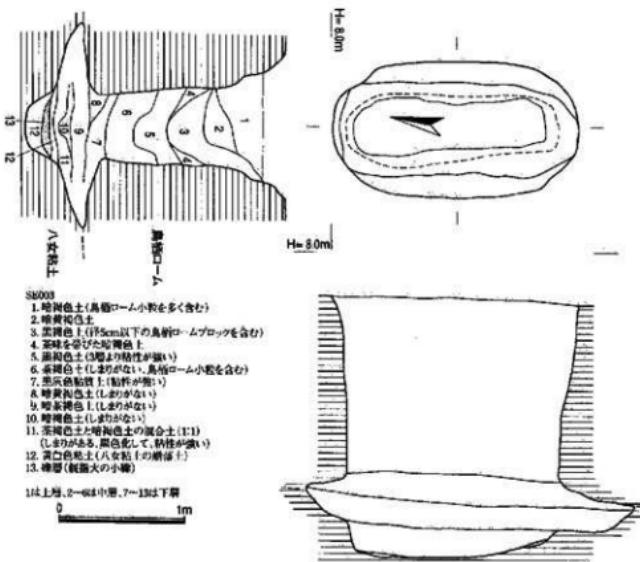
そのため井戸のみが残っている。また中世の井戸は南側に比較的かたよっている。

### S E 0 0 3 (第28図)

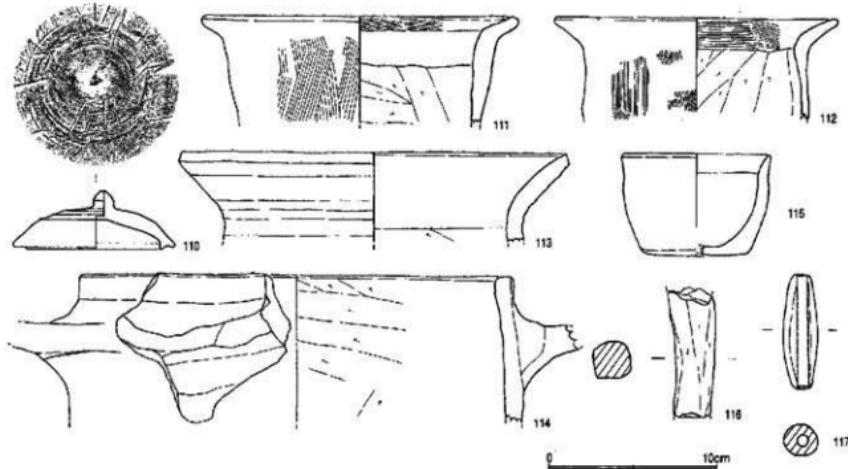
A区東端で検出する。周囲の遺構はほとんど削平されているがこの井戸の東側に主軸をほとんど同じくするSAI31が存在する。関連する遺構の可能性も考えられるが他の状況が不明瞭で可能性にとど



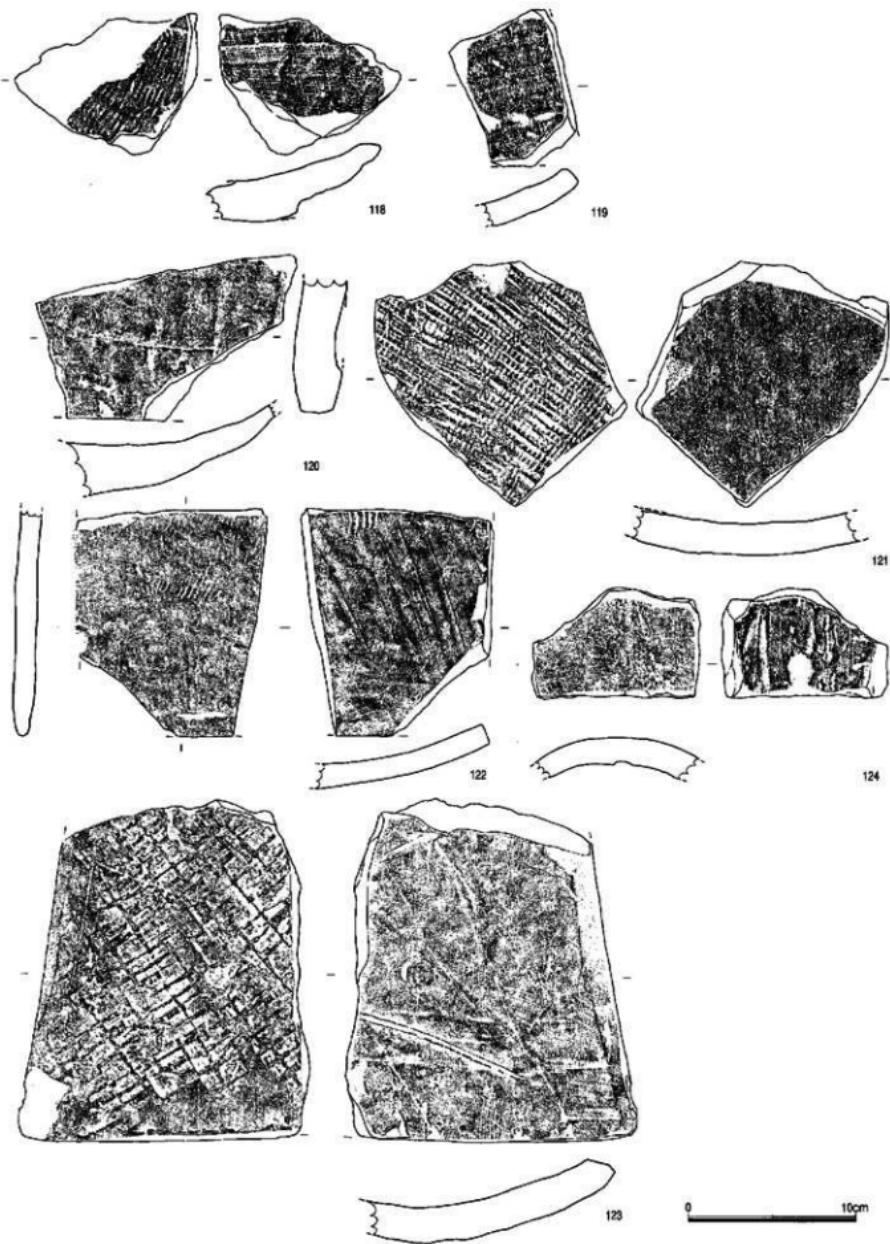
第27図 井戸・貯蔵穴配置図 (1/600)



第28図 SE003実測図 (1/40)



第29図 SE003出土遺物実測図 1 (1/3)



第30図 SE003出土遺物実測図 2 (1/3)

めたい。平面は小判形を呈し長軸2m短軸1.1m検出面からの深さ2.1mを測る。掘り方はやや内傾気味で標高6m付近の鳥栖ロームと八女粘土の境で大きく抉れている。埋土は1層から6層まではしまりがなくロームをブロック上に含んでおり人工的な埋め戻しを示す。また抉りこみの下端部分には八女粘土の崩落土にはさまれて13層(2~3cm大の小礫)が全体に敷き詰められたような状態で広がっている。水の清浄化を意図した濾過装置であろうか。土師器甕・壺・須恵器环蓋・甕・瓦、桃の種4個が出土する。小田編年のV期に対応する。

**出土遺物 (第29・30図)** 110は宝珠形のつまみを有する完形の蓋である。天井部には回転ヘラ削りを行いつら記号を有する。111~113は土師器甕である。111・112は外面刷毛日内面ヘラ削りにより、113は須恵器を模した甕である。114は甕の破片である。115は指なでによる小型の鉢である。116は棒状の土師器の把手であろうか。粗い削りで面取りを行う。117は土鍤で21gを測る。118~123は平瓦である。118~120・123には凹面に横骨痕と布日が残る。凸面は118が平行の叩き、121・123が格子状の叩き、122がなでを行っている。また118・121・122は須恵質である。124は土師質の丸瓦で凹面は縱方向の指なでを行い、凸面には削り状の痕跡が残る。

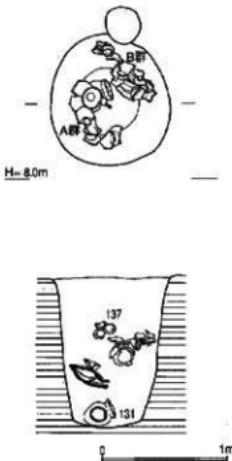
#### S E 0 6 0 (第31図)

C区東側で検出する。平面形は径約1mの円形を呈し、検出面からの深さは1.1mを測り掘削は八女粘土上に立る直前の鳥栖ロームでとどまる。埋土は検出面から80cmまでは暗褐色土、以下はやや砂性を帯びた灰褐色土である。遺物は完形庄内甕(131)が底面に横置きされ、他に上層から脚付きの三連の壺(137)が出土する。また底面よりやや浮いてA・B群の土器群が検出されているが、A群は甕(132~135)B群は甕(126~130・136)で占められており、器種ごとに分けて投棄している様子がわかる。古墳時代前期に位置付けられる。

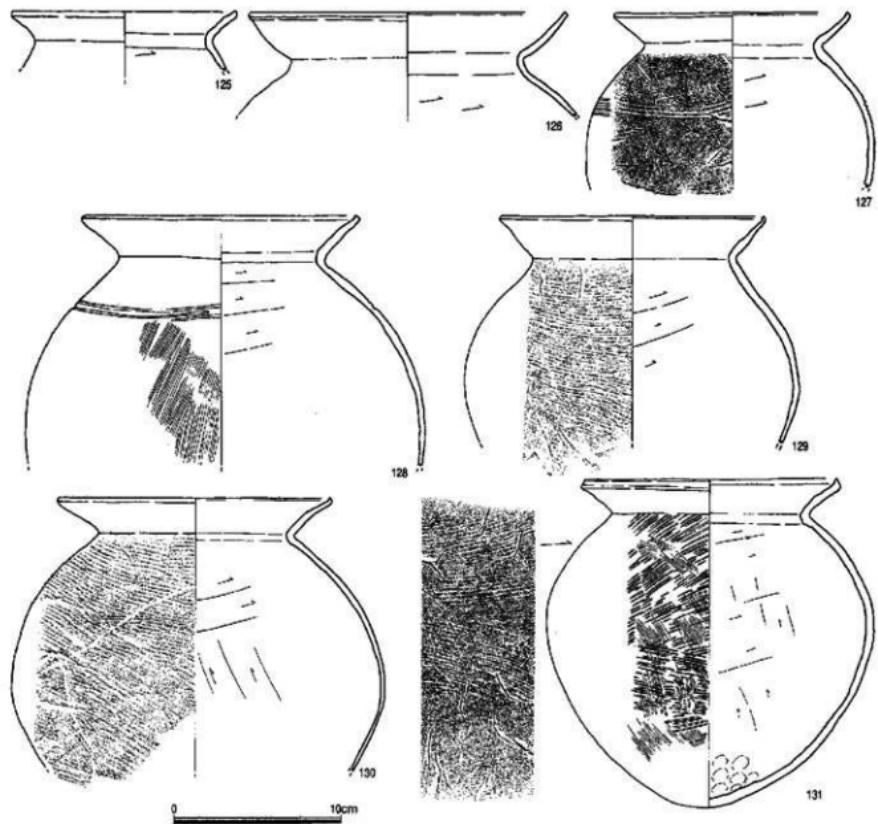
**出土遺物 (第32・33図)** 125は庄内甕である。口縁端部は断面三角形に仕上げる。126~131は甕である。いずれも内面は指押さえと削りを行う。126は摩滅のため外面の調整が不明である。127は縦刷毛のち叩きにより肩部に3~4条の沈線状の意匠をつける。128は摩滅が進み縦刷毛のみで叩きの痕跡が確認できない。129・130は叩きによる整形を行い、右下がりの丁寧な叩き痕が残る。129では刷毛目が観察できないが130では下半の一部に縦刷毛を行っている。131は底面出土の完形品で叩きの後に粗い縦刷毛を行う。132は五様式系の壺である。底部に木葉痕が残る。133~135は広口壺である。134・135では外面は縦刷毛の後に表面を削って整形している。また内面は134は刷毛の後にヘラ削りを行い、135は指押さえの後に全体に刷毛目を施す。136は二重口縁の甕である。胴部は球形を呈し肩部に沈線を施す。胴部外面は刷毛、内面は削りによって整形する。137は脚付きの三連壺とでもいうような土器である(巻頭写真)。精製された小型壺3個体を三角形に配置し壺間を精製粘土で充填接合し、中央部に別作りの短脚を接合したものである。各壺が接する部分では胴部の最大径の位置計3箇所に穿孔が行われる。

#### S E 0 6 1 (第34図)

C区東側で検出する。平面形は一辺1.7~1.9mの略方形を呈する。トレーナにより上面をとばしてしまったため検出面からの深さは2.6mとなっているが本深はさらに1.3mほど上で検出できたものである。



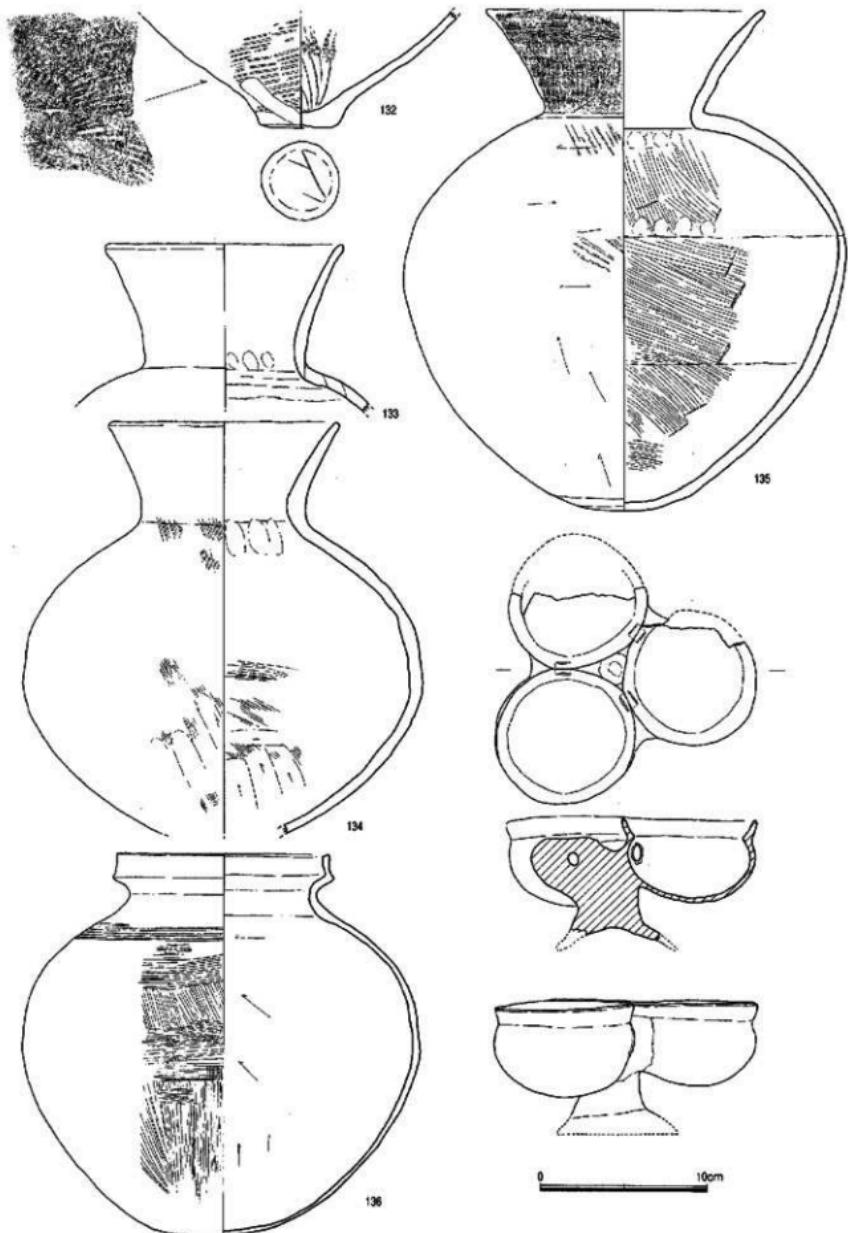
第31図 SE060実測図  
(1/40)



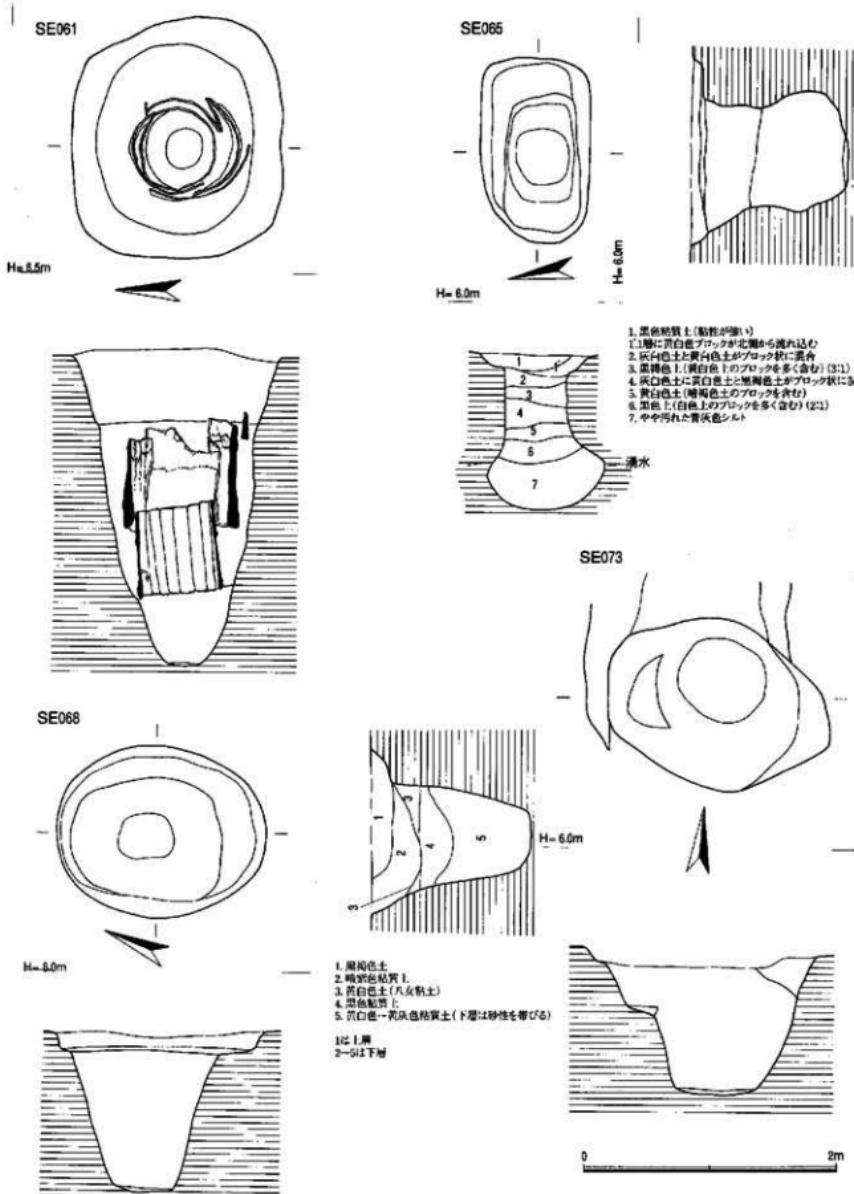
第32図 SE060出土遺物実測図1 (1/3)

掘り方は内傾し底に向かってすばまっており底径は20cm程となる。検出面から60cmほど掘り下げたところで井筒を検出する。井筒は2段に組まれており、上段は長さ80cm以上に切断した自然木の内側を例り抜き1/4程度に分割したものと組み合わせ、下段は幅10cm長さ70cm厚さ3cm程度の板材を18枚使用して桶を作っている。桶の外側には上から25cmのところと最下部の2ヵ所に竹でたがを巻いている。井筒材はいずれも原材の表皮を残しているが内面は非常に平滑に作っている。また下段の井筒から底までは素掘りとなっている。埋土は井筒内が粘性の強い黒色土で埋土下位になると草木・葉などが多く遺存しヘドロ状となり、掘り方部分は径5~10cmの赤褐色土ブロックを含む黒褐色土である。白磁、青磁、瓦器、土師器壺・皿、瓦、木製品および土中からおよそ5mm角のベンガラ塊が出土している。12世紀後半に位置付けられる。

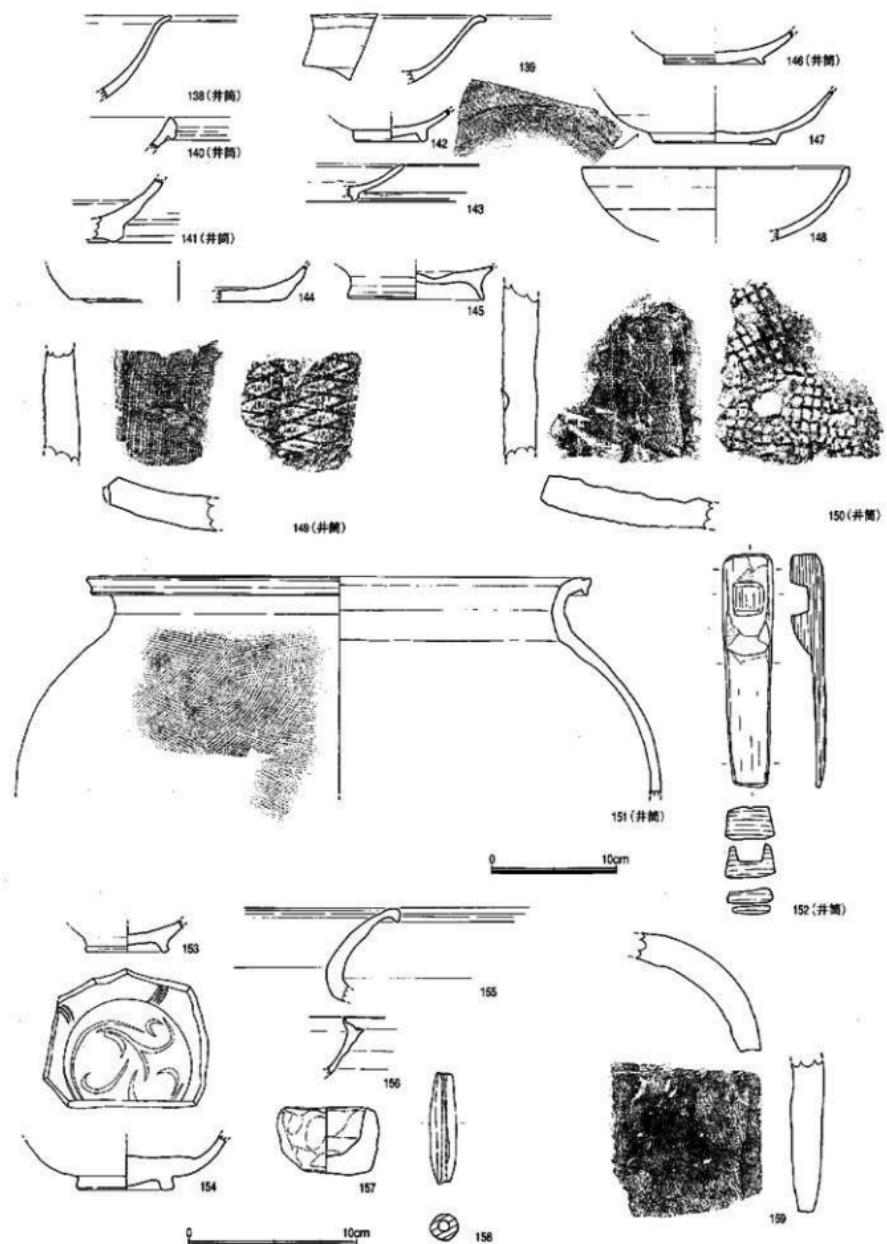
**出土遺物** (第35図 138~152) 遺物は井筒と掘り方に分けて取り上げを行い井筒出土品には遺物



第33図 SE060出土遺物実測図 2 (1/3)



第34図 SE061・065・068・073実測図 (1/40)



第35図 SE061・065・068・073実測図 (151・152は1/4、その他は1/3)

番号の後ろに明記する。138～143は白磁である。138・139はV類の碗である。140・141はIV類の碗である。142・143は高台付き皿である。142は外面の高台や上側から露胎となり高台は細く高い。143は内底面の釉を輪状に搔きとる。146～148は瓦器様である。147は全面に丁寧な磨きが行われヘラの単位が観察できない。また外面には屈曲部に刷毛目状の痕跡が残る。144は土師器环である。外底面は糸引きを行う。145は土師器高台付き环である。149・150は須恵質の瓦である。149は凹面に布目が残り、凸面には菱形の擬格子状の叩きを行う。150は凹面に布目が残り、凸面には格子状の叩きを行う。151は須恵質の甕である。口縁部は強く外反し端面は丁寧に面取りを行う。胴部外面は叩きによるが平行叩きを横方向に全体に行つた後に斜めに方向を変えて叩きなおしている。内面は頸部付近の剥落が著しいが、胴部は当て具痕を丁寧になで消している。152は杉材の木製品である。長さ18.7cm幅4.1cm基部厚2.7cm先端部厚8mmを測る。基部には長さ2.5cm方形孔が穿たれるが厚みの半分程度まで貫通していない。基部および先端部分に使用時の圧による仕様痕が見られ風呂鎌の袋部分に挿入して使用したものと考えられるが、孔が貫通していないことから鉄製鎌先部分に繋縛用の孔があいておりこれによって柄との装着部分を固定したものと考えられる。

#### SE 065 (第34図)

C区南端部分で検出する。長軸1.5m短軸0.8mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは1.2mである。検出面は削平により八女粘土が露出しており、検出面から90cm(標高4.7m)で湧水する。埋土は湧水ラインまでは混合土が主体で最下層には比較的均質なシルトが堆積している。遺物は少量で土師器・須恵器小片および青磁・白磁が出土する。

出土遺物 (第35図 153・154) 153は須恵器の高台付き环である。高台は高くやや外方に張り出す。154は龍泉窯系青磁碗である。内面に劃花文を施す。釉調はオリーブ色を呈する。

#### SE 066 (第34図)

C区南端部分でSE065の北側で検出する。長軸1.9m短軸1.4mの長円形を呈し、検出面からの深さは1.3mである。検出面から70cm(標高4.7m)で湧水する。形態はSE073によく似るが埋土は異なっている。土師器甕・把手・土鍤・須恵器蓋・高环が出土している。出土遺物からは小田編年のIV期に対応する造構と捉えられる。また桃の種子が10個出土している。今回の調査で桃の種子が確認できたのはこの他にはSE003のみであり注目される。

出土遺物 (第35図 155～158) 155・156は須恵器である。155は甕の口縁部である。端部は強く外反させた後に下方に垂下させ断面三角形に仕上げる。156は坏身で蓋受けの立ち上がりは短い。157は手づくねの碗である。胎土は精良で色調は黄白色を呈する。158は上鍤である。重量は16gを測る。

#### SE 073 (第34図)

C区南端で北側の台地とは谷を隔てた南側の台地上で検出する。長軸1.8m短軸1.4mの長円形を呈し、検出面からの深さは1.2mである。検出面は削平により八女粘土が露出しており、本来の井戸の最下部が現れているものと考えられる。検出面から90cm(標高4.3m)で湧水する。埋土は灰褐色粘質土で粘性が強い。遺物は少量で瓦・土師器小片が出土するのみである。

出土遺物 (第35図 159) 須恵質の丸瓦である。凹面は布目を残しその上から粗くなつけている。凸面は横方向に丁寧になでている。

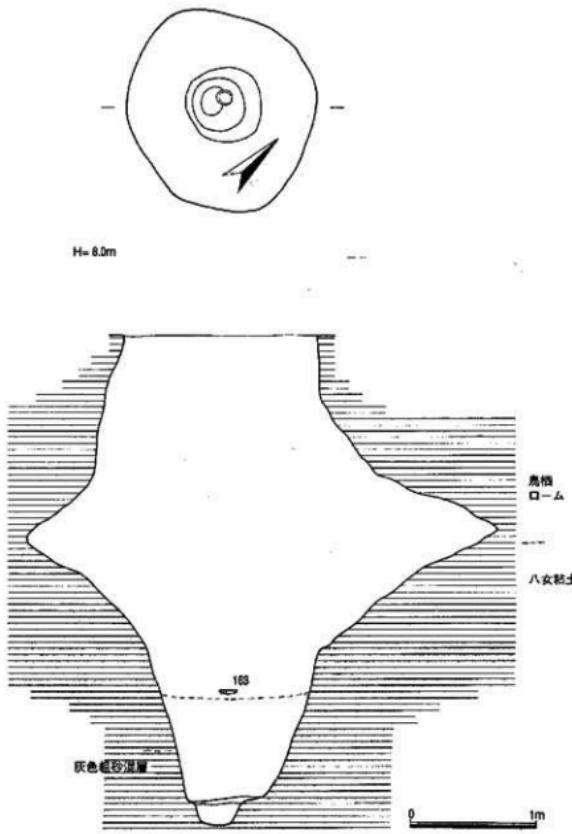
#### SE 090 (第36図)

B区南東端で検出する。検出面での平面は略円形を呈し径1.5m～1.6mを測り、検出面からの深さは4mである。井筒の痕跡はなく素掘りの井戸と考えられる。掘り方はやすぼまりながら底面にいたり、鳥栖ロームと八女粘土の境で大きく抉れている。埋土は検出面から1m程(1層)は粘性の強

い暗灰色上で1m～1.9m（2層）にはロームブロックが多く含まれる。また抉りこみ以下の、検出面から1.9m～2.9m（標高5.5m～4.5m）の埋土には土器および木製品を多く含んでいる。このブロック混じりの層を除去した標高4.5mのレベルで完形の上師器壺が1個体ほど中央部に正置されており、この壺の内底面には焼成前に漢字の「新」が刻まれている。またこのレベル以下は底面まで八女粘土の崩落である白色土が堆積し遺物はまったく含まれていなかった。遺物は土師器壺・甕・把手・竈、須恵器甕・壺、白磁、青磁、木製品がコンテナに8箱出土している。また種類未詳の種子が数点出土している。9世紀前半代の埋没と考えられる。

**出土遺物（第37～40図）** 160～181は3層出土、182から191は2層出土、192から227は1層出土、228～235が層位不明である。160・161は須恵器の高台付き壺である。高台は直立し屈曲部よりやや内側に貼り付けられる。162は黒色土器Aの椀である。163～180土師器である。163～165は皿である。い

ずれも外底面はヘラ切り、内面は回転なでである。163は井戸中に掘えられていたものである。内底および外底面は還元化し青白色を呈し、口縁部は橙色である。内底面に漢字の「新」が焼成前にヘラ書きされている。166～171は壺である。外底面はいずれもヘラ切りによる。口径は12cm～14.4cmである。172～175は椀である。173は内面回転なでを行い燃して黒色化する。174・175は椀内部が深くなり口縁部はラッパ上に開く。176・177は甕である。口縁部内面～外面は刷毛を行い、胴部内面は斜めに削り上げる。178～180は竈底部である。底の整形は178・179が丸く仕上げ、179は内側に張り出している。調整はいずれも外面縦刷毛、内面は基底が横なのでその上方からヘラ削りを行う。178・180には内面に煤が付着している。181は把手付きの小皿である。胎土は精選され外面暗赤褐色、内面には



第36図 SE090実測図 (1/40)

煤が付着し淡黒褐色を呈する。灯明用であろうか。

182は黒色上器Aの椀である。183~189は土師器である。183・184はヘラ切りの坏である。185~187は椀である。185は内面に煤が付着する。187は大型品で胴部下半には回転ヘラ削りを行う。188・189は甕である。188はほぼ完形で底部を除いた外面全体に煤が付着している。190・191は砥石である。

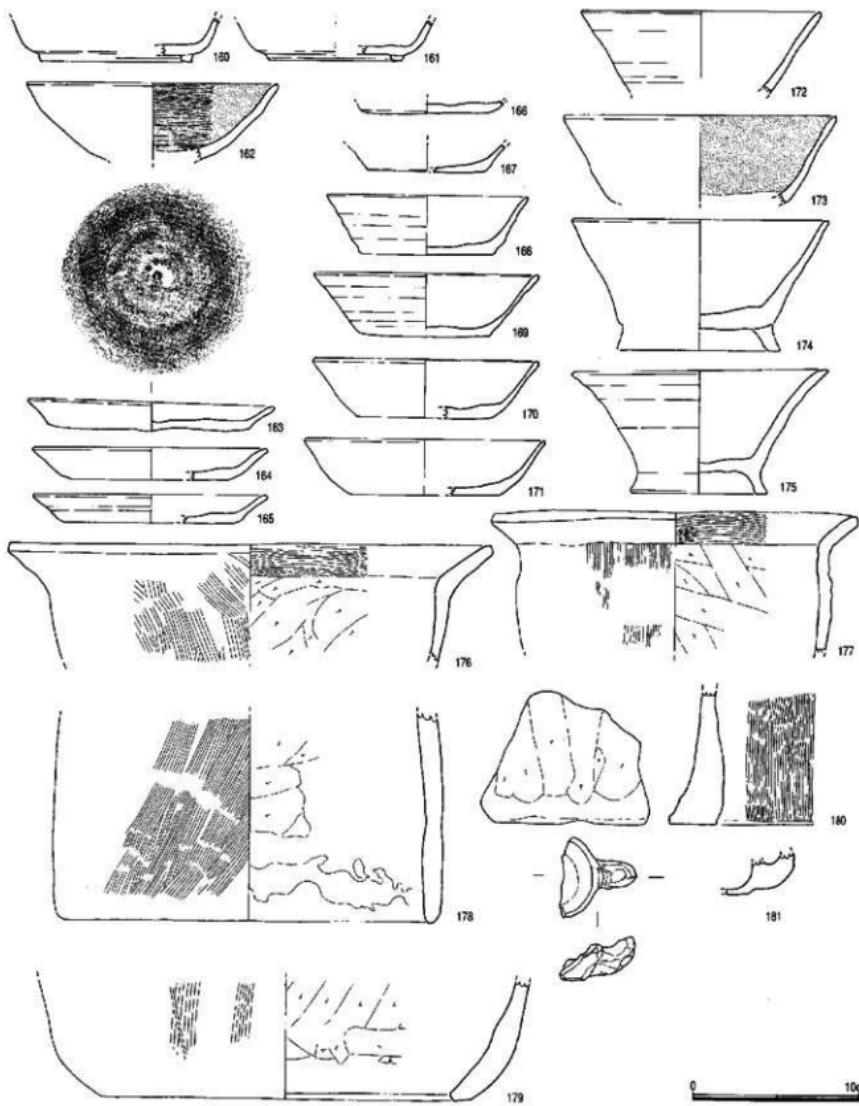
192・193は精製された越州窯系青磁碗である。192は胎土が灰白色で緻密である。外面は無文で内面に花文が施される。高台は蛇の目高台で高台手前まで施釉する。また高台疊付きおよび内底面には目跡の痕跡が残る。193は碗の底部周辺を打ち欠いて円盤状に整形したものである。胎土は黄灰色で緻密である。192より径の小さな蛇の目高台を有し、全面に施釉されている。194は白磁T類の碗である。小さな玉縁を有する口縁部小破片で、胎土は緻密な白色を呈し薄く施釉され買入は見られない。195は陶器の壺である。外面に自然釉がかかる。196は黒色土器Aの碗である。197~201は須恵器である。197は外底面ヘラ切りを行う坏である。198~200は坏蓋である。口縁端部を嘴状に折り曲げている。201は甕である。外面には平行の叩き痕、内面に弧状の當て具痕が残る。202~227は土師器である。202~206は皿である。坏・椀に比べ皿は胎土が精選され砂粒が少ない。いずれも外底面はヘラ切りである。205・206は屈曲部から反転して外方に広がるものである。207~215はヘラ削りを行う坏である。口径は約13cmである。216~223は椀である。脚は外方に聞くが222は他よりも細く高い脚である。223は底面に回転ヘラ削りを行う。224は低脚の高坏である。225~227は甕である。226は胴部内面も刷毛目による調整を行なう。

228は須恵器壺の底部である。高台は屈曲部に貼り付けられ、底面は回転ヘラ削りを行う。229~232は土師器である。229・230は坏でヘラ切りを行う。231は椀である。232は耳皿である。233は竈の上部破片である。庇を接合した痕跡が残り、焚き口の一部が残存する。外面板などを行い庇接合部分は刷毛で接合を容易にしている。内面はヘラ削りである。234は須恵質の平瓦である。内外面ともに粗くなつていている。235は鉄製の刀子である。

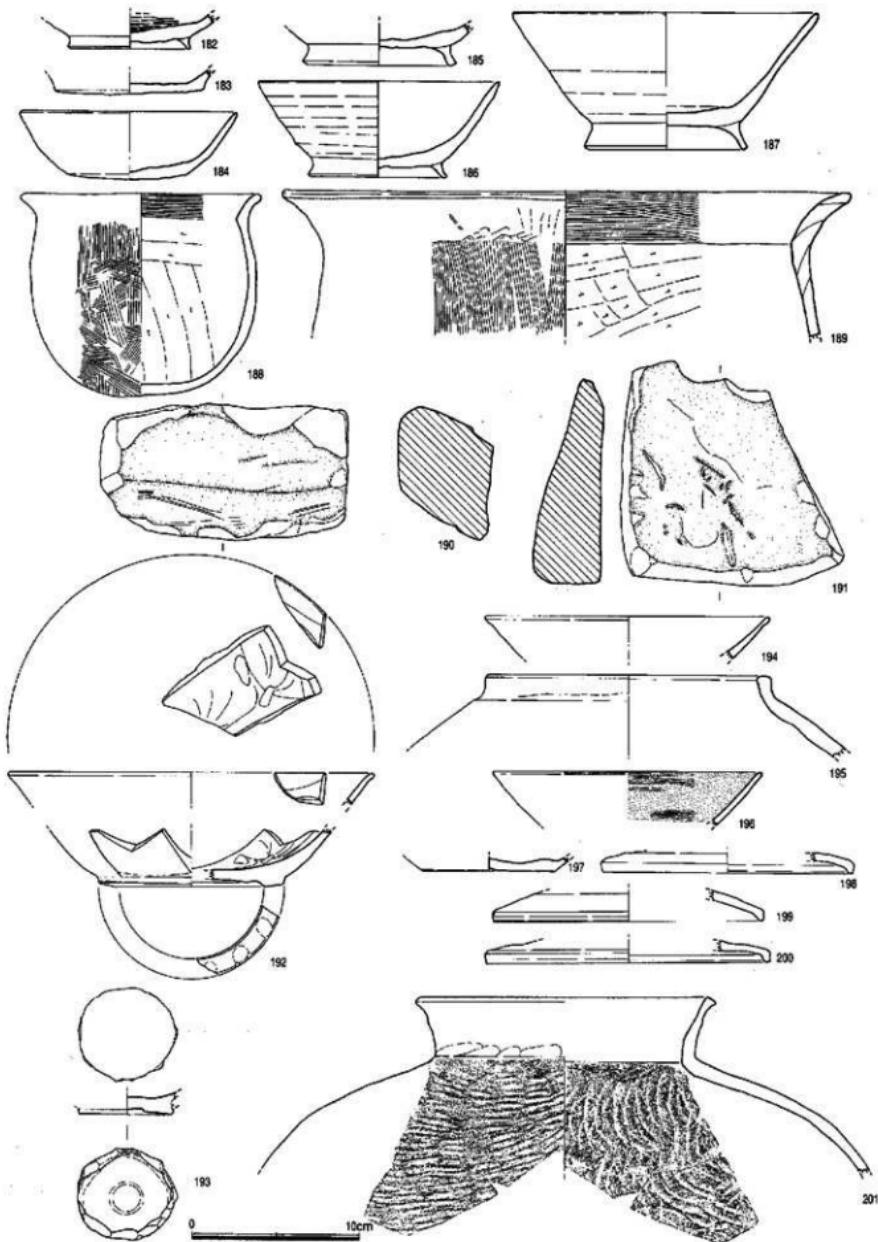
236~250は木製品である。いずれも3層の出土である。236は櫛である。長さは3.6cm、残存幅4.6cmをはかる。基部は丸く仕上げ最大厚9mmを測る。また櫛の歯は三角形を呈し厚み1mm以下で薄く仕上げている。237~246は建築用部材であろうか。237は断面蒲鉾形に近く面取りを行う柾目の杉材である。中央に鉄くぎが打ち込んであり、そのすぐ横に平面長円形の孔が穿たれている。238はぼぞ穴のあいた断面略方形の材である。ぼぞ穴は1.8cm×1.5cmの略方形で5cm間隔で穿たれている。また残存孔巾には断面V字の楔上の材が挿入されている。239は杉柾目の板材である。幅2.9cmで一方の端部を斜めに切り落としている。240は杉柾目材で厚さ2mm、幅は不明である。径3mmの孔を有する。241は杉柾目の板材である。厚さ1cmを測り、端に釘を抜いたような痕跡が残る。242は芯持の杉材である。樹皮を残し先端を杭状に削っている。243は杉の割材である。中途で折れているが本来棒状で細かな面取りが行われている。244は板目の杉材で中央に断面V字の溝を掘り込んでいる。244・245は杉の角材である。幅9.4cm、厚さ4cmを測る。接合しないが同一個体と考えられる。245には横方向に1箇所幅7mmほどの溝が切られている。246は杉板目の板材である。幅10.1cm、厚さ1.1cmを測る。247は厚さ1.1cm、幅10.1cmを測る杉の板目材である。248は湾曲する割材で、凹面凸面とともに削りを行い整形している。249・250は甕串である。249は長さ21.4cm、幅1.7cm、厚み2.8mmを測る。250は長さ21.1cm、幅1.5cm、厚み1.8mmを測り、上部に上からの切り込みを入れる。

#### S E 0 9 6 (第41図)

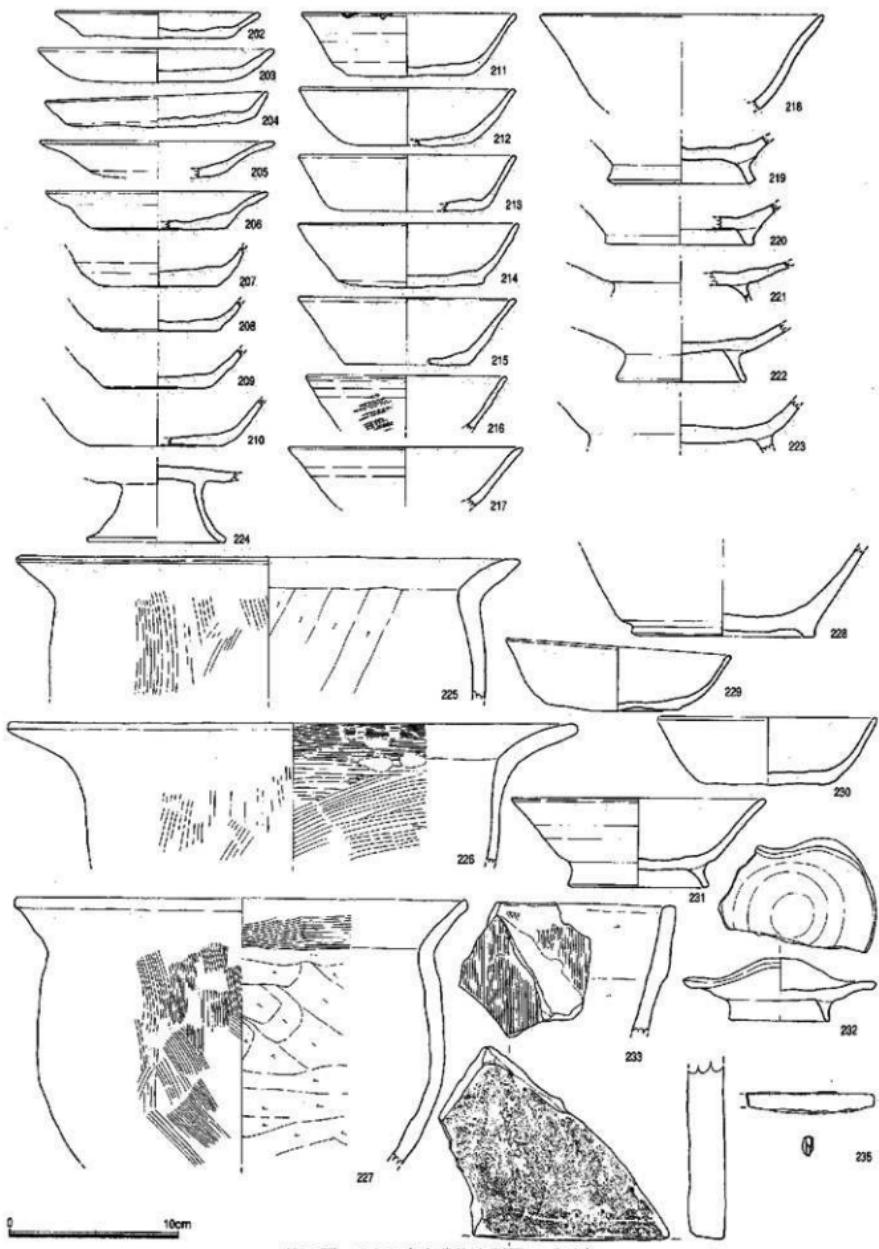
B区西南部で検出する。南側を削平により削られるが上面径1.1m、底面径0.5m、検出面からの深さ1.8mを測り八女粘土まで掘り込む。埋土は上面から1.3mまではブロックをほとんど含まない均質



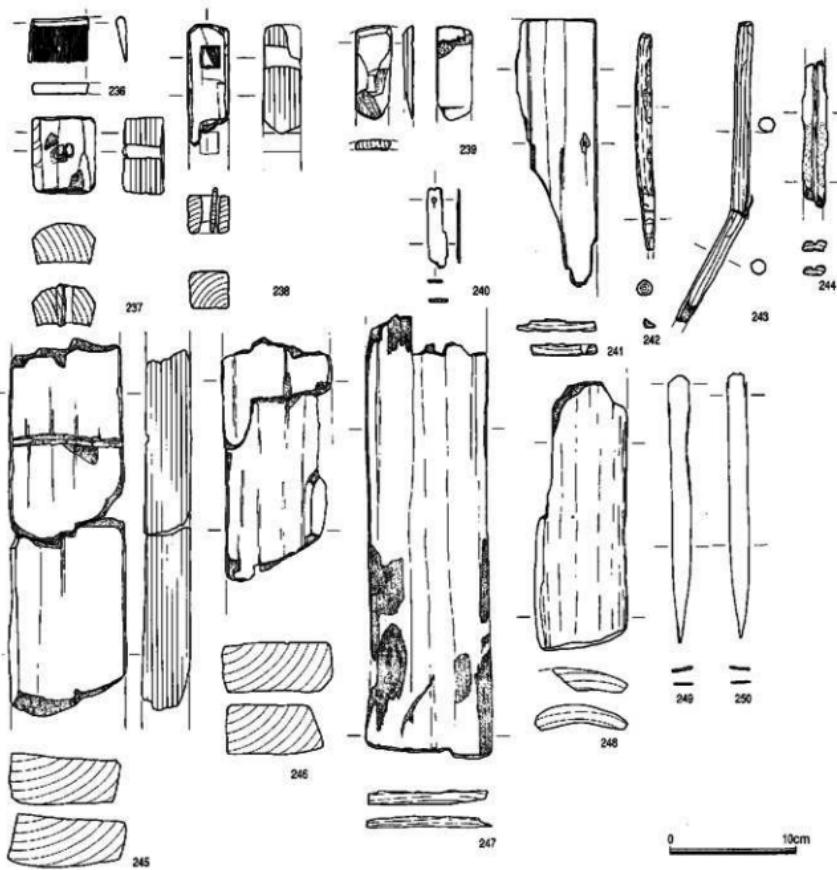
第37図 SE090出土遺物実測図 1 (1/3)



第38図 SE090出土遺物実測図 2 (1/3)



第39図 SE090出土遺物実測図 3 (1/3)



第40図 SE090出土遺物実測図4 (1/4)

な暗褐色土(1層)で、深さ40cm~80cmの間に器台を中心とした遺物の集中投棄が見られる。また2~6層は黒灰色土、7層はヘドロ状の黒色土、8・9層は鳥栖ロームの崩落上である。また252は1層最下部で破碎されたような状態で出土している。遺物は甕・壺・器台・黒曜石剥片がコンテナ5箱程度出土しており弥生時代後期中頃に位置付けられる。

**出土遺物(第42・43図 251~263)** 251は要である。口縁部は「く」字に屈曲し、胴部は長胴で凸レンズ状の広めの底部を有する。口縁部内面~外面全体は刷毛を施し、内面は指なでを行う。252・253は複合口縁壺である。252は胴部の1/2を欠く。口縁部は屈曲部から直線的に内傾し、頭部には断面三角形の突帯を貼り付ける。胴部は卵形を呈し、外面は上半2/3は刷毛目を行い以下はなで消し

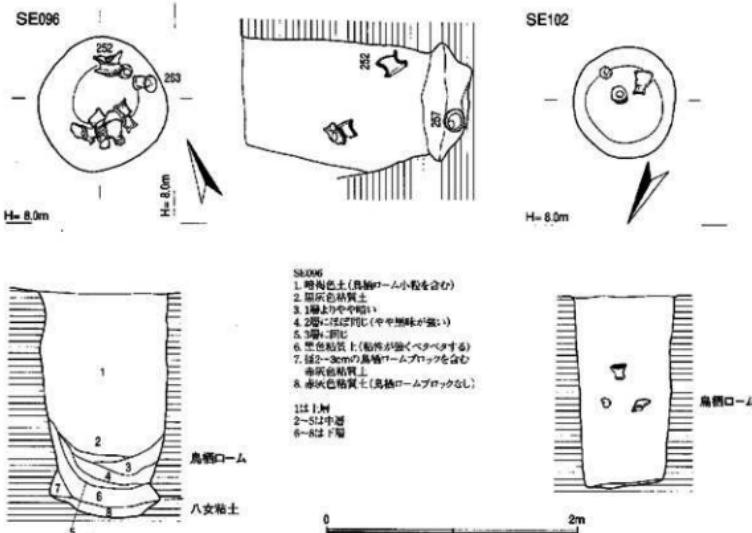
ている。内面は上半1/3は刷毛目を行い以下は指押さえ・なでによる。底部はやや膨らみをもつ凸レンズ状である。253は口縁部が直線的に内傾し屈曲部で外方に張り出す。254～256は底部破片である。257・258は支脚である。257は底面直上から出土した完形品である。叩きで成形を行った後外面全体をなでて叩き痕跡を消している。258は焼成前に穿孔され、外面には平行叩きが全体に残る。259～263は器台である。外面縦刷毛、内面は筒部が指なで上部は横刷毛を行っている。

#### S E 102 (第41図)

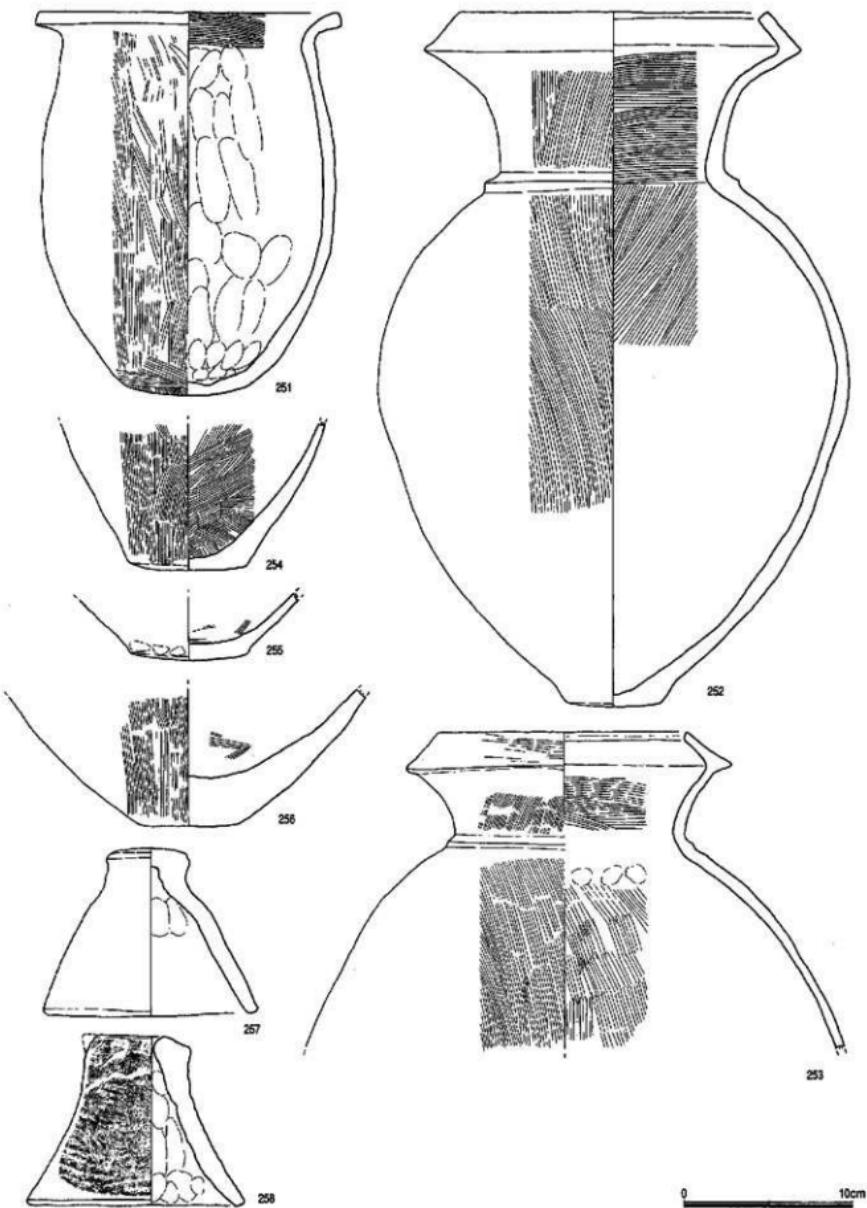
B区西南部で検出する。上面径0.9m、底面径0.6m、検出面からの深さ1.6mを測り鳥栖ロームの最下部八女粘土直近まで掘り込む。壁面はほぼ真直ぐに掘り下げられ断面は円筒形に近い。埋土上面から70cmまではブロックをほとんど含まない均質な暗褐色土(1層)、70cm～110cmは木炭粒を含む黒褐色土(2層)、以下底面まで黒褐色土と赤褐色土の混合土(3層)である。遺物は甕・壺・器台・がコンテナ3箱程度で他に石器未製品が出土しており弥生時代後期前半に位置付けられる。

出土遺物(第43図 264～274) 264・265は甕の破片である。264は口縁部で端面は丁寧に面取りが行われ、頸部に三角突帯を貼り付ける。内面は横刷毛を行う。265は胴部である。外面はなでけるような縦刷毛を行い、内面は螺旋状に斜めに刷毛を行う。底部付近は粗雑な板なでを行はば平底である。266・267は底部破片である。267は底面に刷毛目を行う。268～270は器台である。268は外面叩きの後に縦刷毛を行う。270は外面板なで内面は指なでと横刷毛を行う。271は小型の壺胴部であろう。外面は縦刷毛を行い内面は指押さえによる。胎土には砂粒を含み淡黒色を呈する。272はラッパ状に広がる脚である。内外面刷毛目を施す。273は高环脚部である。274は立岩産凝灰岩製の石包丁の未製品である。粗削後穿孔を行ったところで破損したようである。

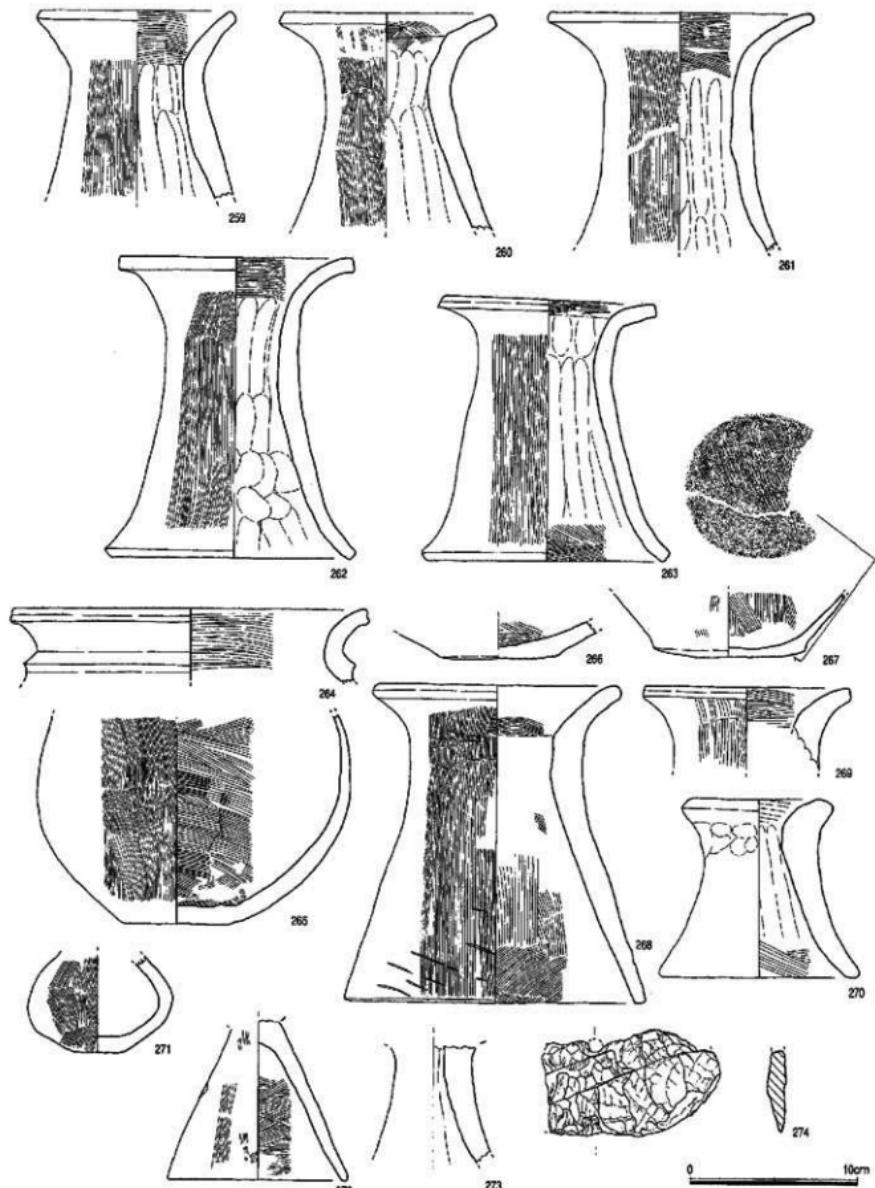
#### S E 103 (第44図)



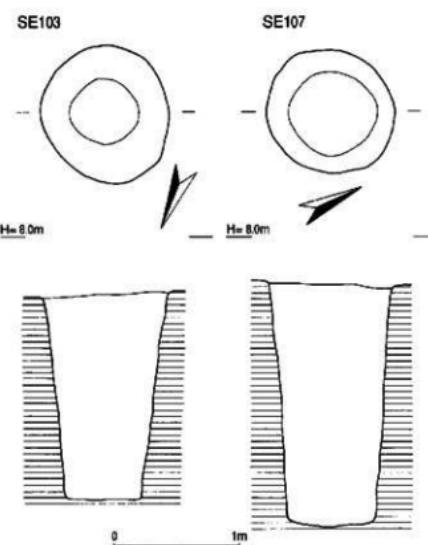
第41図 SE096・102実測図 (1/40)



第42図 SE096出土遺物実測図 1 (1/3)



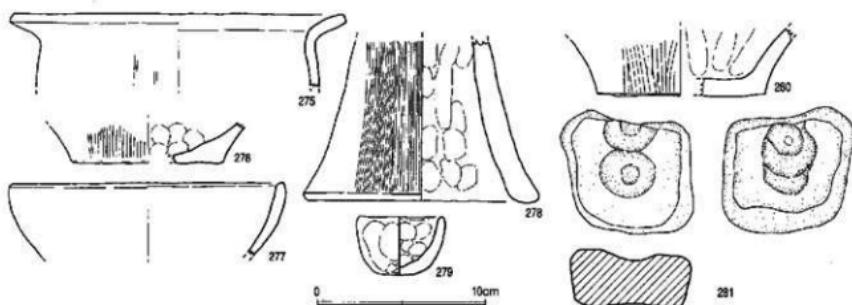
第13図 SE096出土遺物実測図 2、SE102出土遺物実測図 (1/3)



第44図 SE103・107実測図 (1/40)

面径0.65m、検出面からの深さ1.9mを測り鳥栖ロームの最下部八女粘土直近まで掘り込む。埋土は上面から1.1mまではブロックをほとんど含まない均質な暗褐色土(上層)で、以下は底面ましまりのないにぶい赤褐色土(下層)である。上層と下層の境界は明瞭で下層はロームの崩落によるものと考えられ遺物はまったく出土していない。遺物は土器の小破片と黒曜石剥片、玄武岩製の石器木製品破片があり時期は弥生時代中期後半であろうか。

出土遺物(第45図 280・281) 280は平底の壺底部である。外面に刷毛目を行う。281は花崗岩製の突起石である。突起が片面に2箇所、反対側に1箇所残っている。



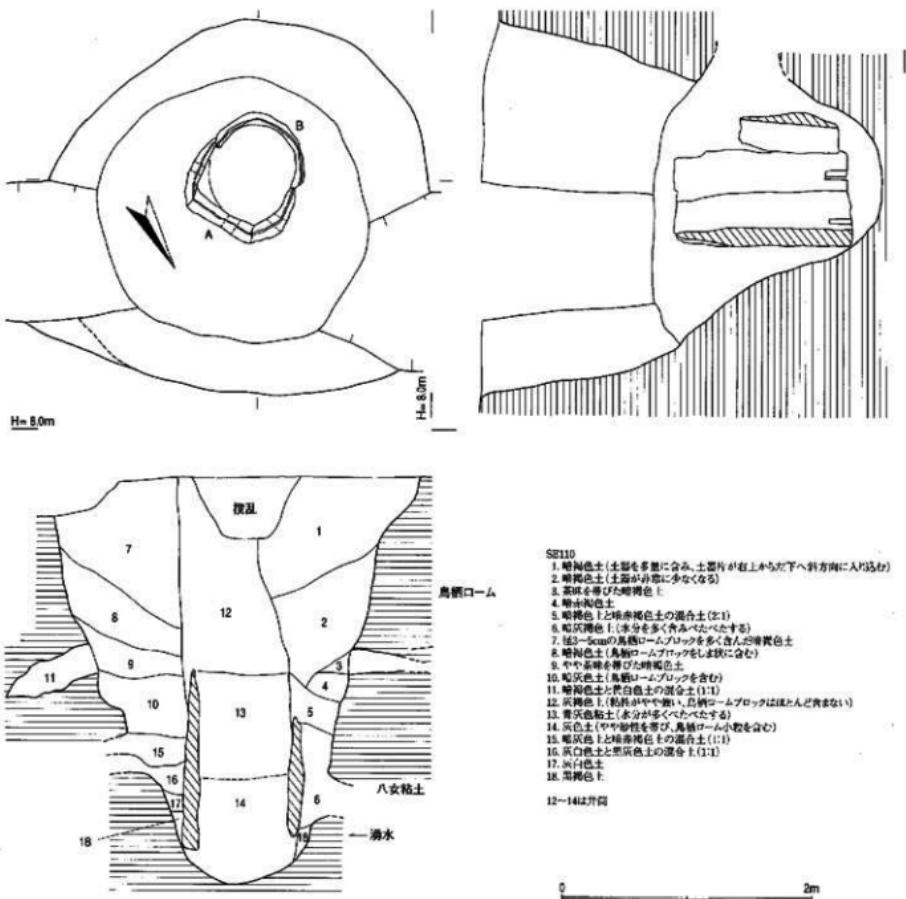
第45図 SE103・107出土遺物実測図 (1/3)

B区西南部で検出する。上面径1.1m、底面径0.5m、検出面からの深さ1.75mを測り鳥栖ロームの最下部八女粘土直近まで掘り込む。壁面は湾曲せず底面は平坦である。埋土は上面から1.3mまではブロックをほとんど含まない均質な暗褐色土(1層)でこの下に鳥栖ロームの崩落による間層があり、以下底面までは黒褐色土と暗赤褐色土の3:1の混合土である。また底面直上には厚さ1cmほどの粗砂堆積している。遺物は甕・壺・器台・楕の小破片のみで弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物(第45図 275~279) いずれも1層出土遺物である。275・276は甕の破片である。口縁部は「く」字状に外反し、底部は平底である277は楕である。278は器台である。楕はラッパ状に広がる。279は手づくねの壺である。

#### SE107 (第44図)

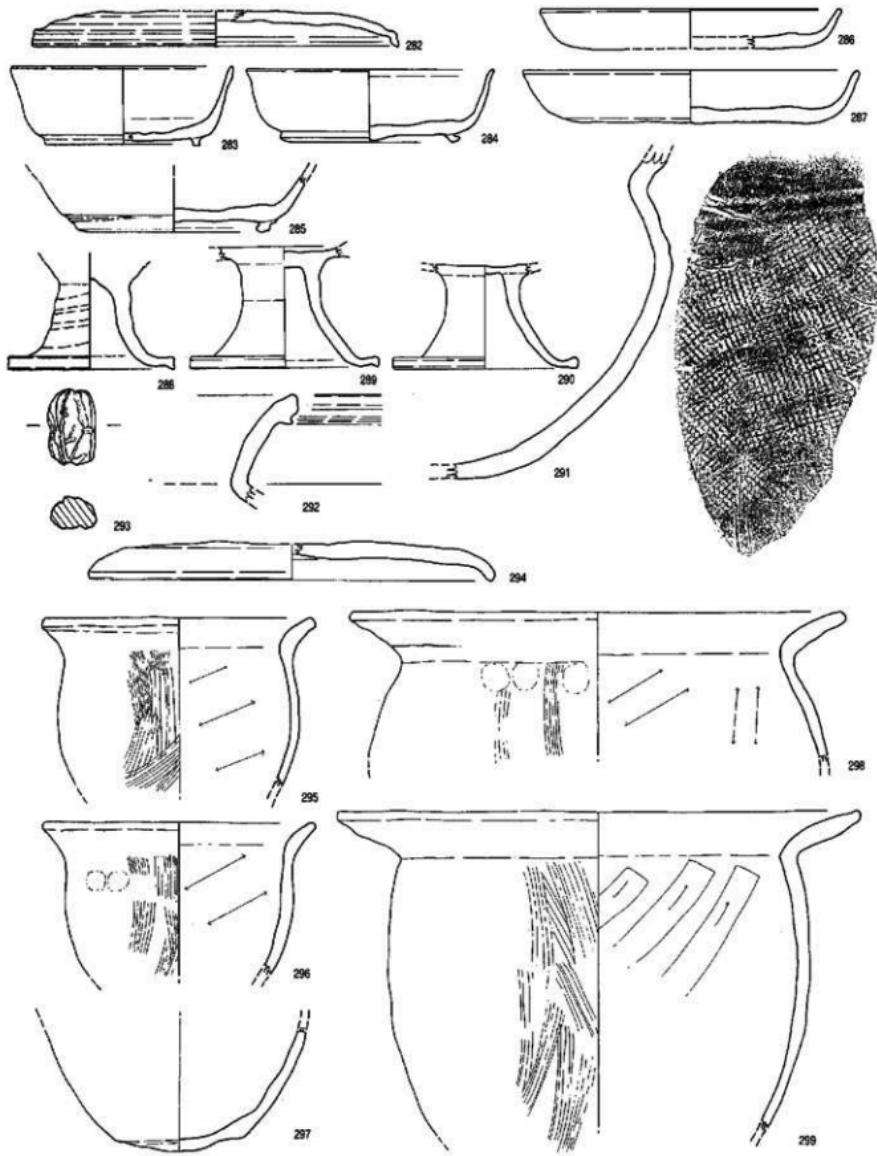
B区西側で検出する。上面径1.0m、底



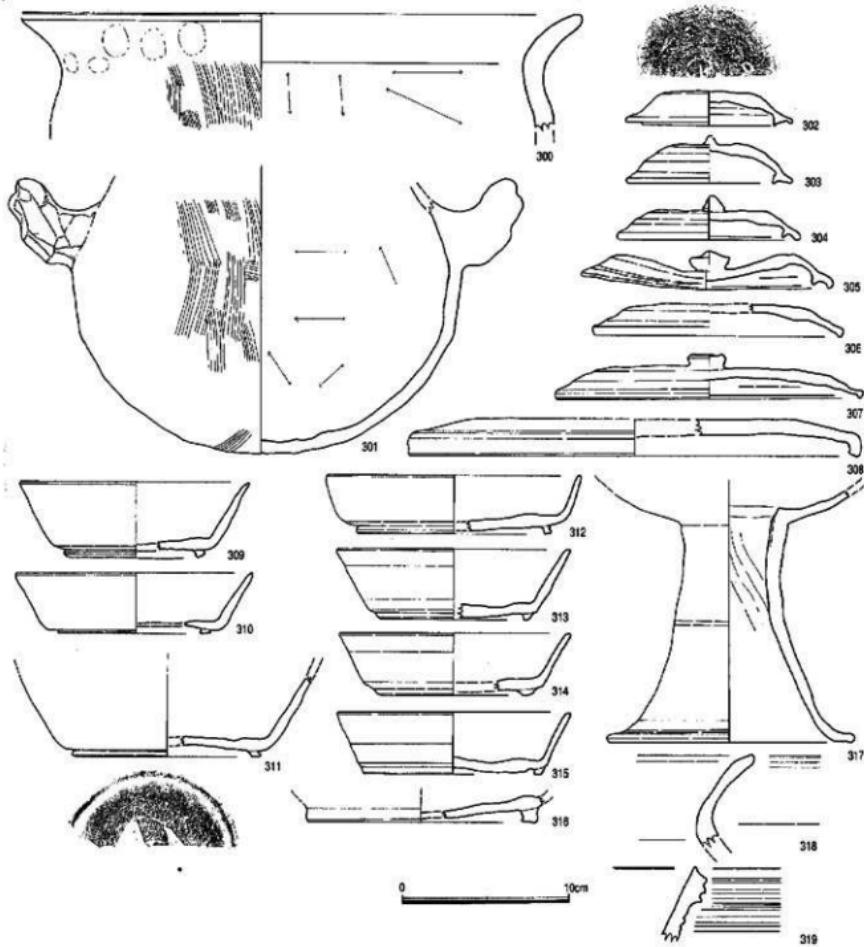
第46図 SE110実測図 (1/40)

#### S E 1 1 0 (第46図)

B区西側で検出し、検出面から1.4mほどを擾乱により破壊されている。上面径3.0m、底面径0.8m、検出面からの深さ3.2mを測り八女粘土層まで掘り込む。壁面はやや斜めのV字状に掘り込まれローム層の境と湧水レベルの2箇所で壁面が抉りこまれている。検出面から1.6mほど掘り下げたところで井筒を確認した。井筒は圓木材を半裁し内部を割り抜いたものをあわせて筒にしている。残存する井筒は最下部のもののみで、北側を木材A、南側を木材Bと仮称する。木材Aは遺存状態が良好である。上部は腐食しているが残存長1.5mで材厚さは20cmである。内面の割り抜きは隅角をきちんと

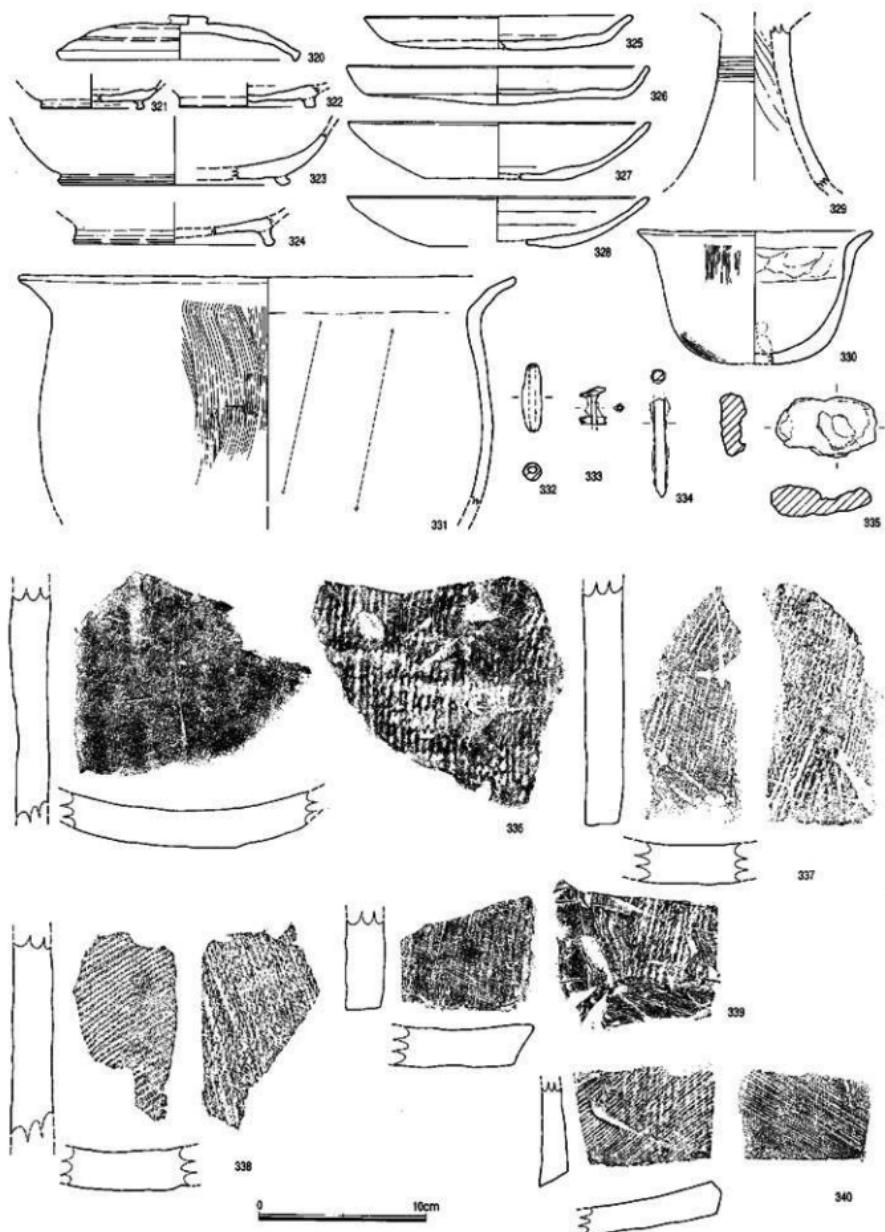


第47図 SE110出土遺物実測図1 (1/3)



第48図 SE110出土遺物実測図2 (1/3)

ととり断面「コ」字状に整形し、底面には面取りを行っている。また三辺それぞれのほぼ中央底には幅10cm、高さ17cmほどの長方形の切り込みが計3箇所に入っており、重量のある材を井戸内につるし下げる際の調掛けに使用したものと考えられる。形態的には当初から井筒用に製作されたものでなく木樋などの転用と考えられる。木材Bはやや腐食が進んでおり残存長90cmを測り、厚みは10cm程度である。矧り抜きはAとまったく異なり半円形を意識したものとなっており、当初から井筒として製作されたようである。底面はA同様に面取りを行っている。径が木材Aよりもやや小さく接着面が木材



第49図 SE110出土遺物実測図 3 (1/3)

Aの内側に入り込んでいる。出土遺物はコンテナ20箱におよび、上師器要・坏・把手・竈、須恵器要・蓋坏・盤・壺・瓦、鐵冶滓が出土している。8世紀中頃～後半に位置付けられる。

**出土遺物（第47～49図）** 282～301は井筒内部からの出土遺物である。282～291は須恵器である。282は須恵器蓋である。つまみ部分が欠失し天井部は回転ヘラ削りを行う。283～285は高台付きの坏である。283は底部回転ヘラ削り、284・285はヘラ切りである。286・287は皿である。286は底面ヘラ切り、287は回転ヘラ削りである。288～290は高坏である。脚部部分は強く外方に開き端部は嘴状に整形する。288は未還元で赤褐色を呈する。291は甕である。外面は格子状の叩き痕が残り、内面は強い板なでにより當て具痕を消している。292は甕の口縁部である。293は滑石製鍤である。294～301は土師器である。294は蓋である。天井部はヘラ切りを行う。295～301は甕である。295～300は長胴で胴部はあまり張らない。外面継刷毛、内面はヘラ削りを行う。301は扁球形の胴部に把手を貼り付ける。

302～340は掘り方からの出土である。302～319は須恵器である。302～308は蓋である。302～305はかえりを有する。302はつまみがなくヘラ切りを行う。303・304は宝珠形のつまみを有し回転ヘラ削りを行う。305は天井部ヘラ切りである。306～308はかえりを持たない。306・308は天井には回転ヘラ削りを行う。306は未還元で一部橙色を呈する。307はヘラ切りを行い板状压痕を有する。309～316は高台付きの坏である。312は底部回転ヘラ削りでこれ以外はヘラ切りである。317は高坏である。318・319は甕の口縁部である。319は端部を突起状に肥厚させる。320～331は土師器である。320は天井部がヘラ切りの蓋である。321～323は高台付き坏、324は碗である。324は高い高台が外方に開く。325～328は底部回転ヘラ削りを行う皿である。329は高坏である。2条の沈線を有し、内面には絞り痕が残る。330は小型の甕である。外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行う。332は重量5gを測る土鍤である。333は用途不明鉄製品である。棒状品の両端をたたきつぶしているようであり、留め金具としたものであろうか。334は鉄製の釘である。335は平面長方形に近い楕円形鐵冶滓である。表面は暗紫色を呈し平滑である。また破面には小さな気孔が多く存在する。鍛造剥片の付着は観察できない。336～340は平瓦である。焼成はいずれも瓦質である。336～339には凸面に繩目状の叩き痕が残る。凹面は336が丁寧なでを行うほかは布目压痕が残る。340は凸面には単位の細かな平行叩きを行い、凹面には布目压痕が残る。

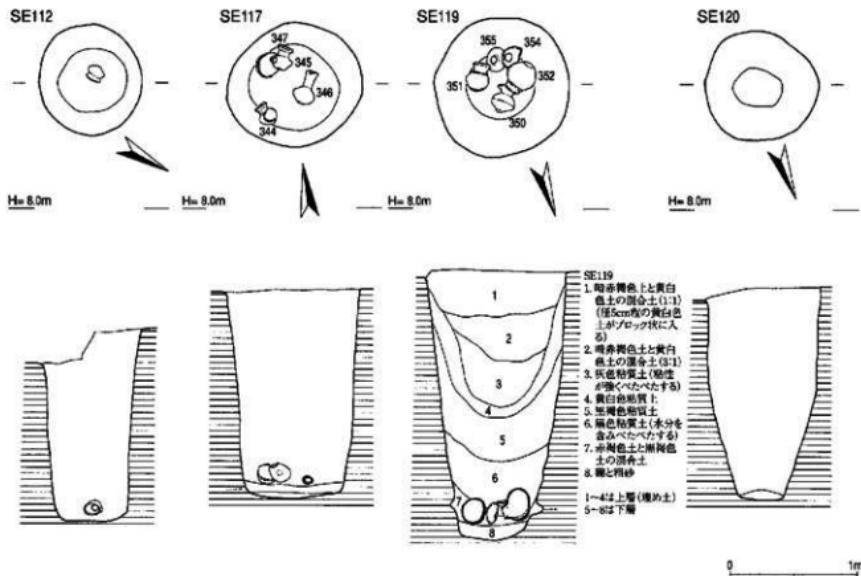
#### S E 1 1 2 (第50図)

B区西側で検出する。上面径0.9m、底面径0.55m、検出面からの深さ1.5mを測り鳥栖ロームの最下部八女粘土直近まで掘り込む。埋土は上面から1.2mまでは粘性の非常に強い黒褐色土(1層)で、1.2m～1.45mは上層に赤褐色土をブロック状に含んでいる(2層)。以下の底面か5cmには黒灰色土(3層)が堆積しているがこれは元来赤褐色を呈する鳥栖ロームが崩落したものが還元されたものと考えられる。遺物は3層直上に完形の壺(341)が横置きされていたほかは小破片のみである。弥生時代終末期に位置付けられる。

**出土遺物（第51図 341・342）** 341は完形の壺である。底部はほぼ丸底であるが径1.5cmの底がわずかに残る。外面は継刷毛を行い口縁部は縱方向に磨きを施す。また胴部下半は丁寧な板なでを行う。内面は指なでを行い下半にはヘラ状工具の小口部分压痕が残る。胴部下半に1箇所焼成後穿孔が行われる。342は甕口縁部で端面は上下両方向にわずかに肥厚する。

#### S E 1 1 7 (第50図)

B区中央で検出する。上面径1.1m、底面径0.7m、検出面からの深さ1.7mを測り八女粘土上面が露出するレベルまで掘り込む。埋土は上面から1.55mまではロームブロックを混入する黒褐色土で、以下底面までは厚さ約15cmの粗砂が堆積している。粗砂層直上に壺が4個体投棄されており弥生時代



第50図 SE112・117・119・120実測図 (1/40)

終末期に位置付けられる。

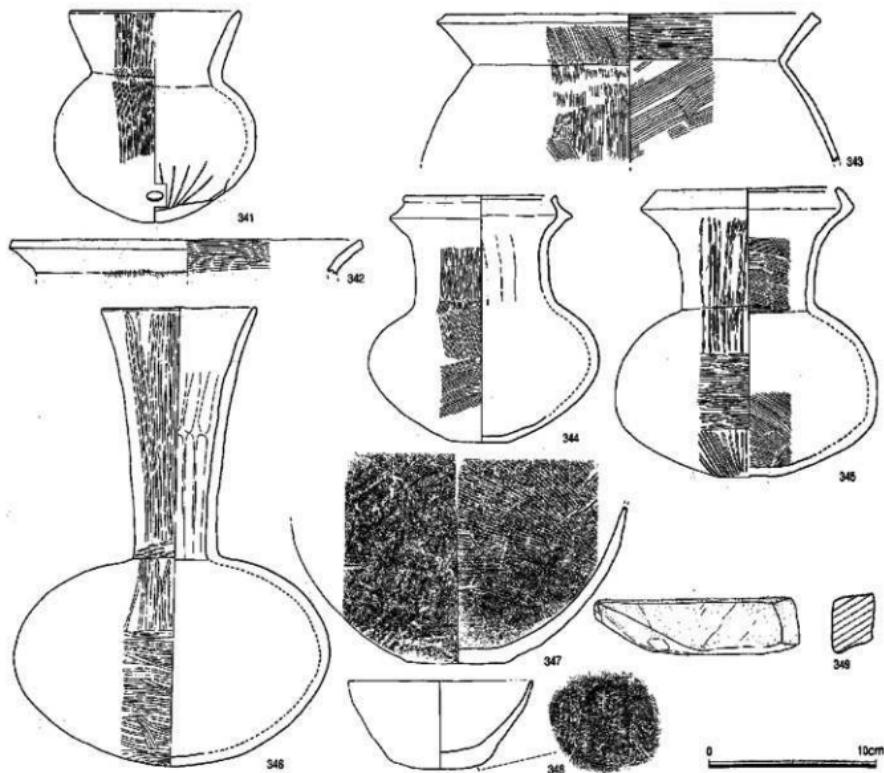
**出土遺物 (第51図 343~349)** 343は壺である。口縁部は「く」字に屈曲し端面は丁寧に面取りを行う。344・345はいずれも小さな平底が残る複合口縁壺である。344は胴部の1/3程を欠失する。口縁部は屈曲部位で外に振り出し、端部は上方につまみあげる。345はほぼ完形である。頸部から胴部外面には縦方向の磨きを行い、胴部の中位にはその後に横方向に磨きを施す。346は完形の長頸壺である。胎土は精良で橙色を呈する。頸部から胴部上半では縱磨き、胴部下半以下は横磨きを行う。347は壺の胴部下半である。内面は斜め方向の刷毛目、外面には叩きのち指なでを行う。底部はほぼ平底である。348は壺である。板なでによる粗い調整を行い、底部には刷毛目が残る。349は手持ちの砥石である。目はやや粗い。

#### S E 1 1 9 (第50図)

B区中央で検出する。上面径1.1m、底面径0.5m、検出面からの深さ2.2mを測り八女粘土まで掘り込む。埋土は1層~4層を上層としたが堆積状況から5層まで埋没した後に再び水がたまる状態であったことが3層の粘質土から伺うことができる。また最下層の8層には粗砂が堆積しその上面に土器が投棄されているがこれ以外には遺物は僅少である。弥生時代終末期に位置付けられる。

**出土遺物 (第52図 350~355)** 350~352は完形の複合口縁壺で底部はレンズ状もしくはやや尖底気味である。350は胴部縦刷毛の後底部にヘラ削りを行い尖底気味に仕上げる。351・352は縦刷毛の後胴部下半には丁寧な指なでを行う。また口縁端部はともに上方につまみあげている。352は口縁屈曲部外面に刻み目を施す。353は小型の壺であろうか。完全な丸底で内外面刷毛目を行う。354・355は長頸壺の胴部である。外面には磨きを行う。354はレンズ状気味の丸底で、355は小さな平底を有する。

#### S E 1 2 0 (第50図)



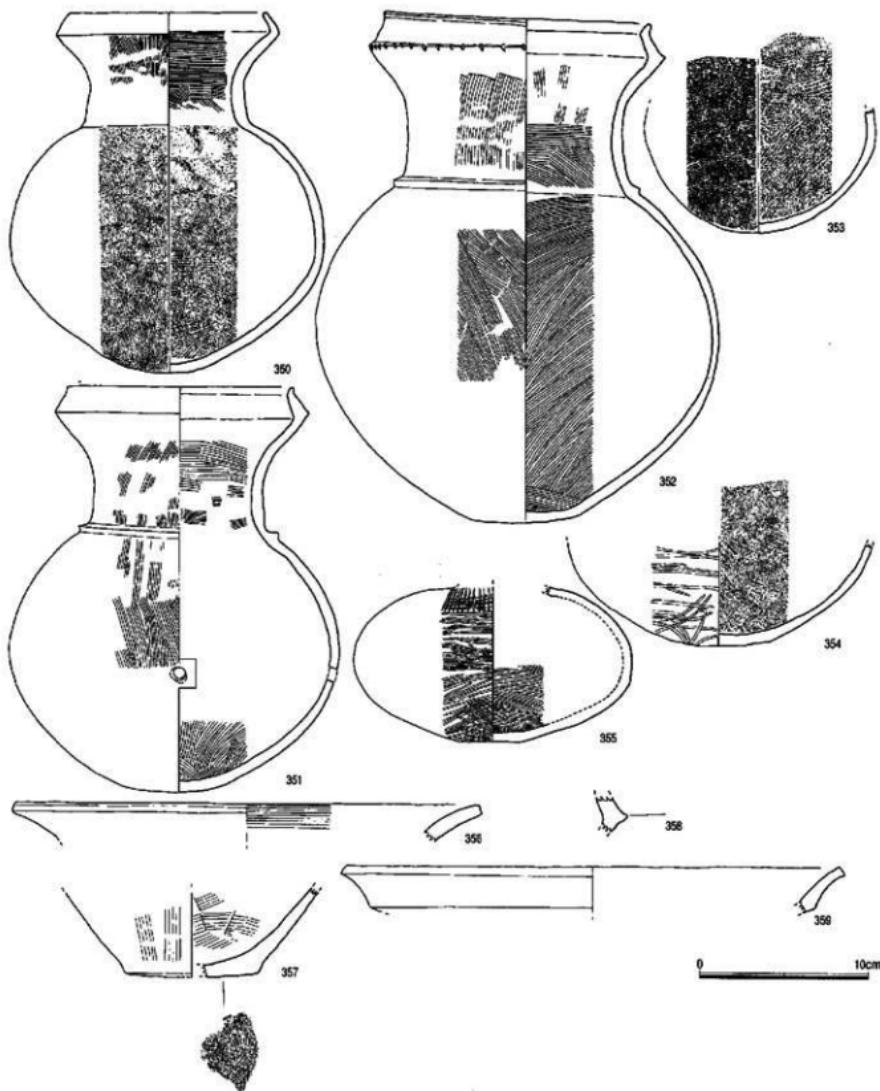
第51図 SEI12・117出土遺物実測図 (1/3)

B区中央で検出する。上面径0.9m、底面径0.3m、検出面からの深さ1.7mを測り掘削は鳥柄ロームにとどまる。掘り方は中ほどまでは直ぐに掘り込むがそれ以下は底面に向かって漏斗状にすばまっている。埋土はロームブロックを混入する黒褐色土である。遺物は少量で甕・壺の小破片のみである。弥生時代後期中頃に位置付けられる。

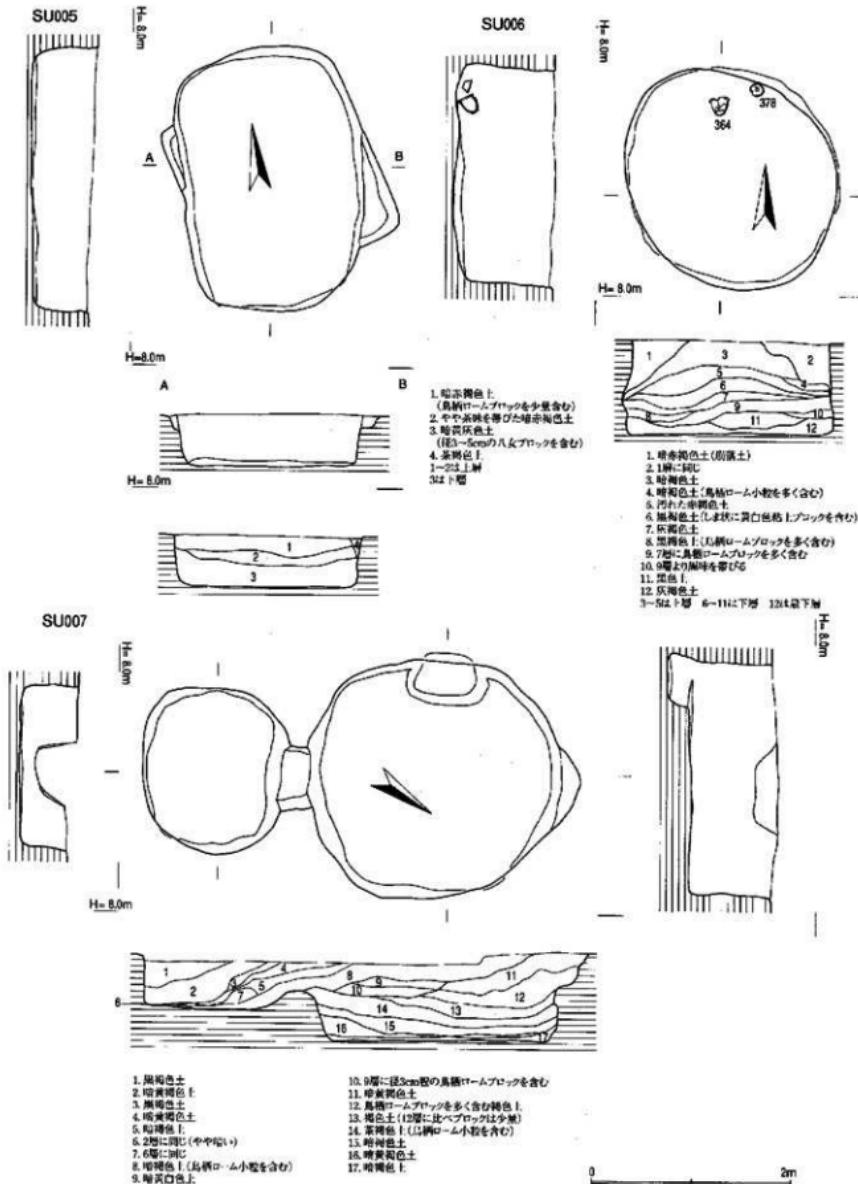
出土遺物（第52図 356～359） 356・357は甕である。356は口縁部破片で内面横刷毛を行う。357はわずかにレンズ状を呈する底部で外底面にも刷毛目を行う。358は複合口縁蓋の口縁屈曲部分である。屈曲部が外方に張り出す。359は高環の口縁部である。屈曲部分から短く外反し立ち上がる。

#### 9. 廉藏穴 (SU)

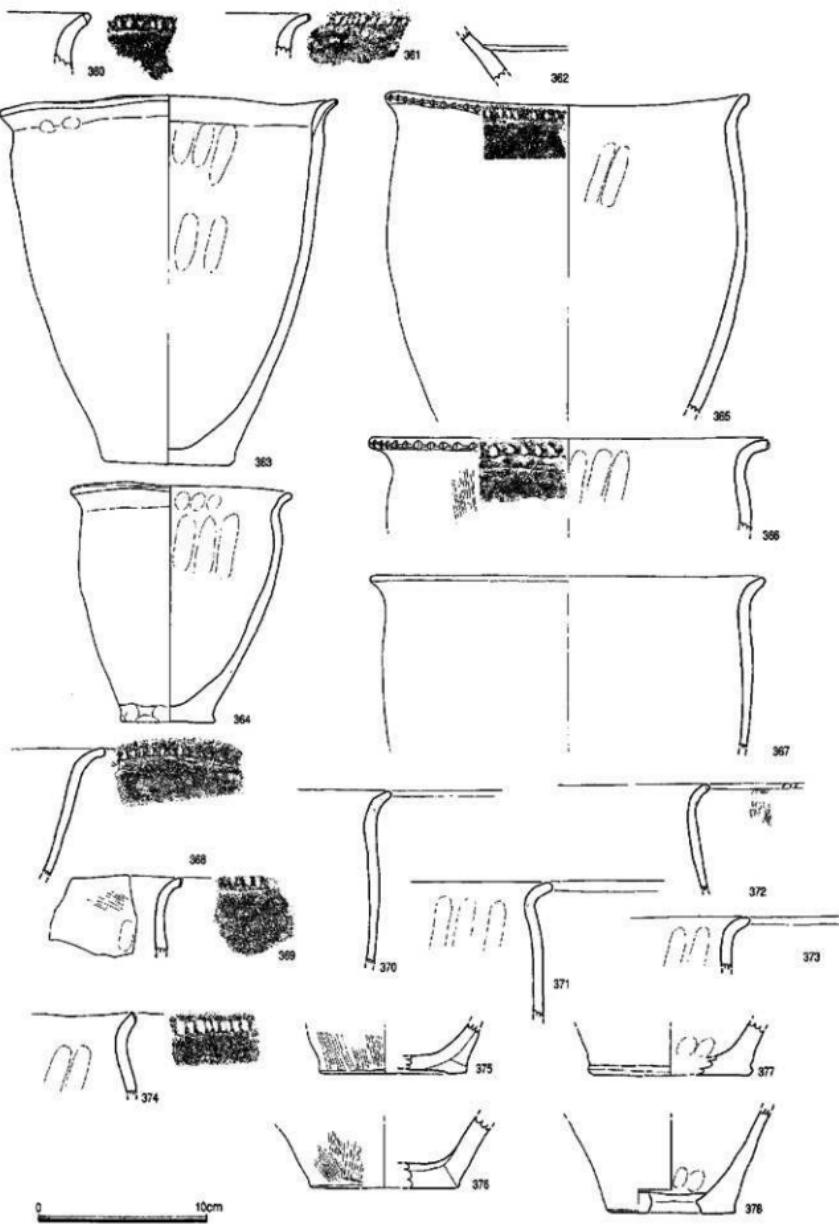
貯蔵穴は総数で48基検出しており、その分布は調査区の北西部に偏っている。北側に隣接する第21次調査区では13基、第50次調査区では6基の貯蔵穴を確認しており台地の先端部分で計67基の貯蔵穴が確認されていることになる。西側の未調査部分を加えるとさらに総数は増加するものと考えられ



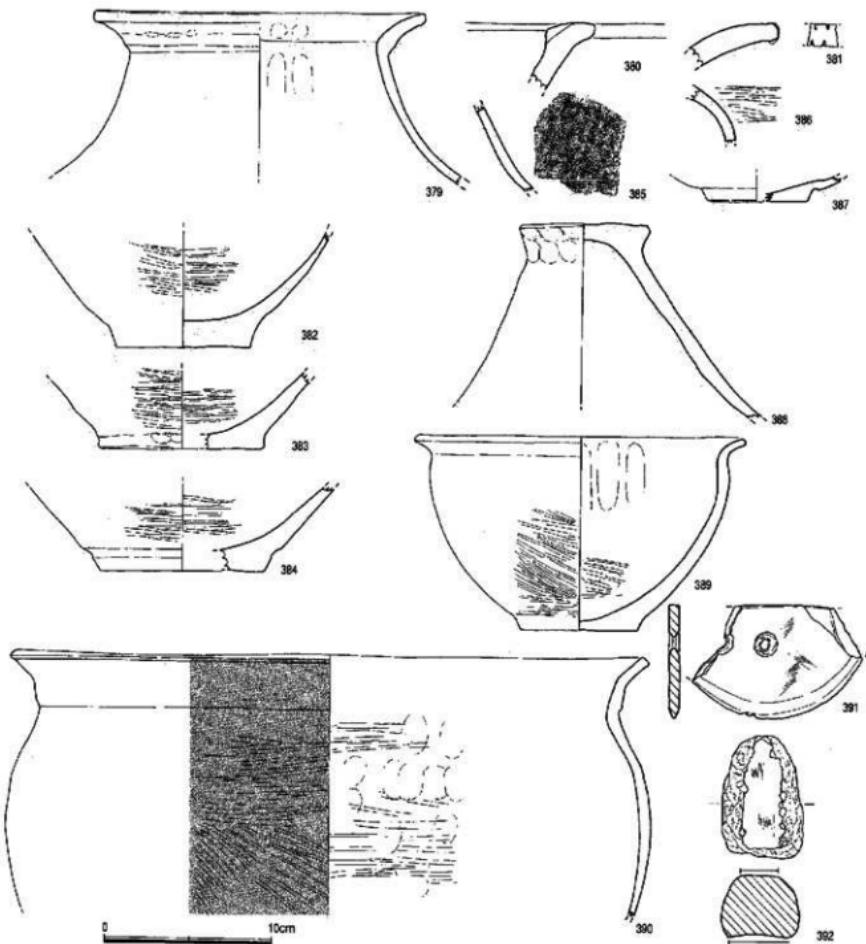
第52図 SE119・120出土遺物実測図 (1/3)



第53図 SU005・006・007実測図 (1/50)



第54図 SU005出土遺物実測図、SU006出土遺物実測図 1 (1/3)



第55図 SU006出土遺物実測図2 (1/3)

る。時期的には弥生時代前期前半～中期初頭に位置付けられる。また形態的には平面長方形のものと略円形を呈するものの大きく2種類に分けることができる。遺構の遺存状態は残りの良いもので検出面からの深さが1m程度でなかにはほとんど痕跡的にしか残っていないものもある。貯蔵穴の本来的な深さから想定すると1m～2mの削平が考えられ、すでに失われているものもあると考えられる。分布状況としては具体的に構成単位を抽出することはできなかったが、形態の類似や配置上から2基が一対として近接した配置を取っているようにも受けられる。この際掘り方のわずかな部分が切り

合うかほぼ接するように配されるものや、やや距離をとるものがある。

#### S U 0 0 5 (第53図)

A区で検出し、SU007を切っている。平面形は隅丸長方形で長軸2.65m短軸1.7m深さ55cmを測る。壁はほぼ直立するが本来はややオーバーハングしていたのであろう(4層)。また底面は平坦である。東西長辺側に方形を意図した10cmほどの掘り込みがあり当初切り合いと考えたが埋土からは切り合い関係は認められなかった。埋土は有機質土がほとんどなくロームによる埋め立ての状況を示しており他の貯蔵穴とは大きく異なる。遺物はほとんどなく甕・壺の小破片のみである。前期中頃～後半に位置付けられる。

出土遺物(第54図 360～362) 360・361は甕の破片である。360は如意形口縁の端部下端に刻みを施す。361は端面全体に刻み目を施す。362は有段の壺の肩部破片である。

#### S U 0 0 6 (第53図)

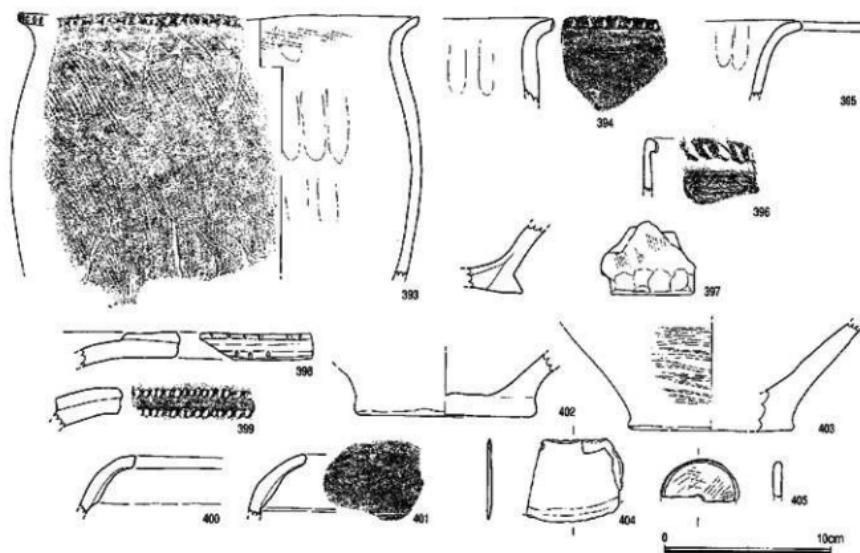
A区で検出す。平面形は径2.2mの円形で深さ95cmを測る。壁はほぼ直立するが本来はかなりオーバーハングし(1・2層)、掘削時の入り口部分はかなり狭いものであろう。また底面には緩やかな凹凸がある。埋土は中央が膨らむレンズ状を呈しておりこの構造が袋状を呈していたことを伺うことができる。有機質土がほとんどなくロームによる埋め立ての状況を示しており他の貯蔵穴とは大きく異なる。底面上から甕が出土し、他に甕・壺・蓋、石包丁、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられる。

出土遺物(第54・55図 363～392) 363～378は甕である。363は胴部が張らず口縁部に刻みがない。364は床面出土の完形品で、胴部は膨らみ底部はやや外側に張り出す。365・366は胴部が張り出し全面に刻目を有する。367には外面屈曲部に小口痕跡が残る。368～374は口縁部小破片である。369は口縁部を折り曲げ端部を三角形に作る。外面は継刷毛を行う。374は突帯文系である。375～378は底部である。375は外面刷毛を行なう。378は焼成後に外底面からの穿孔を行う。379～384は中型の壺である。379は口縁部外面に粘土帶を貼り付け屈曲部には段を有する。382～384は底部でいずれも内外面に横方向の磨きを行う。385～387は小型壺である。磨きによって整形される。385にはヘラ描き文様の一部が残る。386は胴部中位の破片である。387は円盤状の粘土板を貼り付ける。388は蓋である。丁寧なまでに行なった上面には指痕跡が残る。389・390は鉢である。389は内面で、外面横～斜方の磨きを行う。390は大型品である。口縁外面には粘土帶をはりつけ屈曲部の段は明瞭である。内外面磨きを行い、外面に赤色顔料を塗布する。391は頁岩製の石包丁で孔間芯々は2.4cmを測る。392は砂岩製の砥石である。2面を砥面とする。

#### S U 0 0 7 (第53図)

A区で検出す。当初2基の貯蔵穴として掘り下げを行ったが土層観察の結果埋土が東側から西側に向かって流れ込んでいる状況が観察でき、更に2基の掘り込みの間に隣接状の高まりが存在していたため一連の掘り込みであり1基の貯蔵穴と考えた。対になる貯蔵穴はないがこれは対になる2基の貯蔵穴が連結したものと考えることもできよう。形状から本来の入り口は掘り込みの北端にあり縫隙を掘削した後南側に向かって横坑を掘ったものと考えられる。北側土坑の底面には壁沿いに明瞭な掘り込みを有する。埋土はロームブロックを多量に含んだ暗褐色土で17層除去後に検出している。梯子状の昇降施設を固定するものであろうか。同様の形態をした貯蔵穴が有田遺跡群第78次調査SU7・8・10として報告されている(市報告書第538集)。遺物は小破片のみで甕・壺・紡錘車・石包丁が出土する。前期後半に位置付けられる。

出土遺物(第56図) 393～397は甕である。393は胴部外面・口縁部内面に刷毛を行う。胴部は中



第56図 SU007出土遺物実測図 (1/3)

彫りみである。刻みは下端部分に施す。394は全面に刻む。396・397は突帯文系である。398・399は口縁部上面に粘土帯を乗せ肥厚させる。刻みは上端・下端の2箇所に施す。400・401は口縁部外面に粘土帯を貼り付ける。400は屈曲部が段になるが401は沈線化している。402・403は壺底部である。402は円盤状の底部に貼り付けて整形している。403は外面横方向の磨きを行う。404は貝岩製の石包丁である。405は紡錘車の欠損品である。

#### S U 0 1 3 (第57図)

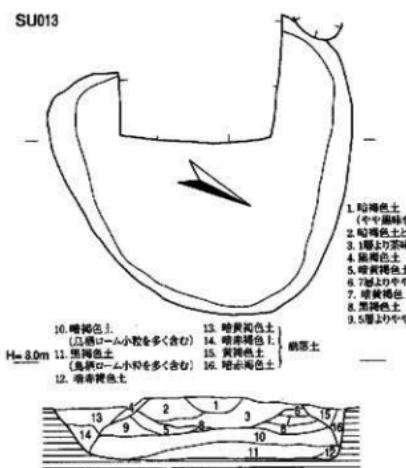
A区中央で検出する。平面形はややいびつな円形を呈し最大径3m、深さ65cmを測る。崩落土の状態から本来の壁がオーバーハンプングしていたことがわかる。また底面はほぼ平坦である。土層観察から埋っていく過程で床をある程度掘りなおして使用していたと想定できる。壺・壺・黒曜石剥片が出土している。前期末に位置付けられる。

**出土遺物 (第58図 406~413)** 406~409は壺の口縁部破片である。406は全面に刻みを行う。407・408は口縁部の外反が強く内面には刷毛目が残る。409は外面向で、内面には擦痕が残る。口縁部上面に刻みを行う。410~412は中型の壺である。410は口縁部は強く外反し上面が水平もしくはそれに近くなる。411は口縁端部彫形を呈し、外面の屈曲部分には段がつく。412は口縁外部を肥厚させ、下端部分に刻みを有する。内外面には丁寧なまでに行う。413は小型の壺である。ヘラ描きにより横線にはさまれた3層の斜格子文を刻む。

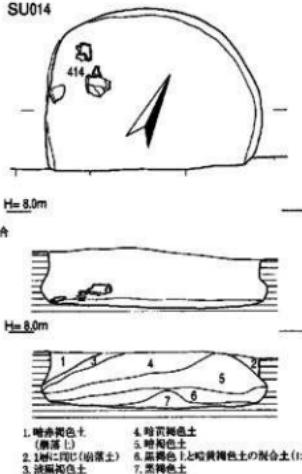
#### S U 0 1 4 (第57図)

A区中央で検出する。一部を擾乱されるが平面は径2.15mの円形を呈し深さ60cmを測る。崩落土の状態から本来の壁がオーバーハンプングしていたことがわかる。壺が1個体5層最下位から出土しており、

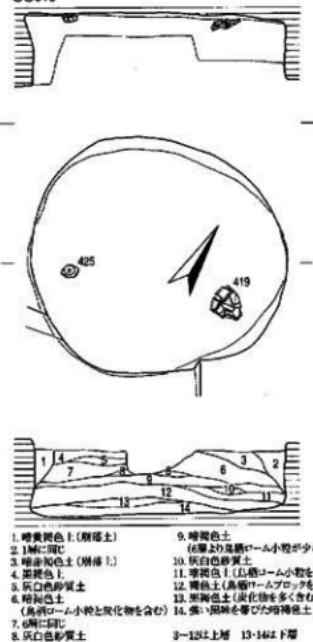
SU013



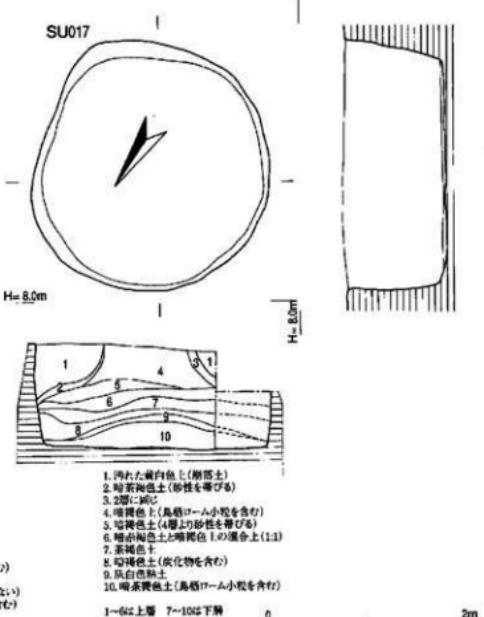
SU014



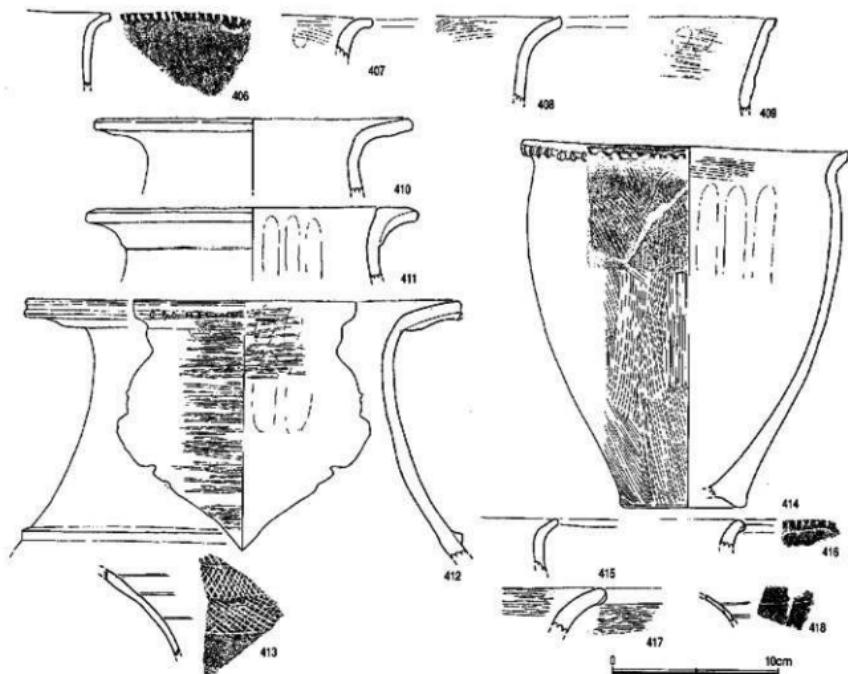
SU016



SU017



第57図 SU013・014・016・017実測図 (1/50)



第58図 SU013・014出土遺物実測図 (1/3)

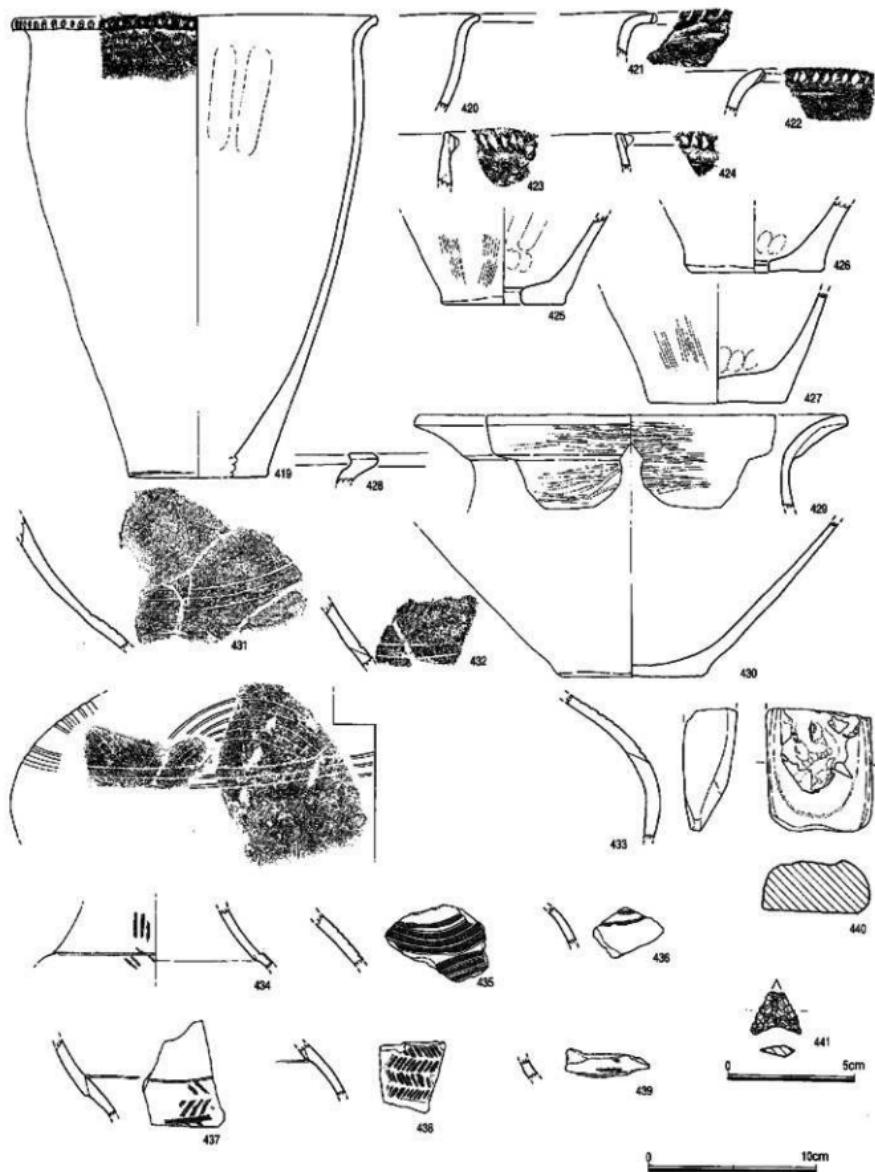
6・7層堆積後にも使用していたことがわかる。甕・壺、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第58図 414~418)** 414は底部及び胴部の一部を欠く甕である。造形図で図示した遺物が1個体分である。口縁部下端に三角形の突帯を貼り付け刻み目を施す。415・416は甕小破片である。416は内面に刷毛を有し口縁部外面上には三角突帯を貼り付けたのち刻みを施す。417・418は壺である。417は内外面磨きを行う。418是有輪羽状文を刻む。

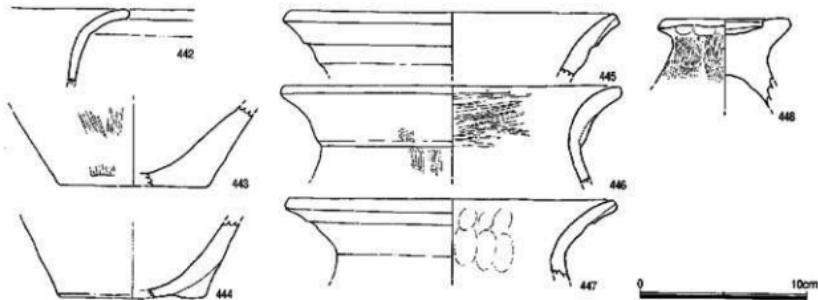
#### S U 0 1 6 (第57図)

A区西側で検出し、SU018と並ぶ。平面形は径2.4m~2.6mの円形を呈し深さ70cmを測る。壁は本米オーバーハングしており埋土は中央が盛り上がるレンズ状の堆積を示す。遺物は9~12層から多く出土する。また床面上で完形の甕が1個体と穿孔された甕の底部を検出した。甕・壺、砾石、石器、黒曜石剥片が出土している。また出土遺物中顔料を塗布した小型壺の破片があり(434~439)、本市埋蔵文化財センターにおいて蛍光X線撮影を行い顔料の同定作業を行っているので巻末の付論を参照されたい。前期前半でも新しい様相を示している。

**出土遺物 (第59図)** 419~427は甕である。419は内面指なで外面板なでを行い、口縁端部の刻み目は全面に施す。421は屈曲が強く端部全面に刻みを行なう。422は端部下端に刻む。423・424は突帯文系である。425・426は甕の底部破片で径1.5cm程度の穿孔を行なう。425・427は外面綫刷毛を行うが425



第59図 SU016出土遺物実測図 (441は1/2、その他は1/3)



第60図 SU017出土遺物実測図 (1/3)

はそののち板なでを施す。428～439は壺である。428は口縁端部上面に粘土帶を貼り付けている。429は口縁外面を肥厚させ屈曲部には段をつける。431～433は中型の壺胴部である。いずれも外面を横向に磨き、ヘラ描きの文様を施す。431・433は重弧文が残っている。430は壺底部破片である。434～439は小型壺である。いずれも彩文を施すが遺存状態は不良で土に転写されたものを復元するなどして陶化している。434は顔料水銀朱で平行する斜線と縦線が観察できる。435は顔料ベンガラで凹線間に顔料を塗布している。436は顔料ベンガラで2条の平行線が描かれる。437は顔料水銀朱で有軸の羽状文であろうか。438は顔料ベンガラで有軸羽状文を描く。439は顔料ベンガラで意匠は不明である。440は玄武岩製石斧の破損品である。441は黒曜石製石鎌である。

#### S U 0 1 7 (第57図)

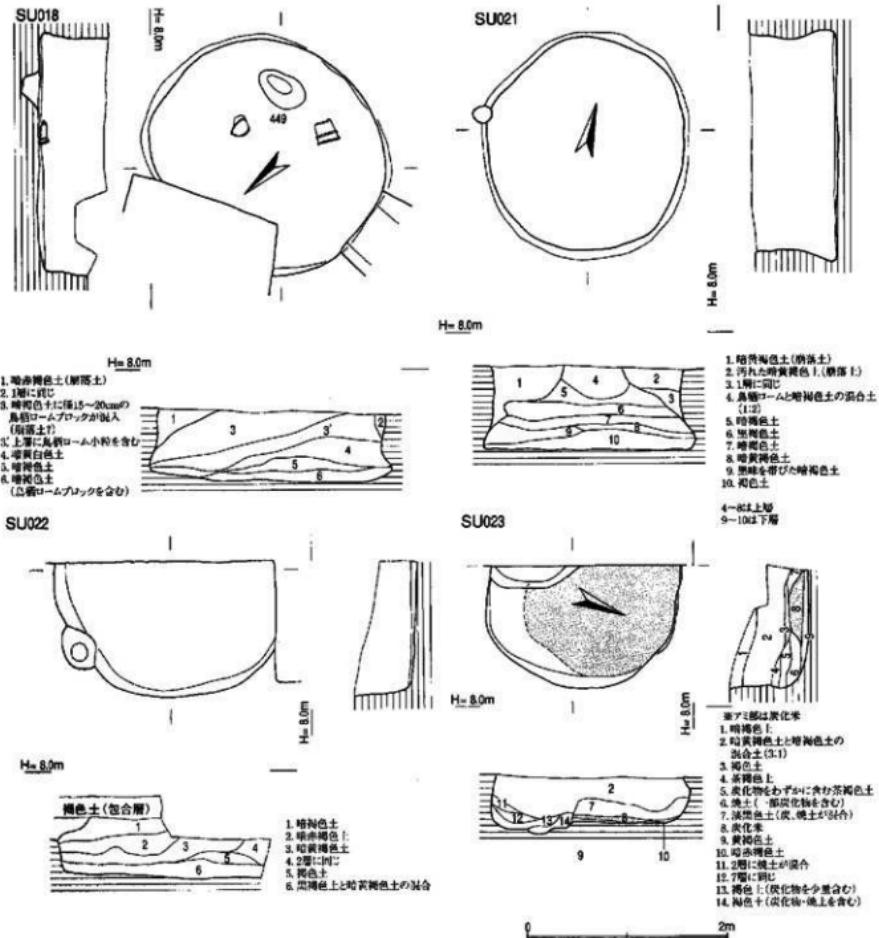
A区西隅で検出する。平面形は径2.5mの円形を呈し深さ100cmを測る。崩落上の状態から本来の壁がオーバーハングしていたことがわかる。埋土は中央が盛り上がるレンズ状の堆積を示し、やや砂性を帯びロームを粒状もしくはブロックで多く含む6層までを上層、以下のやや粘性が強くロームが少ない層群を下層とした。甕・壺・蓋・黒曜石剥片が出土している。前期中頃～後半であろう。

**出土遺物 (第60図 442～448)** 445・446が上層、それ以外は下層出土である。442～444は甕である。443は外面縦刷毛を行う。444は底部外周に粘土帶を貼り付けて整形しており、やや上げ底風になる。445～447は壺の口縁部である。口縁部外面に粘土帶を貼り付け段を作る。448は蓋の上面はつぶれてやや歪む。外面は縦刷毛を行う。

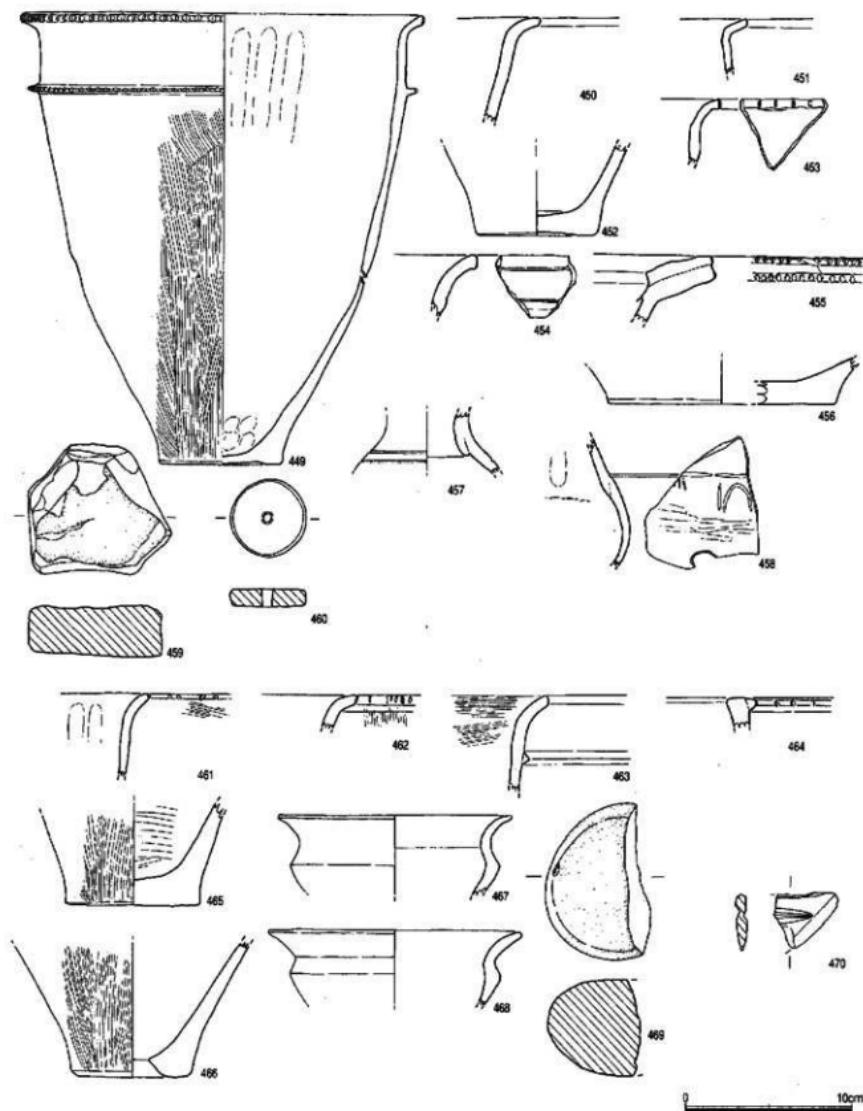
#### S U 0 1 8 (第61図)

A区西側で検出し、SU016と並ぶ。平面形は径2.4m～2.6mの円形を呈し深さ70cmを測る。壁は本来オーバーハングしており埋土は中央が盛り上がるレンズ状の堆積を示す。遺物は9～12層から多く出土する。また床面上で完形の甕が1個体と穿孔された甕の底部を検出した。甕・壺・砥石・石鎌、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられる。

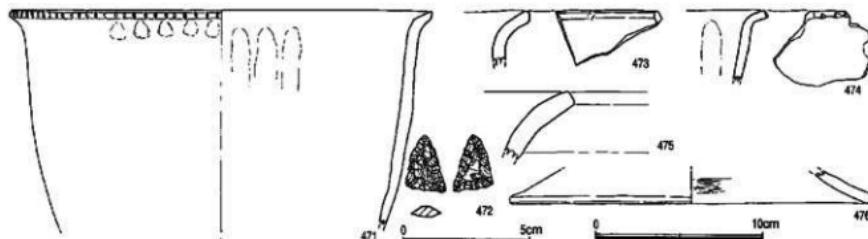
**出土遺物 (第62図 449～460)** 449は図示した遺物が接合している。如意形の口縁部及び胴部突起に刻みを行なう。外面縦刷毛内面指なでを行なう。450～452は口縁部破片である。いずれも口縁部の屈曲が強い。453は甕底部である。わずかに上げ底となる。454～458は壺である。454は端部を丁寧に面取りし端部を下方に垂下させる。455は内面に粘土帶を貼り付け、端面には上下に刻みを行なう。457は肩部に2条の沈線が巡る。458は1条の沈線の下にヘラ描きの文様が刻まれる。焼成後に穿孔が行な



第61図 SU018・021・022・023実測図 (1/50)



第62図 SU018・021出土遺物実測図 (1/3)



第63図 SU022・023出土遺物実測図 (472は1/2、その他は1/3)

われた可能性がある。459は砂岩製の砥石である。460は完形の土製紡錘車である。

#### S U 0 2 1 (第61図)

A区西隅で検出し、SU033と対になる。平面形は径2.1mの円形を呈し深さ85cmを測る。崩落土の状態から本来の壁がオーバーハングしていたことがわかる。埋土は比較的水平な堆積を示すが4層は人為的な埋立ての可能性が高い。壺・壺・鉢・石器、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられよう。

**出土遺物 (第62図 461~470)** 461~464は壺の口縁部である。461・462は刻みを有する如意形の口縁部である。463は如意形の口縁下に突帯を貼り付ける。464は端部外面に突帯を貼り付け断面三角形に仕上げる。465・466は壺の底部である。465は内面に単位の大きな刷毛目状の痕跡が残る。466は底面外側から焼成後の穿孔が行なわれる。467・468は突帯文系の鉢である。469は玄武岩製の磨き石である。470は擦り切りの石包丁である。刃部は両刃で背面にも擦り切りによる切断の痕跡が残る。

#### S U 0 2 2 (第62図)

A区西端で検出する。SU022・023・052・056で一群をなす。平面形は復元径2.5mの円形を呈し深さ60cmを測る。床面は平坦で壁は現状ではほぼ直立している。上層断面から南側の壁はオーバーハングしていることがわかる。壺・壺・蓋、石器、黒曜石剥片が出土している。前期中頃~後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第63図 471・472)** 471は壺である。刻みは口縁端部全面に行なわれる。調整は内外面ともになでによる。472は黒曜石製の石鎌である。

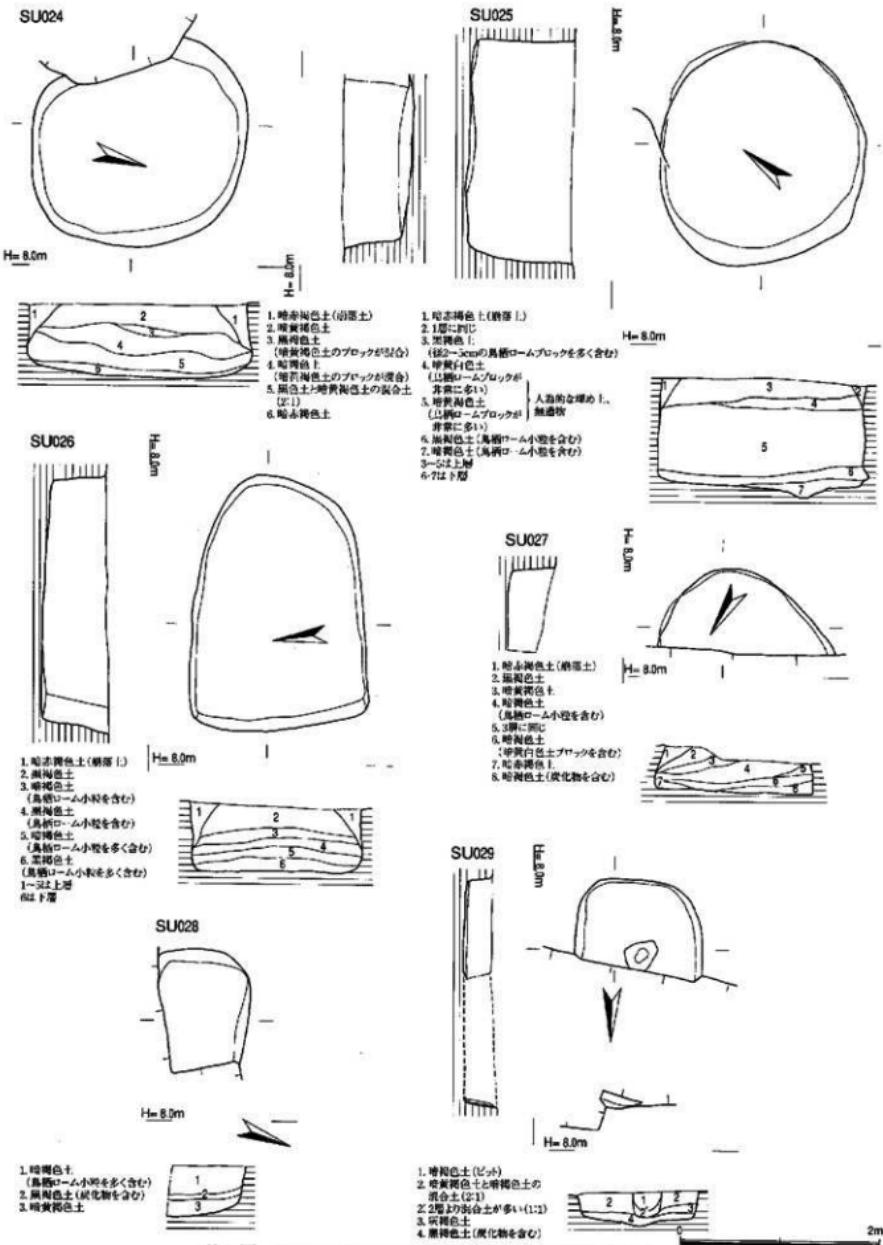
#### S U 0 2 3 (第61図)

A区西端で検出する。SU022・025・052・056で一群をなす。平面形は復元径1.9mの円形を呈し深さ50cmを測る。東半分ではほぼ床面全体に炭化米が広がり、最大厚は15cmである。床面は平坦で西側に掘り込みが残るが、上層から炭化米の層が切られており床面を一部掘りなおした可能性が考えられる。壁は現状ではほぼ直立する。断面から南側の壁はオーバーハングしていることがわかる。壺・壺が出土している。前期後半であろうか。

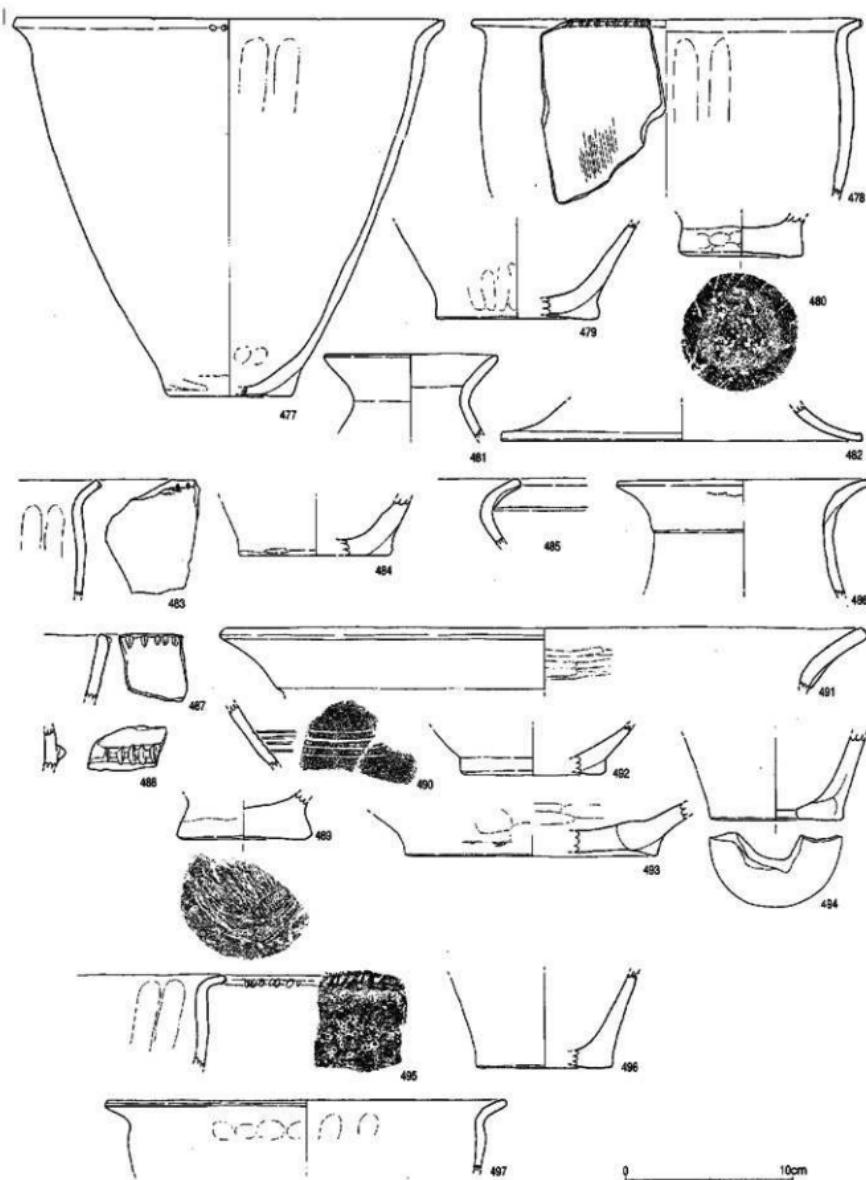
**出土遺物 (第63図 473~476)** 473・474は壺の口縁部である。474は下端部に刻みを行う。475は壺の口縁部である。476は蓋の口縁部である。内面に横刷毛を行う。

#### S U 0 2 4 (第64図)

A区西側で検出しSU025に切られる。平面は径2.1mの円形を呈し深さ70cmを測る。本来の壁面はオーバーハングしている。床面は中央に向かって緩くくぼんでいる。壺・壺、黒曜石剥片が出土して



第64図 SU024・025・026・027・028・029実測図 (1/50)



第65図 SU024・025・026・028・029出土遺物実測図 (1/3)

いる。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物（第65図 477～482）** 477～480は壺である。477は砲弾形を呈する。調整は内外面ともに丁寧なまでに行う。底部は外周に輪状に粘土を貼り付ける。478は端部全面に刻みを行う。479は底部で477と同様の技法を用いる。480は底面にもみ痕が残る。481は小型壺である。口縁部に肥厚は見られない。482は壺の口縁部分で端部から2cm程内外面に煤が付着する。前期後半であろう。

#### S U O 2 5 (第64図)

A区西側で検出しSU024を切る。平面は径2.2mの円形を呈し深さ110cmを測る。本来の壁面はオーバーハングしている。6・7層は使用時の堆積土と考えられるが、3～5層は人為的埋め土であろう。床面は中央に向かって緩くくぼんでいる。壺・壺、黒曜石剥片が出土している。

**出土遺物（第65図 483～486）** 483・484は壺である。483は下端部分に刻みを行う。484は内外面なでによる。485・486は小型の壺である。摩滅が進んでおり器面が荒れているが、屈曲部分の段が痕跡的に残っている。

#### S U O 2 6 (第64図)

A区西側で検出しSU047と対になる。平面は舟形を呈し、長軸2.5m短軸1.7mを呈し深さ65cmを測る。本来の壁面はオーバーハングしている。土層は均一な凸レンズ状を呈し、黒褐色土と暗褐色土が互層状となる。また埋土下位にいくにしたがってロームブロックの量が多くなっている。壺・壺、黒曜石剥片が出土している。前期後半であろう。

**出土遺物（第65図 487～494）** 487～490は突帯文系の壺である。490～493は壺である。490は4条のヘラ引き沈線が巡る。491は屈曲部にはほとんど沈線化した段がつく。492・493は底部である。493は外底面にもヘラ磨きを行う。494は外面から底部穿孔をした壺の底部である。

#### S U O 2 7 (第64図)

A区西側で検出し北側を搅乱で欠失する。平面形は隅丸の長方形に近い形に復元できる。深さは40cmを測る。形状・遺存状態の類似点からSU028と対になるものか。本来の壁面はオーバーハングしている。2～5層は西側から流入した状態を示している。小破片のみで図示できる遺物はない。

#### S U O 2 8 (第64図)

A区西側で検出する。搅乱で形状は不明瞭であるが、短軸1m強の隅丸反方形を呈すると考えられる。深さは50cmを測る。他の貯蔵穴と比べ小型で認定にやや不安が残る遺構であるがSU027との位置的な関係もあり貯蔵穴と考えた。遺物は少量で壺の破片のみが出土する。前期中頃～後半か。

#### 出土遺物（第65図 495・496） 壺の破片である。495は刻みを口縁下端部に行う。

#### S U O 2 9 (第64図)

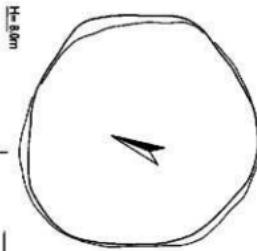
A区西側で検出し中央部分を搅乱で欠失する。平面形は隅丸長方形で長軸2.3m短軸125cm、深さ35cmを測る。床面は平坦であるが中央に緩くくぼむ部分があり、この上層にはピット状の掘りこみがある。掘り込みは4層上面に止まっており貯蔵穴に伴う柱と考える。また床面の窪みは当初に柱を据えた痕跡で、土層に現れたピットはこれを据えなおしたものと考えられる。遺物は小破片のみである。前期中頃～後半であろうか。

#### 出土遺物（第65図 497） 壺の口縁部である。屈曲が強く肩部の張りが強いようである。

#### S U O 3 1 (第66図)

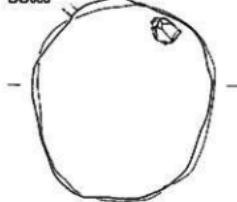
A区西側で検出しSU032と対になる。平面は径2.3mの円形を呈し、深さは90cmを測る。本来の壁面はオーバーハングしている。土層は凸レンズ状を呈し、上層が混合土、中層はやや砂性を帯びた層群、下層は使用時の堆積土に地山上がはさまれている。壺・壺、石斧未製品、黒曜石剥片が出土して

SU031

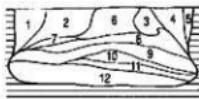


1. 墓赤褐色土(崩落土)
2. 1層に同じ
3. 墓褐色土と黄褐色土  
(馬糞ロームの混合土)(1:2)
4. 墓褐色土上に黄褐色土  
(2:3の混合土:1)
5. 黄褐色土
6. 墓褐色土
7. 5層に馬糞ロームブロックを  
含む
8. 墓褐色土上層を中心として  
炭化物を含む、馬糞ロームブロックを含む
9. 墓褐色土
10. 墓褐色土
11. 黄褐色土
12. 4-11は上層  
5-7は中層(特性を表す) 8-10は下層

SU033

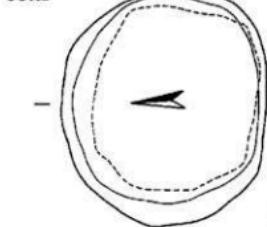


H= 8.0m



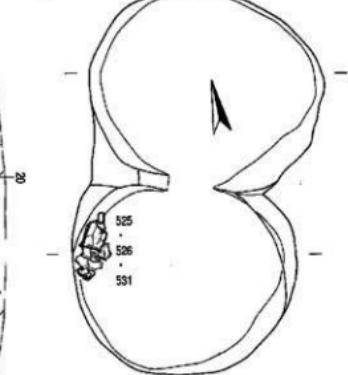
1. 墓褐色土(崩落土)
2. 耙黄褐色土(崩落土)
3. 2層に同じ
4. 1層に同じ
5. 1層に同じ
6. 墓褐色土
7. 墓褐色土上(炭化物をわずかに含む)
8. 墓褐色土  
9. 墓褐色土
10. 墓褐色土上を層状に漬じた墓褐色土
11. 黑褐色土
12. 馬糞ロームブロックを多く含む墓褐色土
- 6-11は上層  
12は下層

SU032



1. 墓土・炭化物を含む墓褐色土
2. ローム・ロームブロック、焼土・炭を含む墓褐色土
3. 墓褐色土
4. 炭化物を含む墓褐色土
5. 3層に同じ
6. 墓褐色土
7. 墓褐色土
8. 墓褐色土  
(2層に馬糞ロームブロックが  
少ない、地1は多く含む)
9. 墓褐色土
10. 炭化土
11. 燃土
12. 焼土と炭の混合
13. 成層(炭化土は全くなし)

SU043

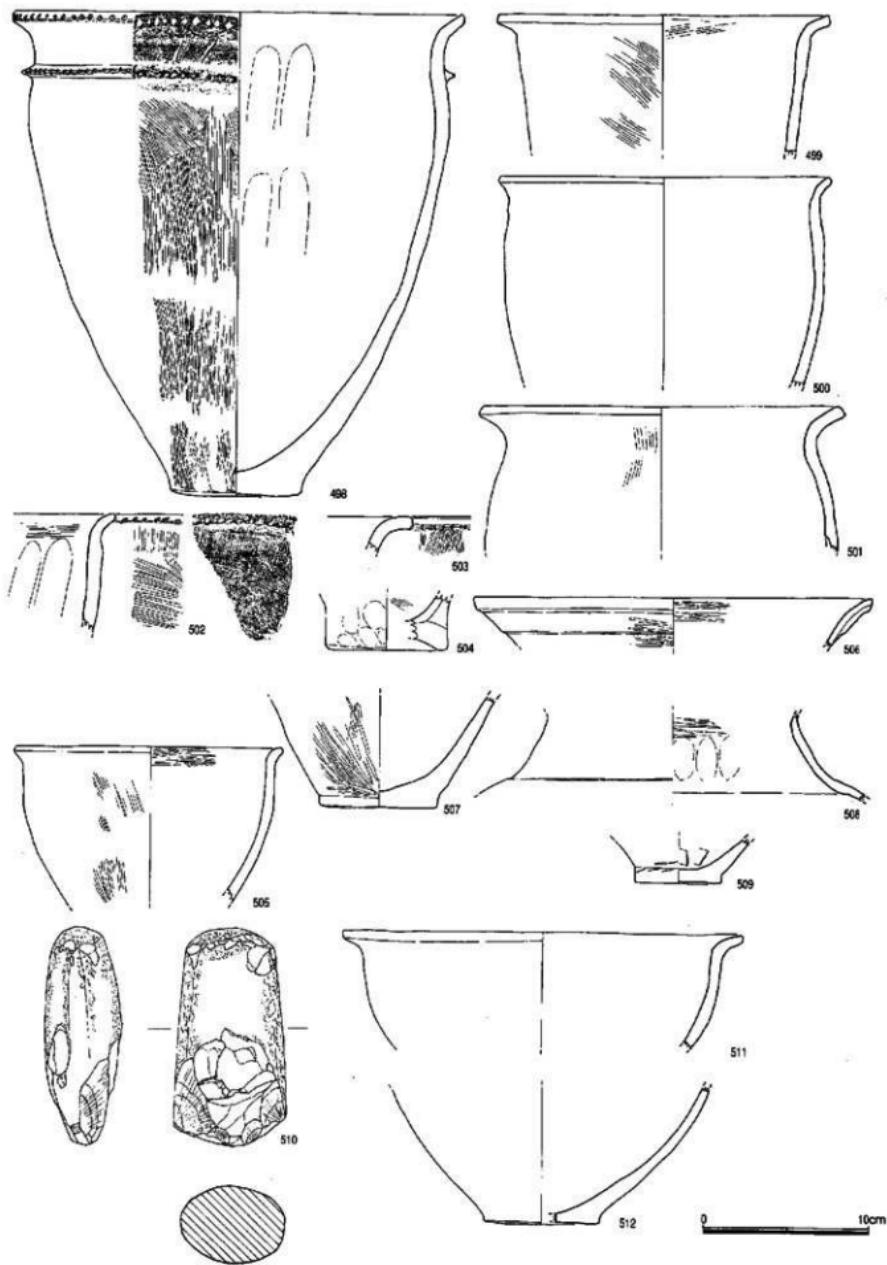


H= 8.0m

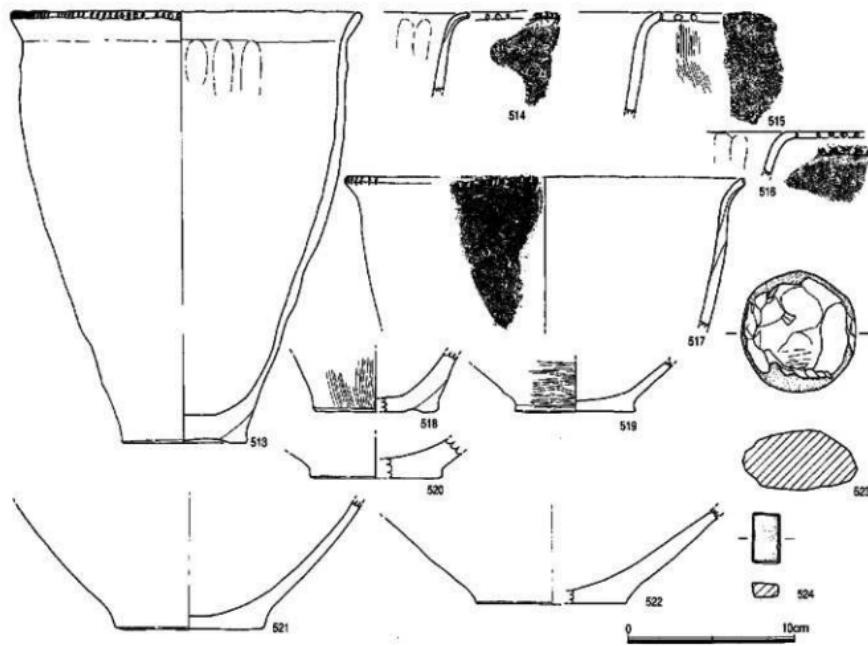
1. 墓黃褐色土(崩落土)
2. 2層に同じ
3. 墓褐色土
4. 墓褐色土上と墓褐色土の混合土:(1:1)
5. 墓褐色土と墓褐色土の混合土:(3:1)
6. 墓褐色土
7. 1層に同じ
8. 9層に同じ
9. 墓褐色土と墓褐色土の混合土:(2:1)
10. 11層に同じで汚れている
11. 墓褐色土
12. 墓褐色土と墓褐色土の混合土:(1:1)
13. 14層に同じ
14. 墓褐色土(馬糞ローム小塊を含む)
- 14' 14層に炭化物を含む
15. 墓褐色土
16. 墓褐色土
17. 墓褐色土
18. 墓褐色土
19. 墓褐色土
20. 焦炭土
21. 焦炭土
22. 墓褐色土(馬糞ローム小塊を含む)
23. 22層の2層を表する(炭化物を含む)
24. 墓褐色土(15-20cmの馬糞ロームブロックを多く含む)
25. 墓褐色土
26. 墓褐色土  
(馬糞ローム小塊と炭化物を含む)



第66図 SU031・032・033・043火災図 (1/50)



第67図 SU031・032出土遺物実測図 (1/3)



第68図 SU033出土遺物実測図 (1/3)

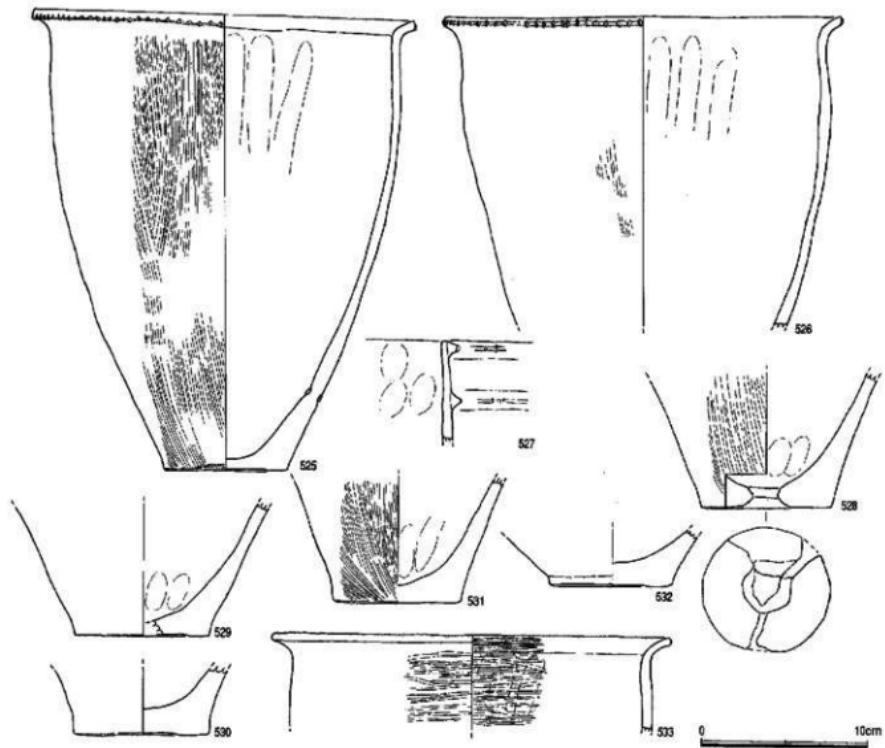
いる。前期後半に位置付けられる。

出土遺物（第67図 498～510） 498は下層出土の折衷系の甕である。口縁下の突帯と口縁下端部に刻みを施す。外面は全体に刷毛を行い底部付近には板ナデを行っている。499～503は上半部分の破片である。502・503の刻みは口縁部下端に行われる。504は突帯文系の底部である。外底にもみ痕が残る。505は鉢である。口縁部内面～外面には刷毛目を施す。506～509は壺である。506は口縁部外面を肥厚させ段をつけている。507は底部で外面に縱方向の磨きと底部直近には横方向の磨きを行う。508は肩部に段を有する。509は底部で円盤状の粘土帶を貼り付ける。510は玄武岩製の石斧未製品である。

#### S U 0 3 2 (第66図)

A区西側で検出しSU031と対になる。平面は径2.0～2.4mの円形を呈し、深さは55cmを測る。床面に接して薄く炭層が形成される。また噴面上に厚さ15cm～25cm程度の焼土が通り、その内側全体に厚さ15cmで炭化米がたまっている。本調査で炭化米がまとまって出土したのはSU023・032・054・099であるが埋土に炭層・焼土が形成され、内部での燃焼が想定できるのはSU032・099のみである。炭化米上部まで(1～9層)を上層として遺物を取り上げる。甕・壺が出土している。前期中頃～後半に位置付けられよう。

出土遺物（第67図 511・512） 511は口縁部如意形を呈する鉢である。512は壺の底部である。い



第69図 SU043出土遺物実測図 (1/3)

それも摩滅が進み調整は不明瞭である。

#### S U 0 3 3 (第66図)

A区西側で検出しSU021と対になる。平面は径1.8m~2.0mの円形を呈し、深さは80cmを測る。本来の壇面はオーバーハンジしている。床面から20cmほど浮いて完形の甕が1個体横倒してつぶれて出土する。このレベルは使用中のある時期の床面を示すものであろう。甕・壺、石製品、黒曜石剥片が出土している。前期前半に位置付けられる。

**出土遺物 (第68図)** 513は口縁部の一部を欠く甕である。砲弾形を呈し口縁部の屈曲は弱い。刻みは端部全面に行う。調整は内外面ともになでによる。底部は輪上の粘土帯を貼り付けて整形しているようで、中央が上げ底となる。514~517は甕の上半部分である。刻みはいずれも端部全面に行われる。515には外面刷毛が行われるが他はなでによる。518は甕の底部である。外面には刷毛目が残る。519~522は壺の底部である。519は胎土精良の精製品である。円盤状の粘土帯を貼り付ける。520~522は胎土に砂粒を多く含む。523は玄武岩製の磨き石であろう。524は凝灰岩製の小型砥石である。

#### S U 0 4 3 (第66図)

A区西端で検出する。当初2基の貯蔵穴の切りあいと考え西側半分を掘り下げ土層確認を行った。この結果双方の床面のレベルが一致し平坦となり、中央の掘り込みが接する部分には床面から高さ50cmの版築状に土を盛り上げ(15~19層)間仕切りのようにしている。また他の埋土は14'層=26層、14層=22・23・25層と考えられ堆積状況にも不整合は認められない。3層~13層・20・21層はこの後の人的な埋立て土で、24層は埋没後に再利用を試みて縦坑を掘削した痕跡であろうか。当初からこのような形状を志向して掘削されたものか、別々の貯蔵穴を掘削して最終的にこのような形態をとったものかは不明であるが、以上のことより本貯蔵穴は現状で平面「8」字形を呈する1基の貯蔵穴と考えられる。北側坑の壁際で14'層上面から甕が2個体分つぶれて出土している。甕・壺、黒曜石剥片が出土している。前期中頃に位置付けられる。

**出土遺物**(第69図) 525~531は甕である。525はほぼ完形である。口縁部はやや強めに屈曲し端部下端に刻みを行う。外面には縦刷毛を行い底部付近は一部なでにより刷毛目が消えている。526は刻みを端部全面に行う。527は突帯文系である。2条の三角突帯を貼り付ける。528~531は底部である。528には外面からの穿孔が行われる。529・530は外面なでを行い、528・531は刷毛目が残っている。532は甕の底部である。533は鉢で内外面に横方向の磨きを行っている。

#### S U O 4 7 (第70図)

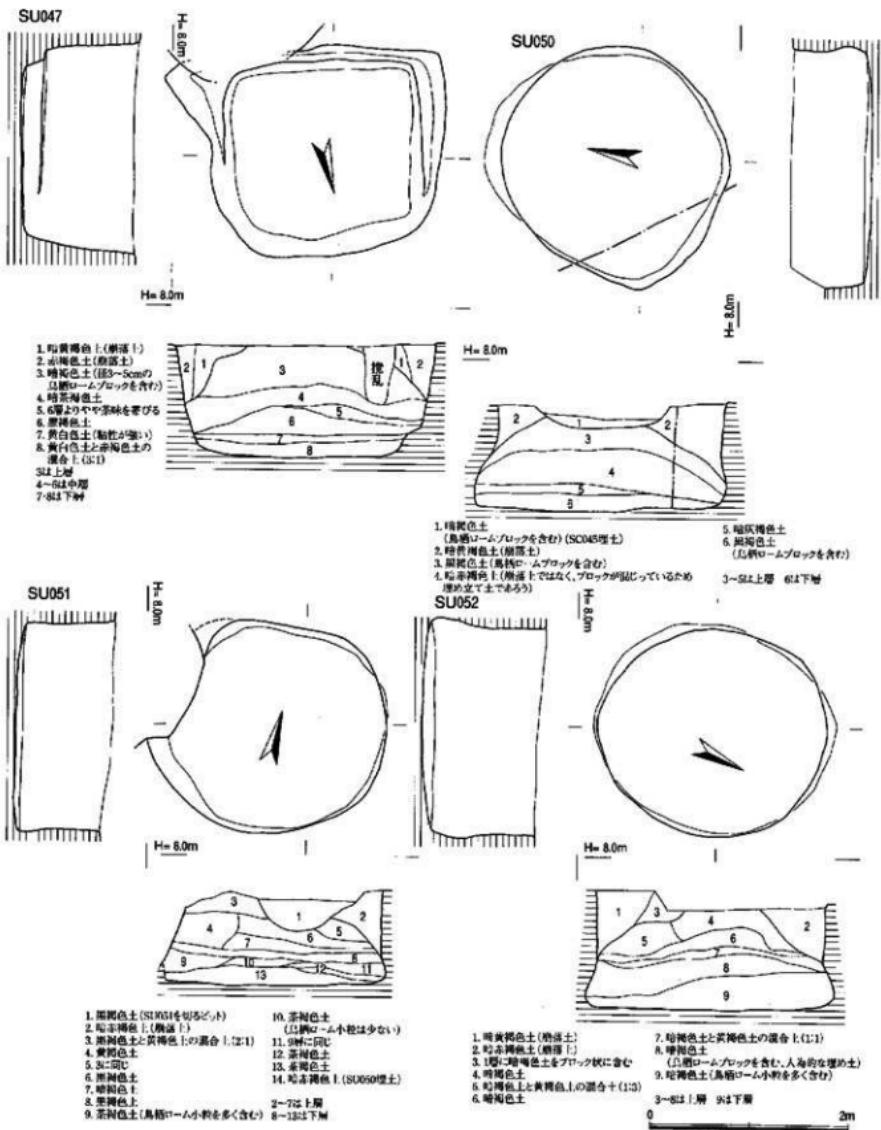
A区西側で検出しSU026と対になる。平面は一边2.1m~2.3m略方形を呈し、深さは110cmを測る。南西のコーナー部分が崩落により一部乱れている。また本来の壁面はオーバーハンジングしている。7・8層は水平に堆積しているが、土質よりこれは7層を貼って床面を作り直したものと考えられる。また8層上面にも黒色土が薄く堆積しておりこの面でも床面として使用されている。以上から本来の床面を含め3面の使用面が確認できる。遺物は3層~6層から大半出土しており、7・8層からは遺物は出土していない。甕・壺、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物**(第71・72図) 534~552は甕である。534・548は突帯文系である。535~539は如意形口縁の小破片である。537以外は刻みを口縁下端部分に行う。540~542は折衷系である。突帯と口縁部下端に刻みを行うが、542は刻みが浅く不明瞭である。543~547は如意形口縁部を有する甕上半部である。547は外面に粗い板なでを行うが他は刷毛である。また547は調整が粗く胴部が長球形を呈している。549~552は底部破片である。外面縦刷毛を行う。552は外底面から焼成後に穿孔する。553は鉢である。口縁部の屈曲は強く、胴部上位に沈線状の段を有する。554~568は壺である。554~557は口縁部である。いずれも外面を肥厚させ段をつけている。554は口縁端部に刻みを行う。555・556は口縁が強く外反する。555は内面に刷毛目が残り、556は口縁部内面~外面に磨きを行う。557は口縁端部を断面三角形に仕上げる。外面は磨きの上からヘラ描きの重弧文が刻まれ、口縁部内面は刷毛のうち横方向に磨く。558~562は底部である。563~567にはヘラ描きの文様が残る。563・564は横線にはざまれた斜格子文、565は重弧文である。566は最初に横線4本で分割しその後その間を3層の斜格子文で充填している。567には4条の沈線が刻まれる。569・570は蓋である。570は内面に煤が帶状に付着する。571は滑石製の円盤状製品である。全体を磨いている。572・573は玄武岩製の石斧木製品である。

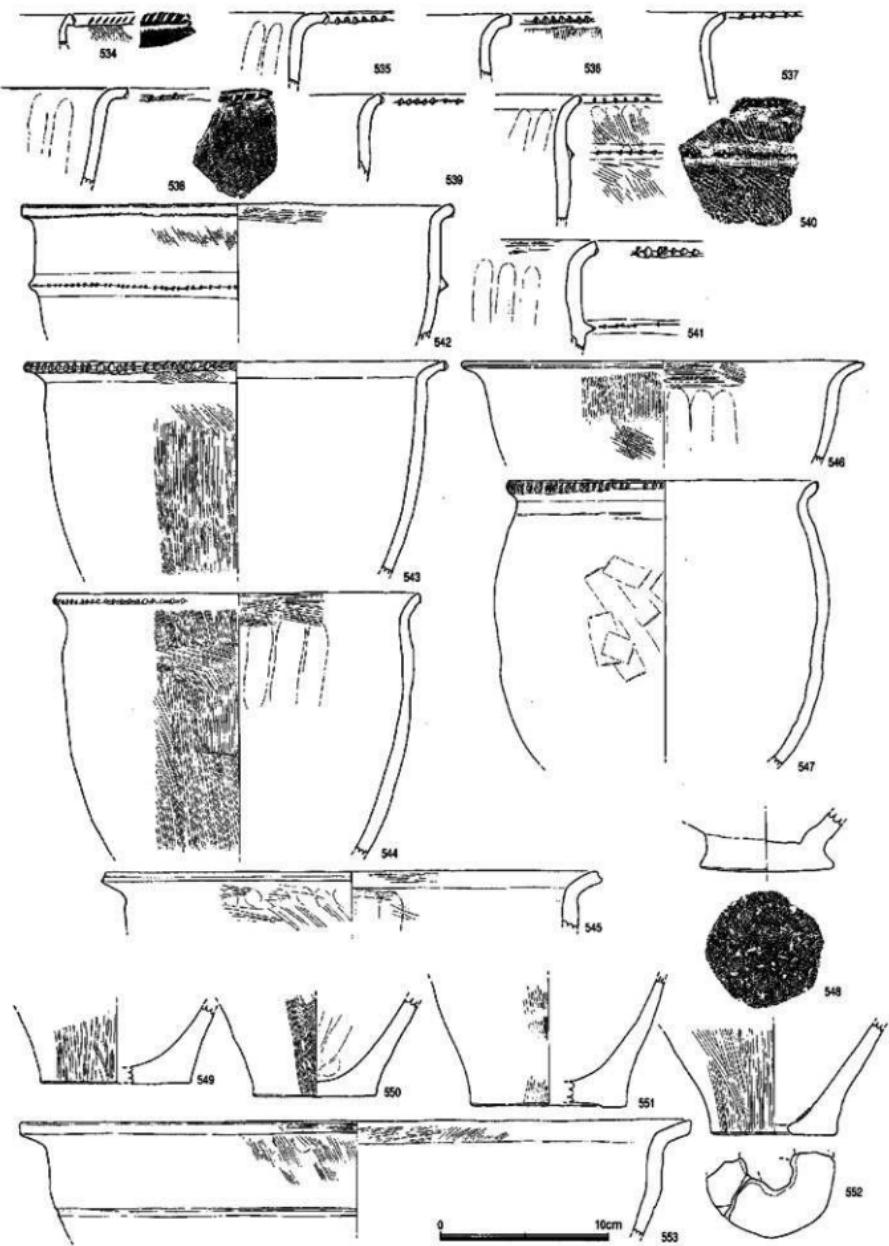
#### S U O 5 0 (第70図)

A区西端で検出しSU051と対になり、調査時にはこれに後出する遺構と考えられたが出土遺物から先後関係を認めたと考えられる。平面は径2.5mの円形を呈し、深さは110cmを測る。本来の壁面はオーバーハンジングしている。上層は凸レンズ状を呈し全體に混合土が主体を占める。甕・壺、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられる。

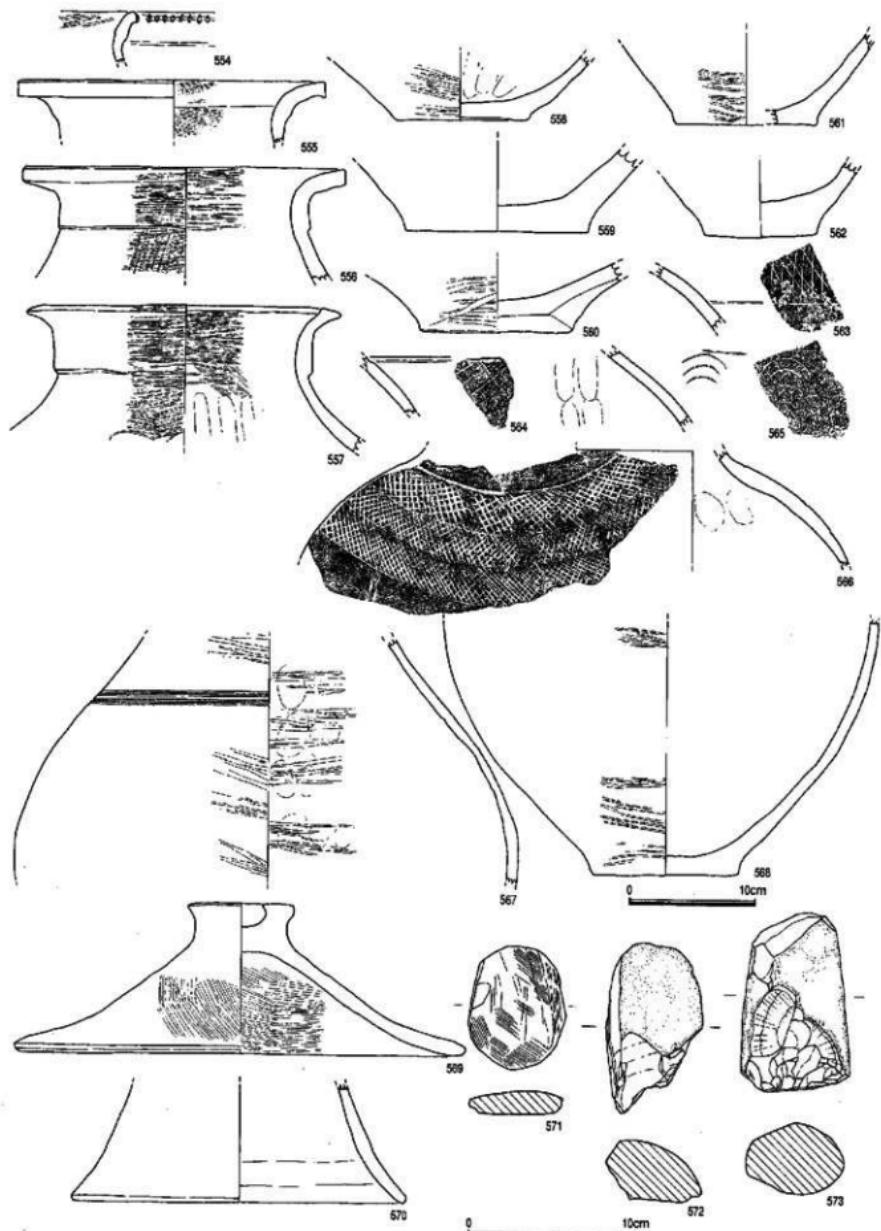
**出土遺物**(第73図) 574~577 574は突帯文系の甕破片である。外面に条痕が残る。575は如意形



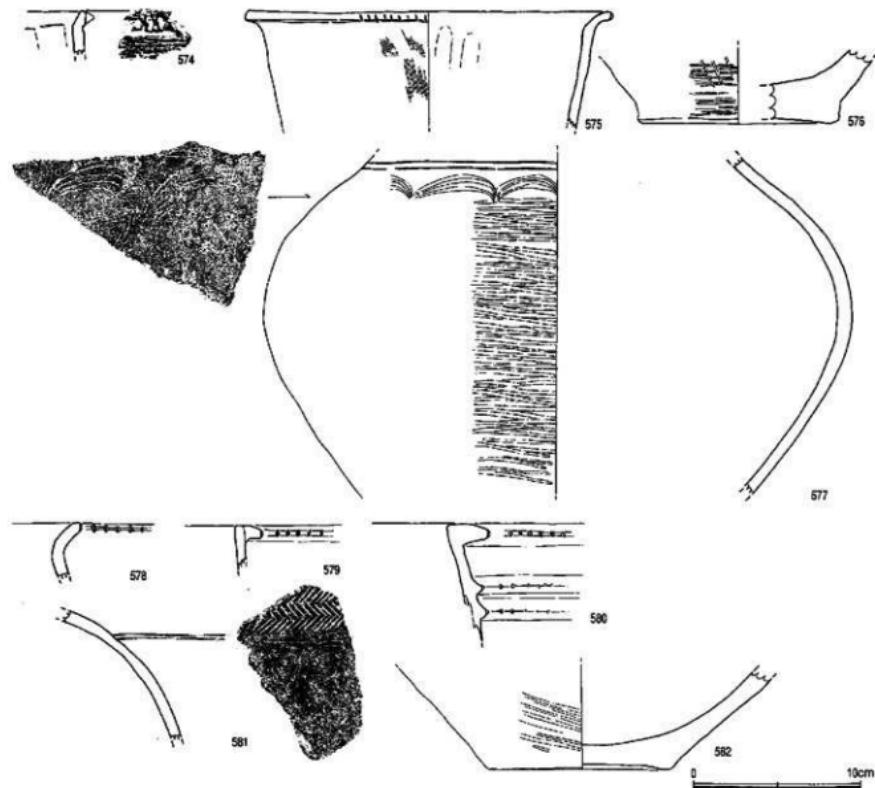
第70図 SU047・050・051・052実測図 (1/50)



第71図 SU047出土遺物実測図 1 (1/3)



第72図 SU047出土遺物実測図2 (567・568は1/4、その他は1/3)



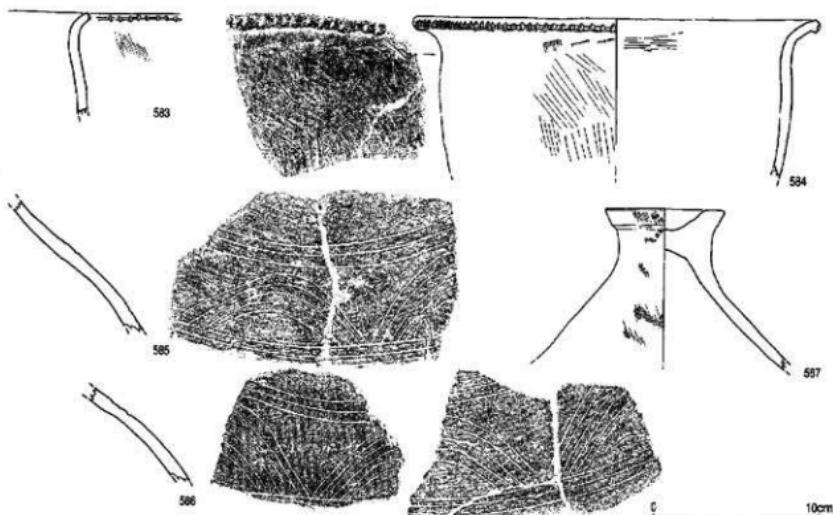
第73図 SU050・051出土物実測図 (1/3)

口縁の甕である。屈曲は強く刻みは端部下半に行われる。576は壺の底部である。外面に横方向の後一部に縱方向の磨きを行う。577は壺胴部で磨きの後に2条の横線の下に粗雑な重弧文を刻む。

#### S U 0 5 1 (第70図)

A区西端で検出しSU050に切れこれと対になる。平面は径2.1~2.4mの円形を呈し、深さは95cmを測る。本来の壁面はオーバーハンプしている。埋土は比較的水平に近い状況を示す。甕・壺・黒曜石片が出土している。中期初頭に位置付けられるがSU050との切り合い関係との間に離隔が生じており、遺構間の切り合いを誤認したものと考えられる。

**出土遺物 (第73図 578~582)** 578は如意形口縁の甕である。579・580は端部外面に長めのコ字上の粘土帯を貼り付けている。口縁端部及び突帶に刻みを行う。581は壺の肩部で2条の横線の上部に無軸の羽状文、下部に重弧文がヘラ描きにより刻まれている。582は化粧土を塗布した壺底部である。



第74図 SU052出土遺物実測図 (1/3)

#### S U 0 5 2 (第70図)

A区西端で検出し、SU023と対になる可能性が高い。平面は径2.1m~2.3mの円形を呈し、深さは120cmを測る。本来の壁面はオーバーハンプしている。甕・壺・蓋、黒曜石片が出土している。前期中頃に位置付けられる。

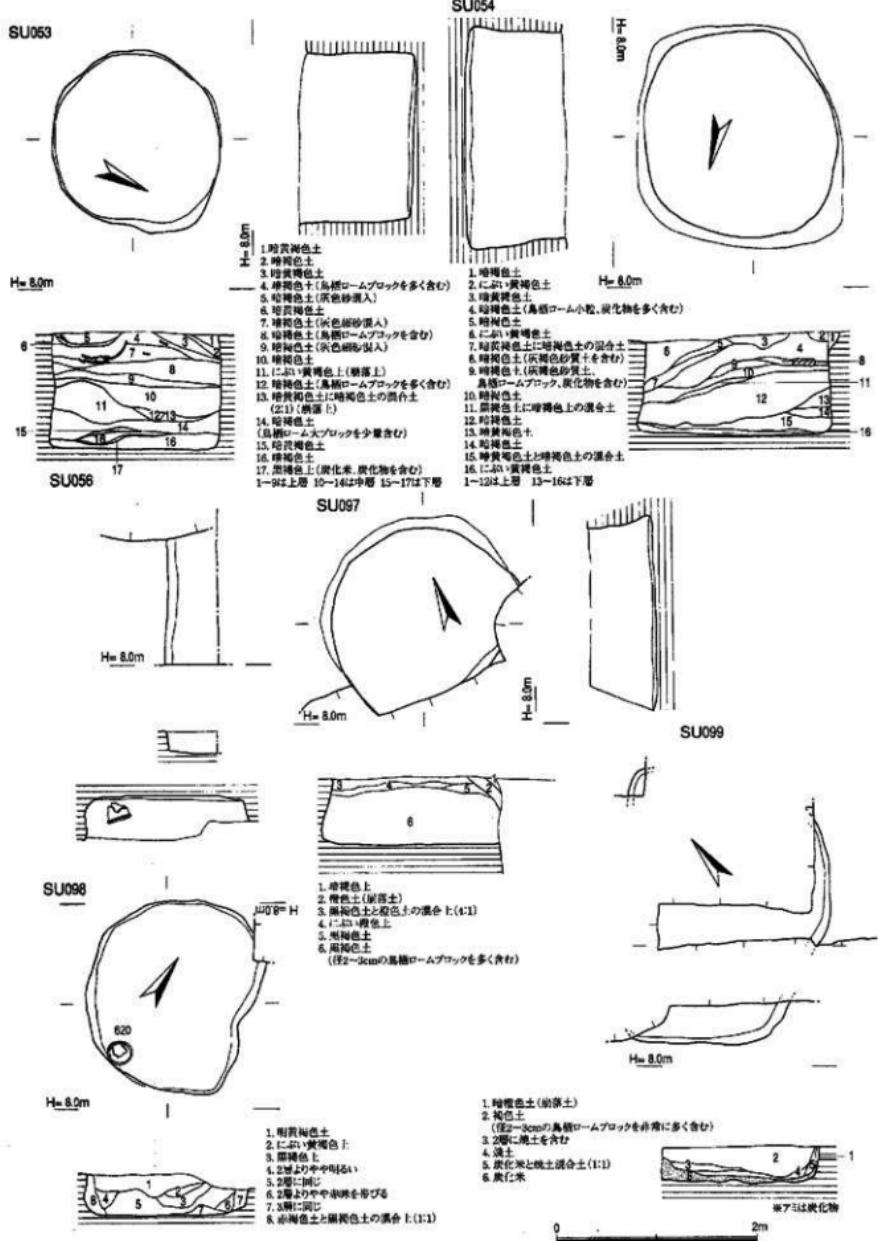
**出土遺物 (第74図)** 583・584は甕である。584は山曲部に単位の細かな刷毛目を施した後胴部に大きな刷毛を施す。

585・586は壺の胴部である。横線間に重弧文を刻む。587は蓋である。外面に縦刷毛を行った後上部にはヘラなでをする。上面はつぶれてやや歪となる。

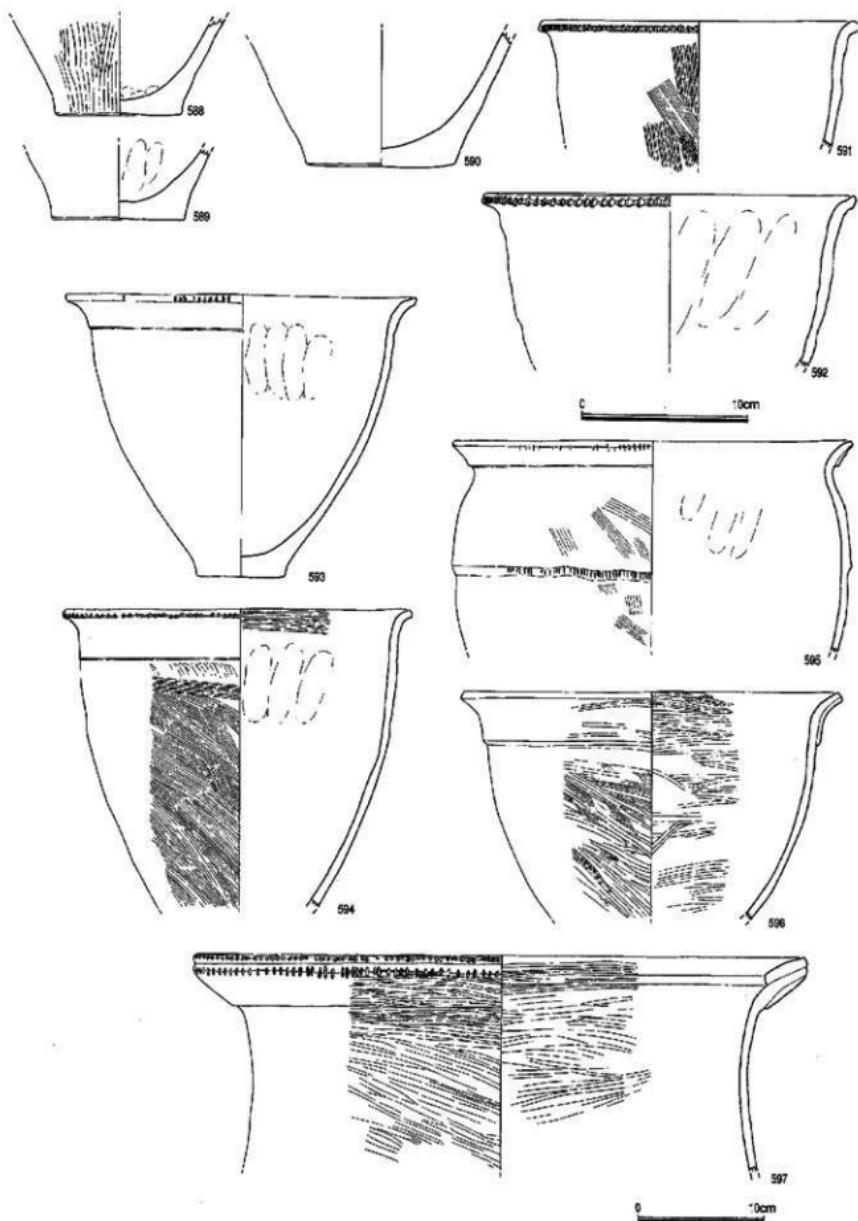
#### S U 0 5 3 (第75図)

A区西側で検出する。平面は径1.7mのやや小ぶりな円形を呈し、深さは115cmを測る。他の貯蔵穴とやや異なり底面近くの抉りこみがほとんどなく壁はほぼ直立し円筒形を呈する。17層は薄い炭化米層でここでは埋没前に炭化米の取り上げが行われているため出土量は非常に少量である。形態及び炭化米の出土などの類似点とともに出土遺物の接合例がありSU054と対になると考えられる。甕・壺、黒曜石片が出土している。前期後半に位置付けられる。

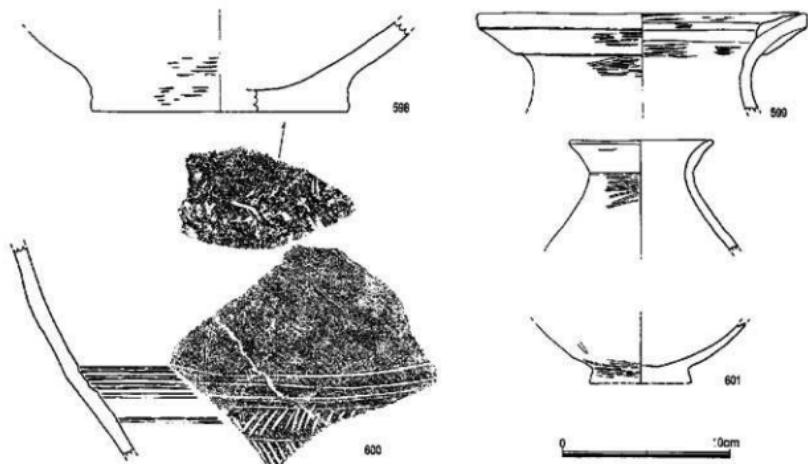
**出土遺物 (第76・77図)** 588~595は甕である。588には刷毛目が残る。591は外面刷毛を行い、刻みは下端部に行う。592・593は外面を丁寧になでている。刻みは592が下端部、593が全面に行われる。593・594は胴部に沈線状の段を有する。594は外面上部に単位の大きな刷毛を行いその後斜め方向に単位の細かな刷毛目を施す。595はSU053と054の接合資料である。口縁部は外面を肥厚させ肩曲部に段をつけている。胴部は丸みを帯び最大径の付近に段を有し、この部分と口縁部下端には筋状の刻みを入れる。調整は外面に刷毛目が残る。596は鉢である。口縁部は外面肥厚し段を残す。内外面に磨



第75図 SU053・054・056・097・098・099実測図 (1/50)



第76図 SU053出土遺物実測図1 (593~597は1/4、その他は1/3)



第77図 SU053出土遺物実測図 2 (1/3)

きを行うが、外面には縦刷毛が一部に残っている。597～601は壺である。597は大型品で口縁部は粘土帯の貼り付けで上下両側を肥厚させる。口縁端部は上端・下端の2箇所に刻みを施す。598は底部で外底面にもみ痕が残り、屈曲部分に叩きの痕跡をとどめる。599は中型品で口縁部上下を肥厚させる。内外面は磨きを行う。600は横線以下に有軸羽状文を描く。601は小型品で口縁部の肥厚ではなく屈曲部分に痕跡的に段が残る。底部は粘土盤が剥落している。

#### S U 0 5 4 (第75図)

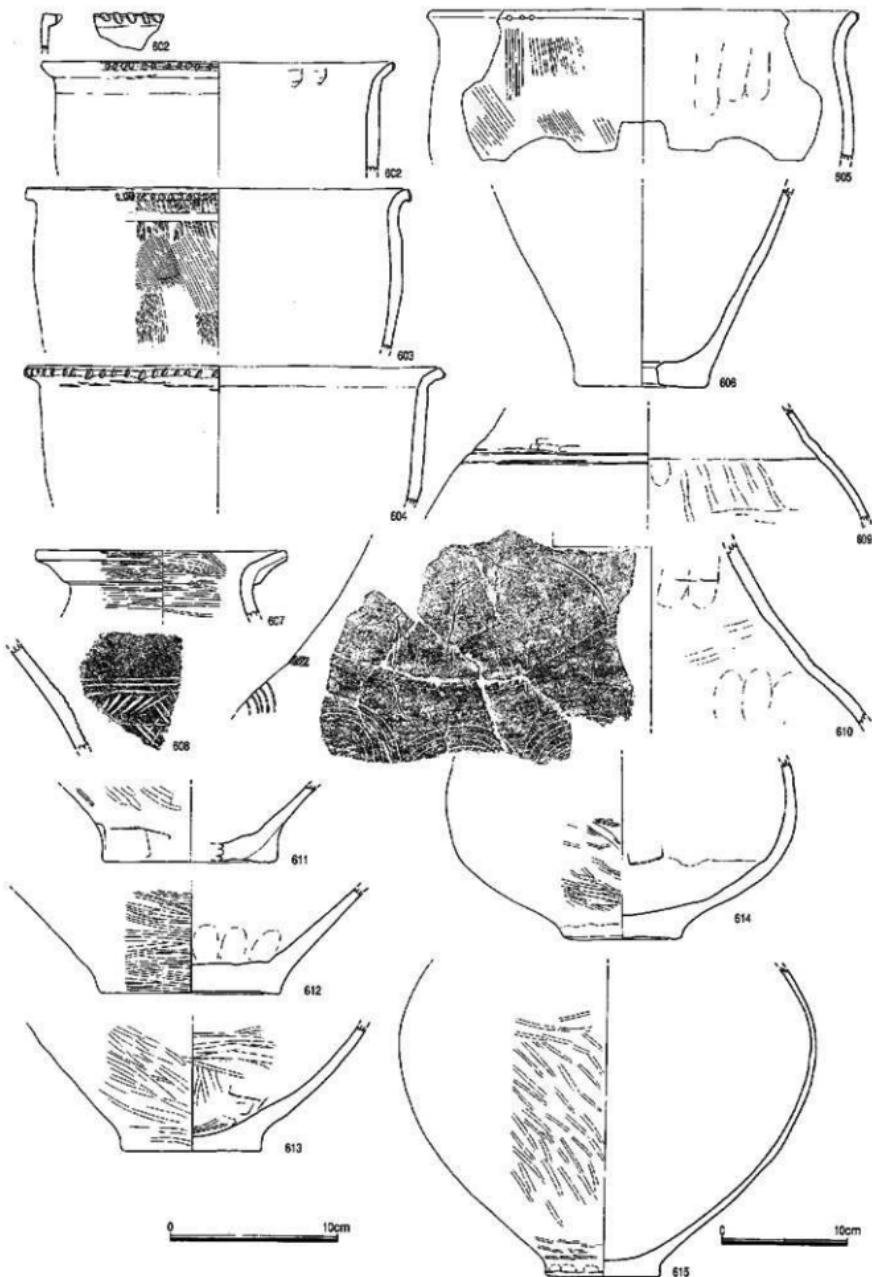
A区西側で検出しSU053と対になる。平面は径2.0mの円形を呈し、深さは100cmを測る。壁面は底面に向かってわずかにオーバーハングしている。埋土は東側に向かって傾斜している。また15層上面には炭屑が薄く広がり、14層下面からは少量の炭化米が出上する。12層の状況から床面の掘り直しも考えられる。壺・壺・黒曜石片が出土しているが壺の破片が主体となる。前期中頃に位置付けられる。

**出土遺物 (第78図)** 602～606は甕である。602は宍帶文系の甕である。602～605は如意形口縁の甕である。刻みは口縁部下端に行う。602・604は肩部外面を丁寧にならべる。606は焼成後の底部穿孔を行う。外面板なで行う。607～615は壺である。607は小型品で口縁部外面を肥厚させ明瞭な段をつける。608～610はヘラ描き文様を施す肩部から胴部中位の破片である。608は粗雑な有軸羽状文である。609は2次的な焼成を強く受けている。肩部に2条の横線を巡らせる。610は肩部に2条の横線を刻みその間を斜線で充填し、以下に重弧文を描く。611～615は胴部下半から底部である。611は外面最下部には板なでを残している。他は磨きによる調整を行なう。

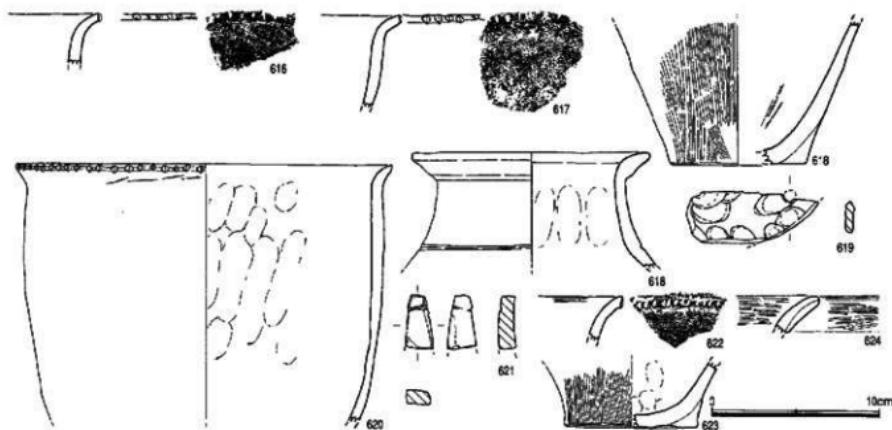
#### S U 0 5 6 (第75図)

A区西端で検出しSU052に切られる。大半が基礎で攪乱されており形状は不明瞭であるが、長方形を呈するものであろう。埋土は黄白色上で深さは20cmを測る。出土遺物はない。

#### S U 0 9 7 (第75図)



第78図 SU054出土遺物実測図 (615は1/4、その他は1/3)



第79図 SU097・098・099出土遺物実測図 (1/3)

B区西端で検出しSE096に切られる。南側を削平されているが復元径2.0mの円形を呈し、深さは65cmを測る。壁面は床面近くで抉りこみ、床面は完全に平坦である。甕・壺、石製品、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第79図 616~619)** 616・617は刻みを有する如意形口縁の甕である。刻みは全面に行われる。618は甕底部である。外面は底部まで刷毛目を施す。618は壺である。口縁部は外面を肥厚させ屈曲部に段を有する。肩部には沈線を巡らせる。619は凝灰岩製の石包丁の欠損品である。

#### S U 0 9 8 (第75図)

B区西端で検出しSU099に並びこれと対になる。平面はいびつな長方形を呈し長軸1.9m短軸1.7mで深さは40cmを測る。南側壁沿い床面の直上近くからで甕の上半部が正位置で出土した。甕・壺、黒曜石製石錐未製品、石製品が出土している。前期中頃～後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第79図 620・621)** 620は甕である。内面指なで、外面は板なでを行い屈曲部には板状工具の小口痕が残る。口縁部の刻みは全面に行われる。621は凝灰岩製の石錐であろう。緊縛用の溝が3面に刻まれる。

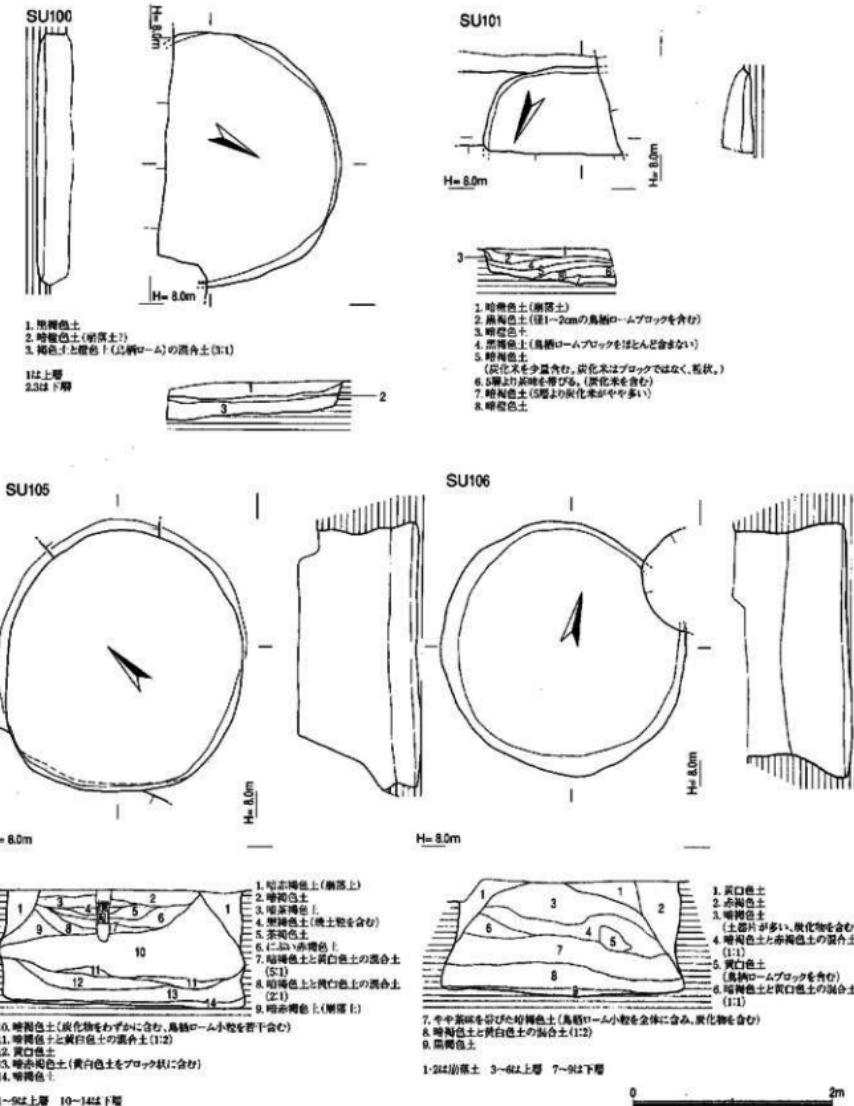
#### S U 0 9 9 (第75図)

B区西端で検出しSU098と対になる。擾乱により遺存状態は非常に悪いが、平面は長軸2.8m短軸2.0m深さ40cmのややいびつな長方形に復元できる。底面直上に炭化米が広がり厚いところで20cmを測る。その上層には焼土(4層)が広がっているが壁面等には被熱の痕跡は認められない。甕・壺の小破片が出土するのみである。前期後半か。

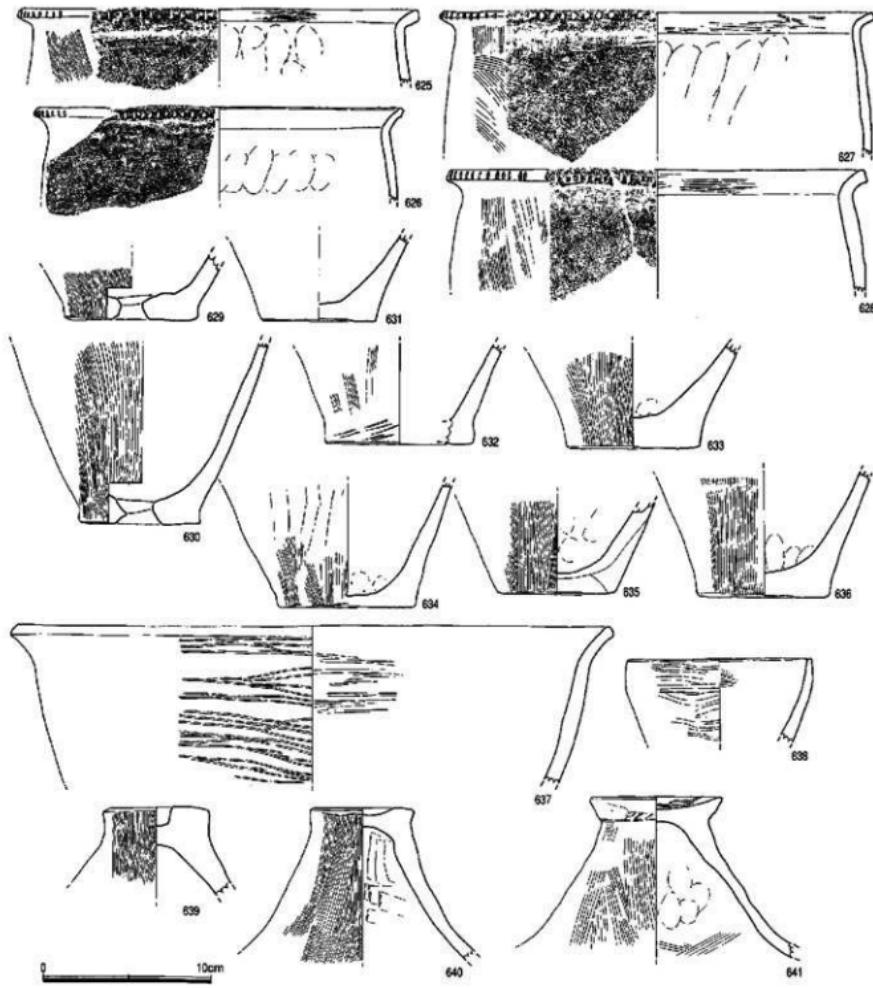
**出土遺物 (第79図 622~624)** 622は甕口縁部である。端面の仕上げは粗い。623は甕底部である。刷毛目を行い最下部に小口痕が残る。624は壺の口縁部で外面の段は痕跡的である。

#### S U 1 0 0 (第80図)

B区中央で検出し搅乱により南側を欠失する。平面は復元径2.5mの円形を呈し、深さは35cmを測る。貯藏穴の基底部分であるが、壁のオーバーハングは認められない。遺物はコンテナ2箱分出土し、



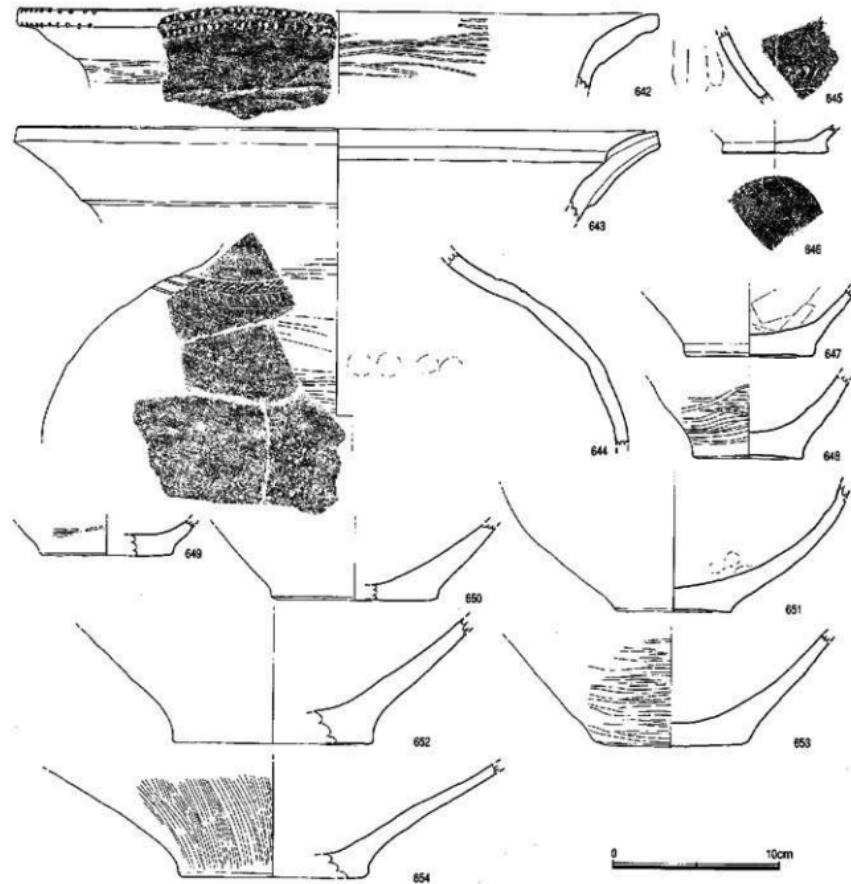
第80図 SU100・101・105・106実測図 (1/50)



第81図 SU100出土遺物実測図1 (1/3)

大半が1層からの出上で特に底部破片が多い。前期後半に位置付けられる。

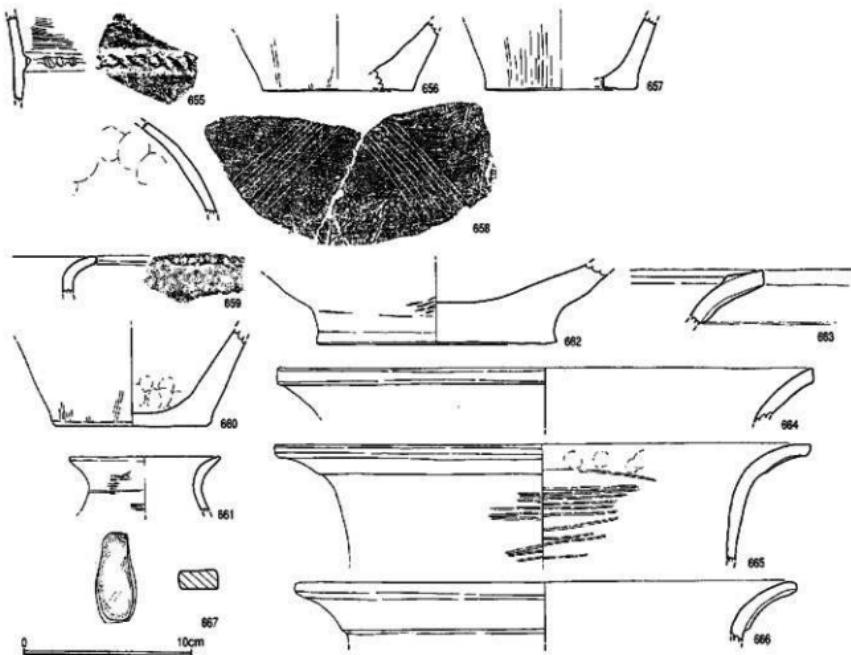
出土遺物（第81・82図） 625～628は甕の上部破片である。628は口縁部全面に刻みを行うが、他は下端部に行う。外周調整は626は丁寧なまでを行い、他は刷毛目を施す。627・628は口縁部内面に横刷毛が残る。629～636は甕底部である。629・630には焼成後の穿孔が行われる。外周調整は631に板なでを施す他は刷毛目による。637・638は鉢である。637は口縁部の屈曲が弱く、内外面に磨き



第82図 SU100出土遺物実測図2 (1/3)

を行う。638は小型品で磨きによる調整を行う。639~641は蓋である。器高が比較的低めで幅が広がり氣味となる。642~654は蓋である。642は内外面を磨き口縁部上下端の2箇所に刻みを行う。外面は肥厚し段がつく。643は口縁部上下とともに肥厚させ外面には明瞭な段がつく。調整は内外面ともになのである。644は肩部に2条の横線を巡らせ間に有輪羽状文を刻む。645・646は小型品である。645は肩部に沈線を施し、以下に軸を2条にした綾杉文を刻む。646外底面には木葉痕が残る。647~654は底部である。摩滅により調整の多くが不明瞭である。647は内面に板などの小U痕跡が残る。また外底面にもみ痕が観察できる。654は外面に板などの刷毛目が行われる。

S U 1 0 1 (第80図)



第83図 SU101・105出土遺物実測図 (1/3)

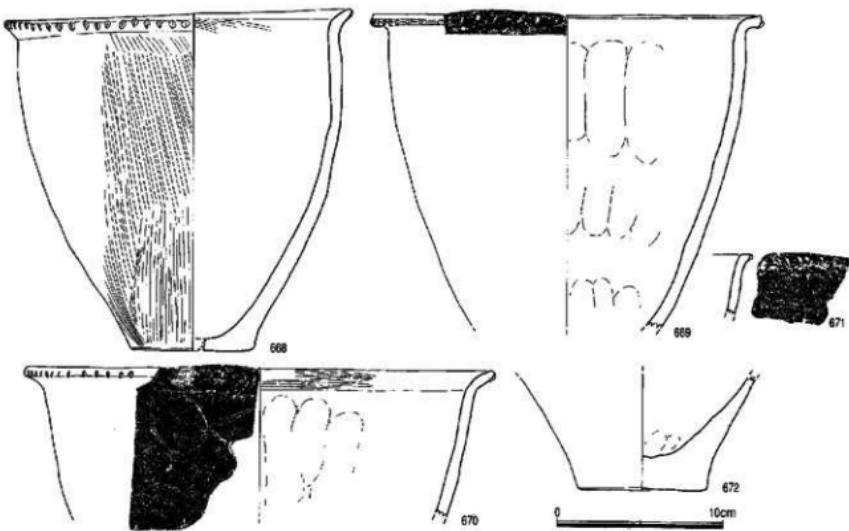
B区西端で機械により大半を欠失する。平面は長方形に近いものと考えられ、深さは35cmを測る。床面には細かな凹凸があり西側に向かって緩やかに傾斜している。5層～7層には埋土中に炭化米が粒状に含まれているが面的に広がりをもつものではない。壺・壺、黒曜石片が出土している。前期前半に位置付けられるものか。

出土遺物（第83図 655～658） 655は尖帯文系の壺腹部である。横方向の刷毛目が残る。656・657は壺底部である。外面はなでである。658は壺の胴部である。複線の山形文を刻む。

#### S U I O 5 (第80図)

B区西端で検出しSU106と対になる。平面は径2.3m～2.6mの円形を呈し、深さは115cmを測る。本米の壁面はオーバーハンプ正在进行している。壁は底面直上でいったん内傾したのち床面から20cm程でもう一度外側に抉りこんでいる。遺物はコンテナ3箱出土しているが図示可能な遺物は少ない。壺・壺、黒曜石片が出土している。前期後半に位置付けられる。

出土遺物（第83図 659～667） 659は如意形LJ縁の壺で口縁部下端に刻みを行う。660は壺底部で焼成後に穿孔を行う。661は小型の壺である。肩曲部に痕跡的に磨き状の沈線を施す。662は大型壺の底部で外面にたたき痕が残る。663～666は壺のLJ縁部である。663は上下面ともに肥厚させ、665・666は外面を肥厚させる。664はLJ縁部断面三角形を呈する。667は凝灰岩製の手持ちの砥石である。



第84図 SU106出土遺物実測図1 (1/3)

側辺部及び小口部分も底面とする。

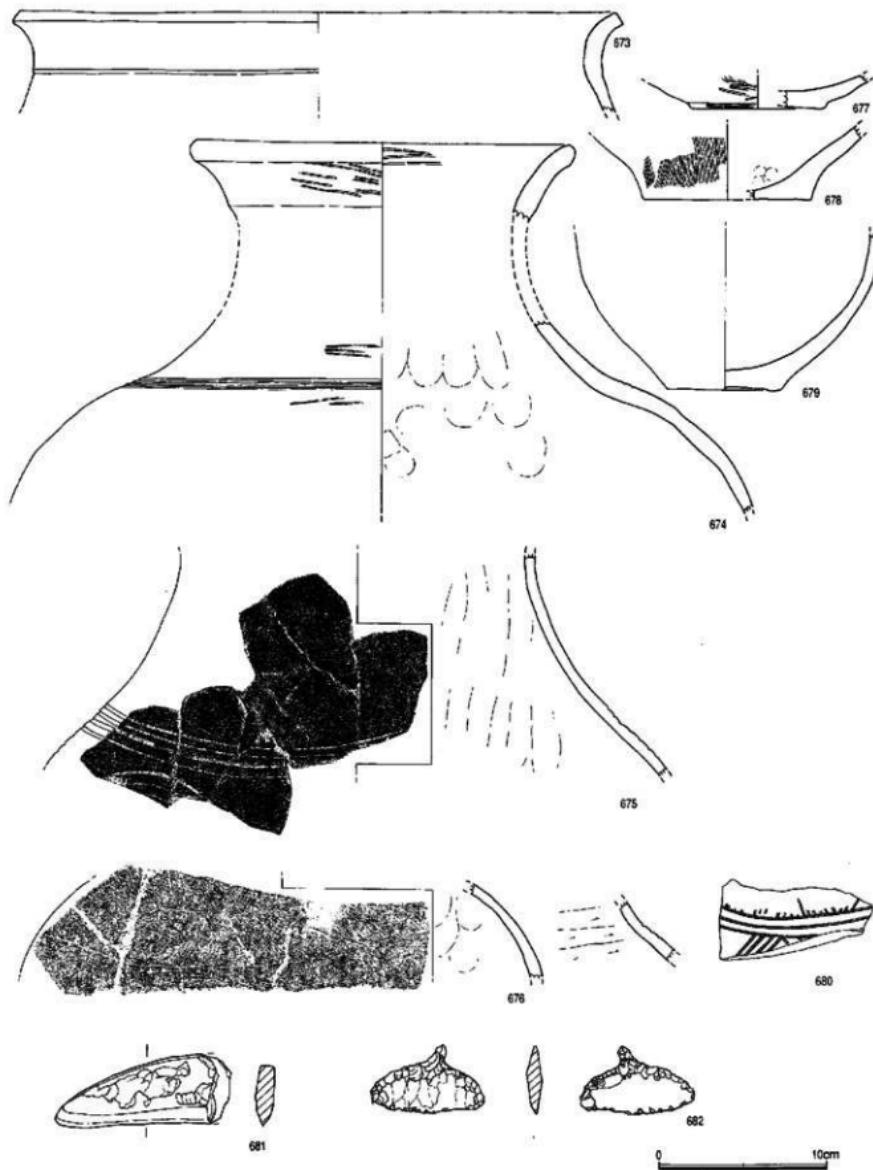
#### S U 1 0 6 (第80図)

B区西端で検出しSU105と対になる。平面は径2.2mの円形を呈し、深さは115cmを測る。SU105・106は掘削深が周囲の貯蔵穴と比べ突出して深い一群である。本来の壁面はオーバーハングしている。検出面ではほぼ全体に崩落が広がっている。遺物はコンテナ3箱で壺・壺、黒曜石剥片が出土している。前期後半に位置付けられる。

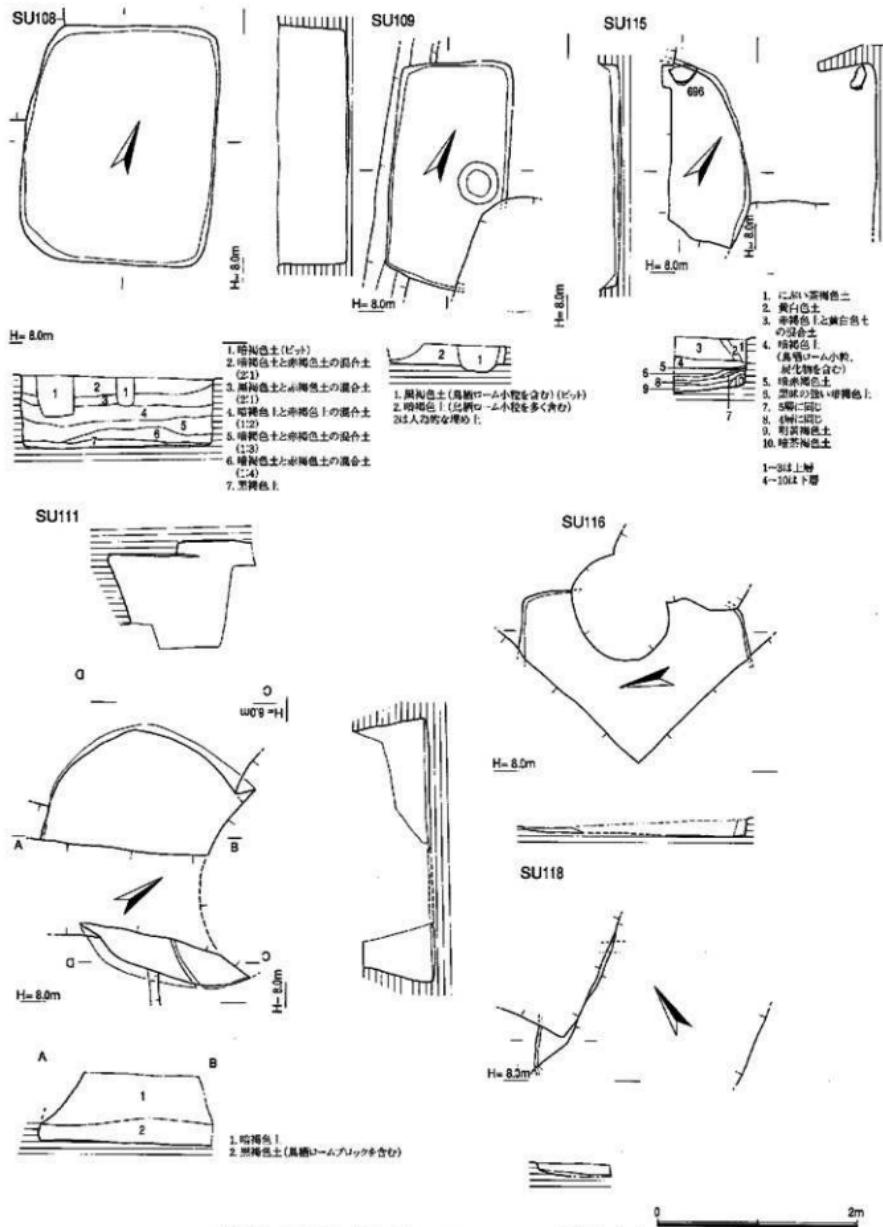
**出土遺物 (第84・85図)** 668～672は壺である。668は9割残存している。口縁部下端に刻みを行い、胴部外面・口縁部内面に刷毛を行う。669は胴部外面をなでる。670は外面板なでを行い、外面肩曲部に小口痕が残る。671は外面に小さな突帯を貼り付け刻みを施す。672は底部で外面はなでである。673～680は壺である。673は口縁端部をコ字状に整形し、肩曲部には沈線が巡る。674は口縁部下の段はほとんど痕跡的である。剥落が著しいが肩部に沈線が巡る。675は肩部に横線と重弧文を刻む。676は磨き状の浅い差し向かいの有軸羽状文を施す。677は底部側面には磨きが残り、胴部には磨きの下に刷毛目状の痕跡が残る。678は外面に細刷毛を行う。679は外面が剥落するが内面には磨きが残る。680は彩文の小壺である。ヘラ描きで3条の横線と山形文を刻む。赤色顔料はヘラ描きの窓み内に充填され、横線の上に櫛齒状に施文される。681は頁岩製石鎌である。682は石匙である。

#### S U 1 0 8 (第86図)

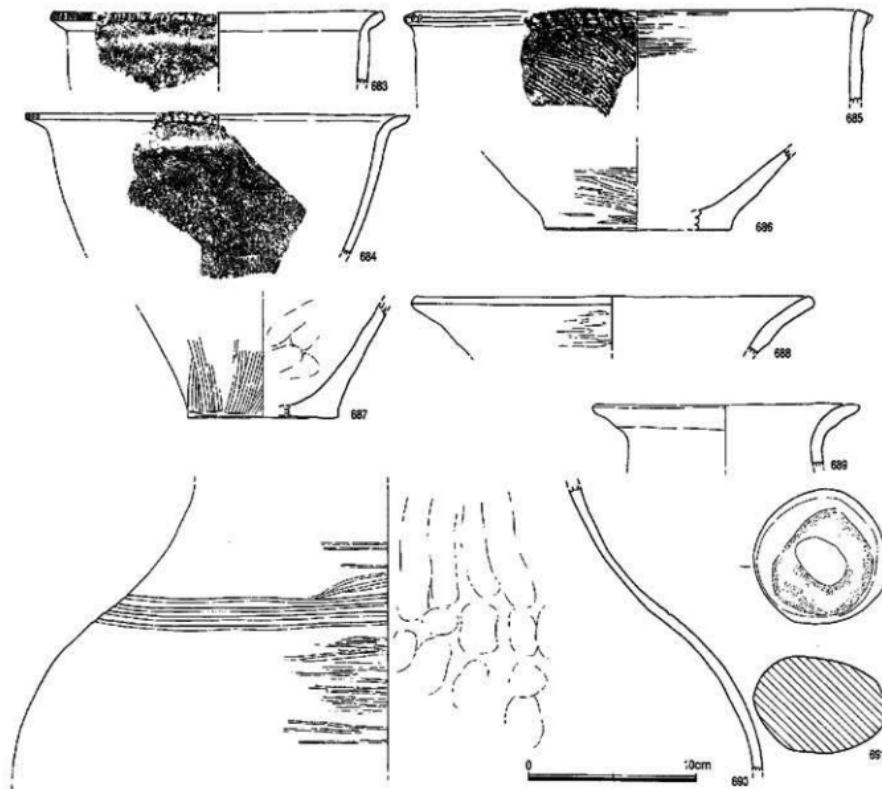
B区西端で検出しSU109を切り形状の類似からこれと対になると考えられる。平面は隅丸長方形を呈し長軸2.4m短軸1.75m深さは70cmを測る。壁面は直立し床面は平坦となる。埋土全体に炭化米が含まれており、一部は帶状に広がっている。遺物は少量で壺・壺、黒曜石剥片が出土している。前期



第85図 SU106出土遺物実測図 2 (1/3)



第86図 SU108・109・111・115・116・118実測図 (1/50)



第87図 SU108・109・111出土遺物実測図 (1/3)

中頃～後半に位置付けられよう。

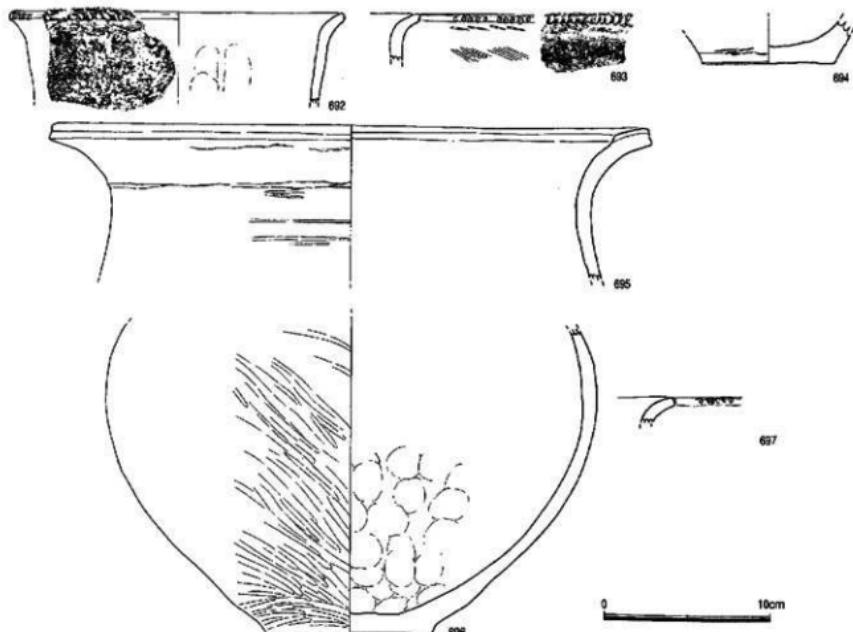
**出土遺物 (第87図 683～686)** 683・684は如意形LJ縁の甕である。外面は板なでを行い屈曲部に小口痕が残る。刻みは口縁端部全面に行われる。685は突帯文系の甕で外面に条痕を施す。686は壺底部で外面に横方向の磨きを行う。

#### S U 1 0 9 (第86図)

B区西端で検出しSU108に切られこれと対になる。平面は隅丸長方形を呈し長軸2.2m短軸1.15m深さは20cmを測る。壁面は直立し床面は平坦となる。遺物は少量で小破片と黒曜石剥片が出土している。前期後半であろうか。

**出土遺物 (第87図 687・688)** 687は甕の底部である。外面刷毛を行い、最下位に小口痕を残す。688は壺口縁部である。外面をわずかに肥厚させるが、屈曲部の段はほとんど痕跡的である。

#### S U 1 1 1 (第86図)



第88図 SU115・118出土遺物実測図 (1/3)

B区中央で検出する。平面は径2.5m程度の円形を呈し、深さは90cmを測る。東側床面は15cmほど深くなっている。壁面はオーバーハンプ正在进行している。埋土は人為的な埋め上で遺物の出土量は少ない。土器小破片と石製品が出土している。

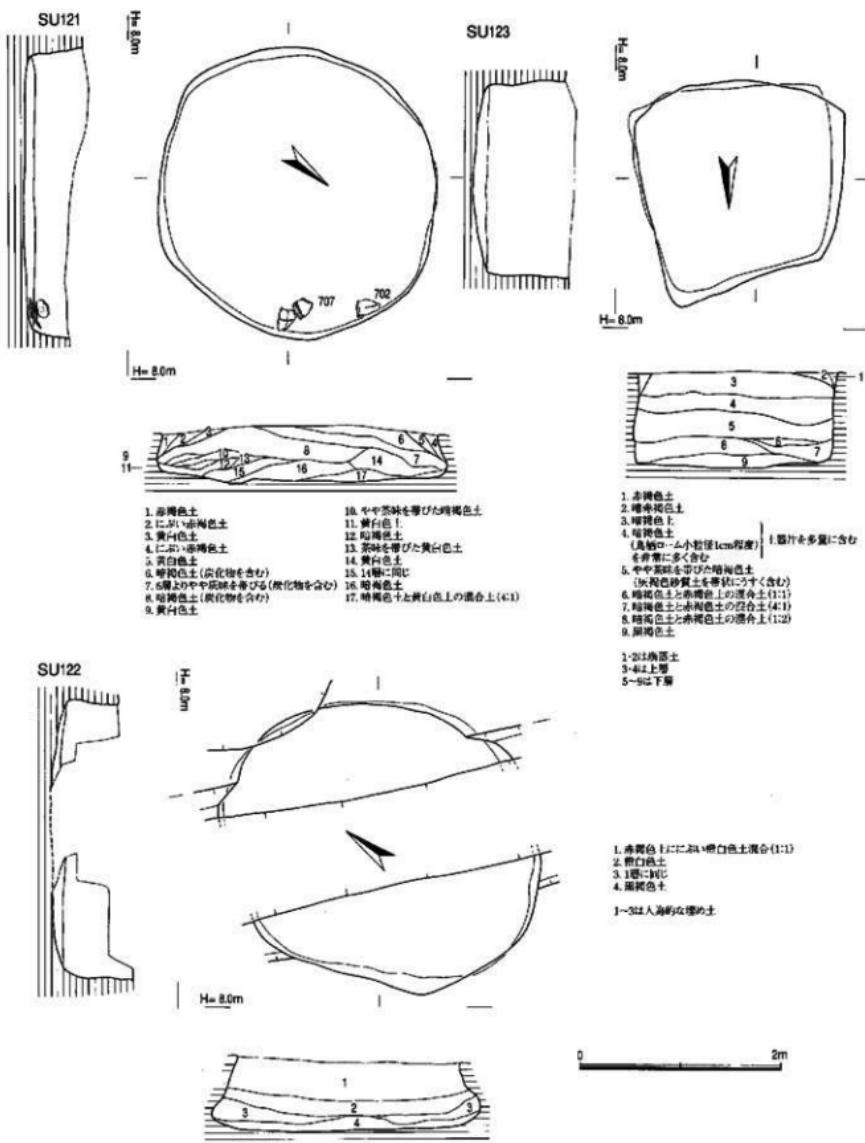
**出土遺物 (第87図 689~691)** 689は小壺である。明瞭な外面の肥厚は見られず、段も痕跡的である。690は壺胴部である。肩部に4条の沈線が巡る。691は玄武岩製の磨き石である。扁球形を呈し一面に磨き面が観察できる。

#### S U 1 1 5 (第86図)

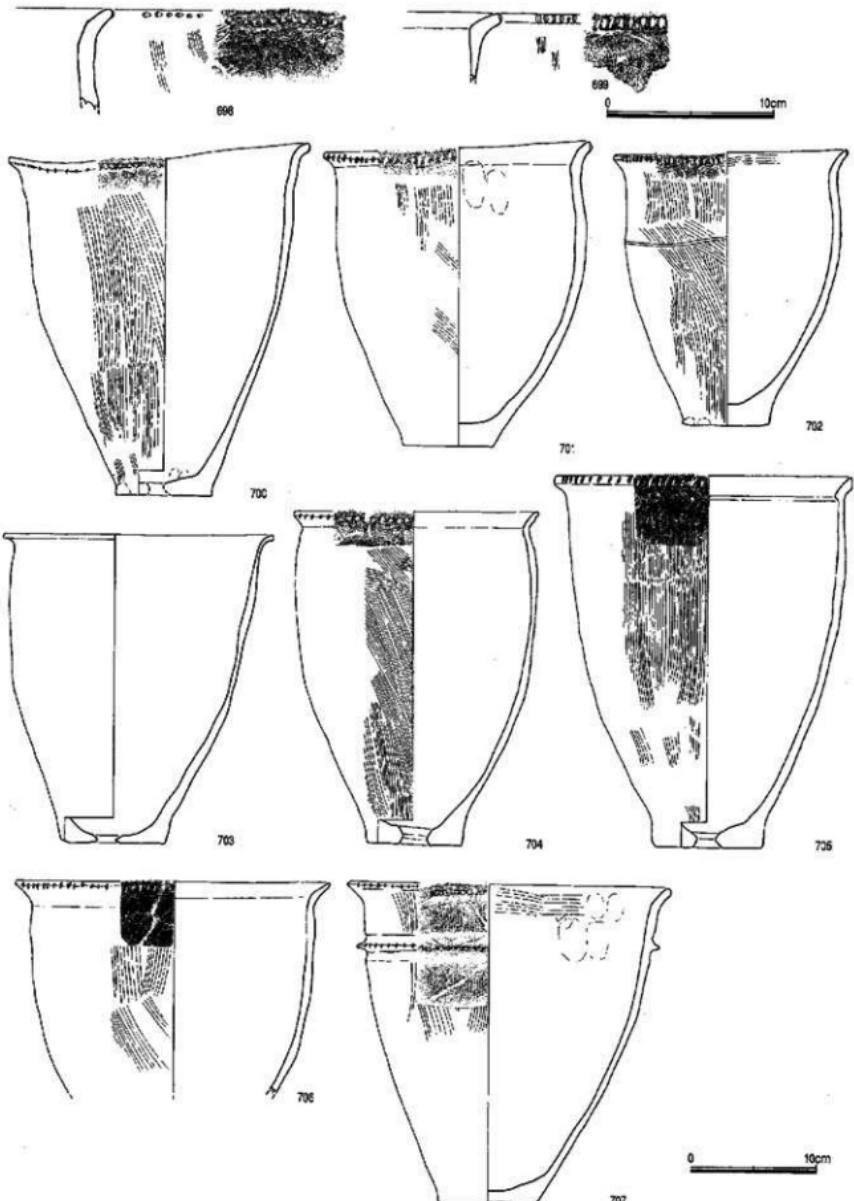
B区中央で検出する。搅乱で大半が欠失し規模は不明であるが平面は円形を呈すると考えられ、深さは55cmを測る。本来の壁面はオーバーハンプ正在进行している。土層観察から4層上面で再度床面として使用したと考えられる。北壁際で壺の下半部が出土する。壺・壺が出土している。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第88図 692~696)** 692・693は壺である。692は口縁部下端に刻みを行う。外面調整は剥落のため不明。693は刻みは全面に行う。外面屈曲部に小口部分での刺突痕が残る。その下は横なでと刷毛目を行う。694~696は壺である。694は底部で最下部にはたたきが残りそのうえから縱方向に粗い板なでを行う。695は口縁部上面を肥厚させ、外面は痕跡的に段をつける。696は胴部である。外面は底部付近が横方向、その他は斜めのヘラ磨きを行う。

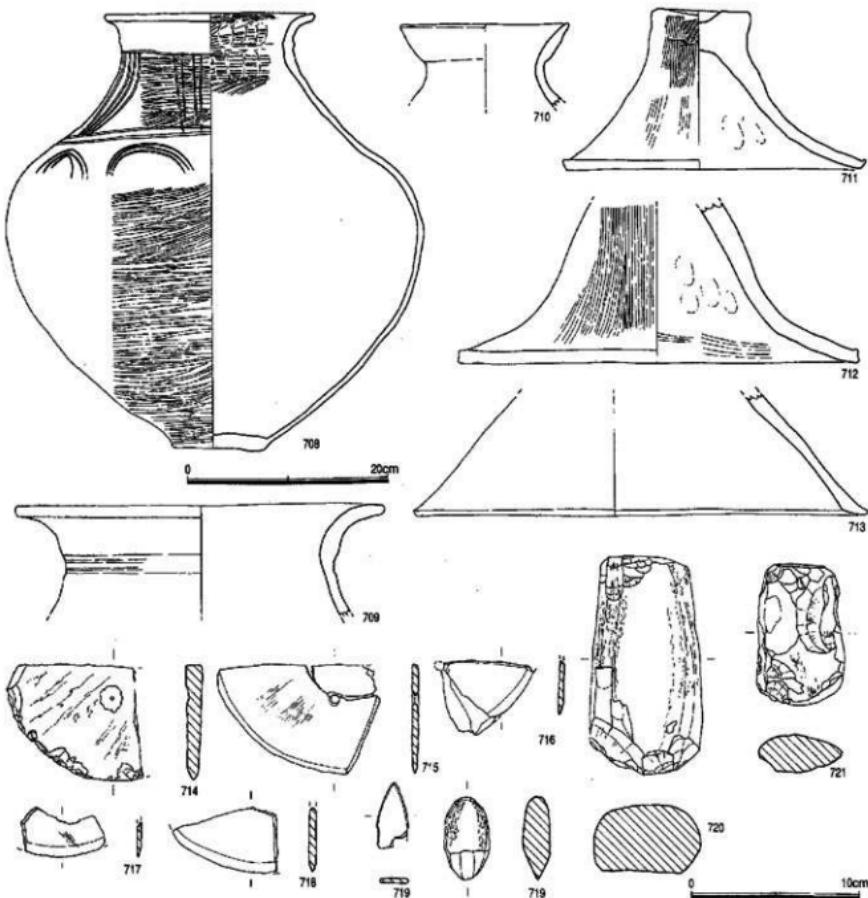
#### S U 1 1 6 (第86図)



第89図 SU121・122・123実測図 (1/50)



第90図 SU121出土遺物実測図1 (700~707は1/4、その他は1/3)



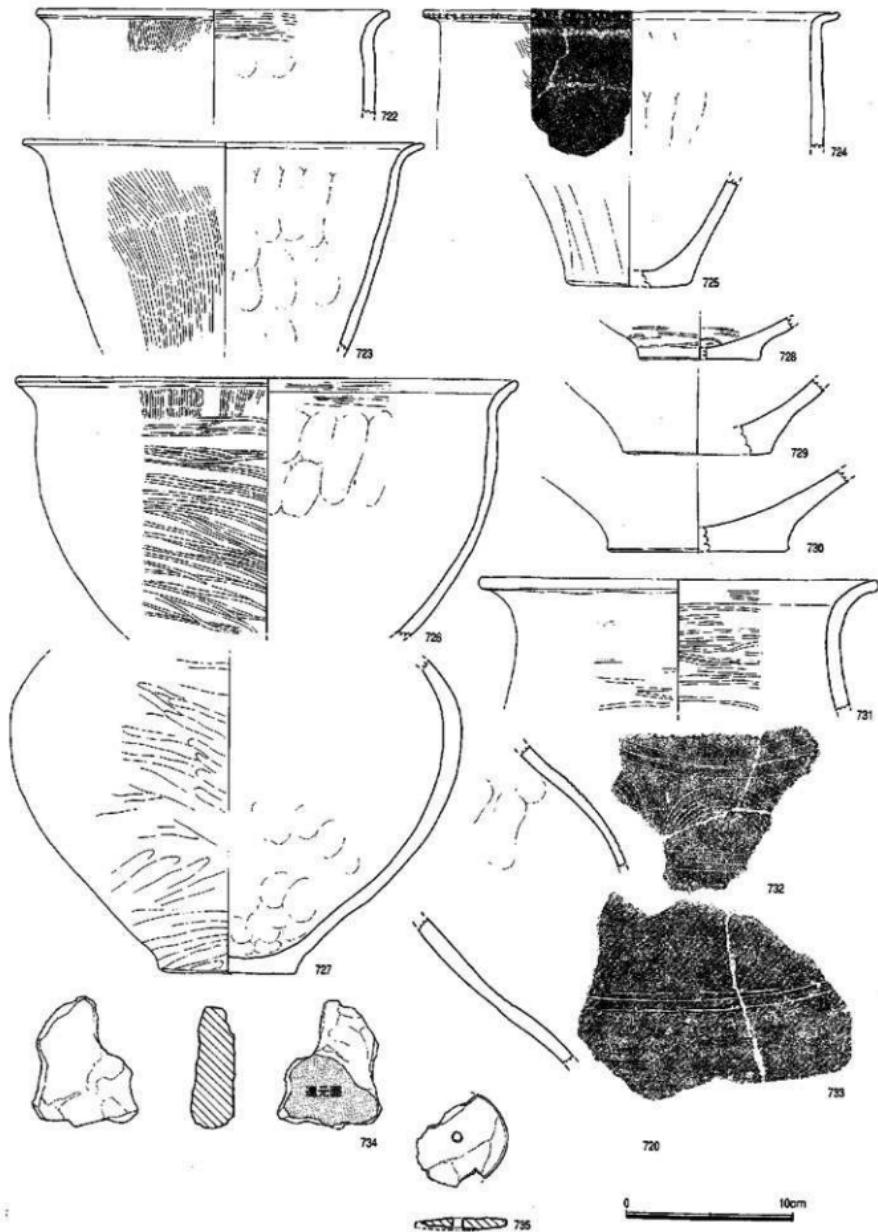
第91図 SU121出土遺物実測図2 (708は1/5、その他は1/3)

B区中央で検出し西側を擾乱で欠失する。平面は(長)方形を呈すると考えられ一辺2.2m、深さは20cmを測る。壁面は直立し床面は平坦である。埋土は暗褐色土と赤褐色土の2:1の混合土である。遺物はほとんど出土していない。

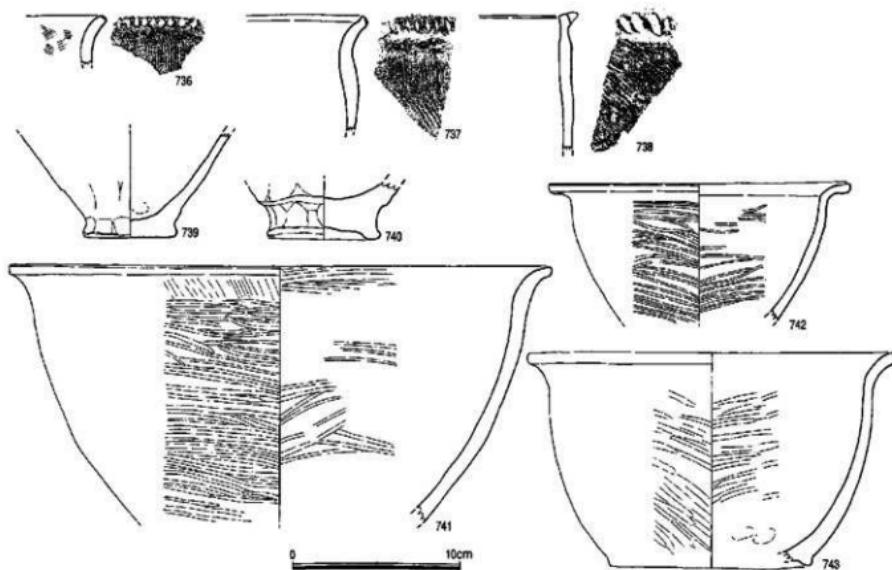
#### S U 1 1 8 (第86図)

B区中央で検出しする。周囲を擾乱で失いほとんど痕跡的にしか遺存していない。平面は(長)方形を呈すると考えられ深さは10cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は小破片のみである

**出土遺物 (第88図 697)** 瓶の口縁部小破片である。口縁部の屈曲は弱く刻みは端部全面に行われている。



第92図 SUI122出土遺物実測図 (1/3)

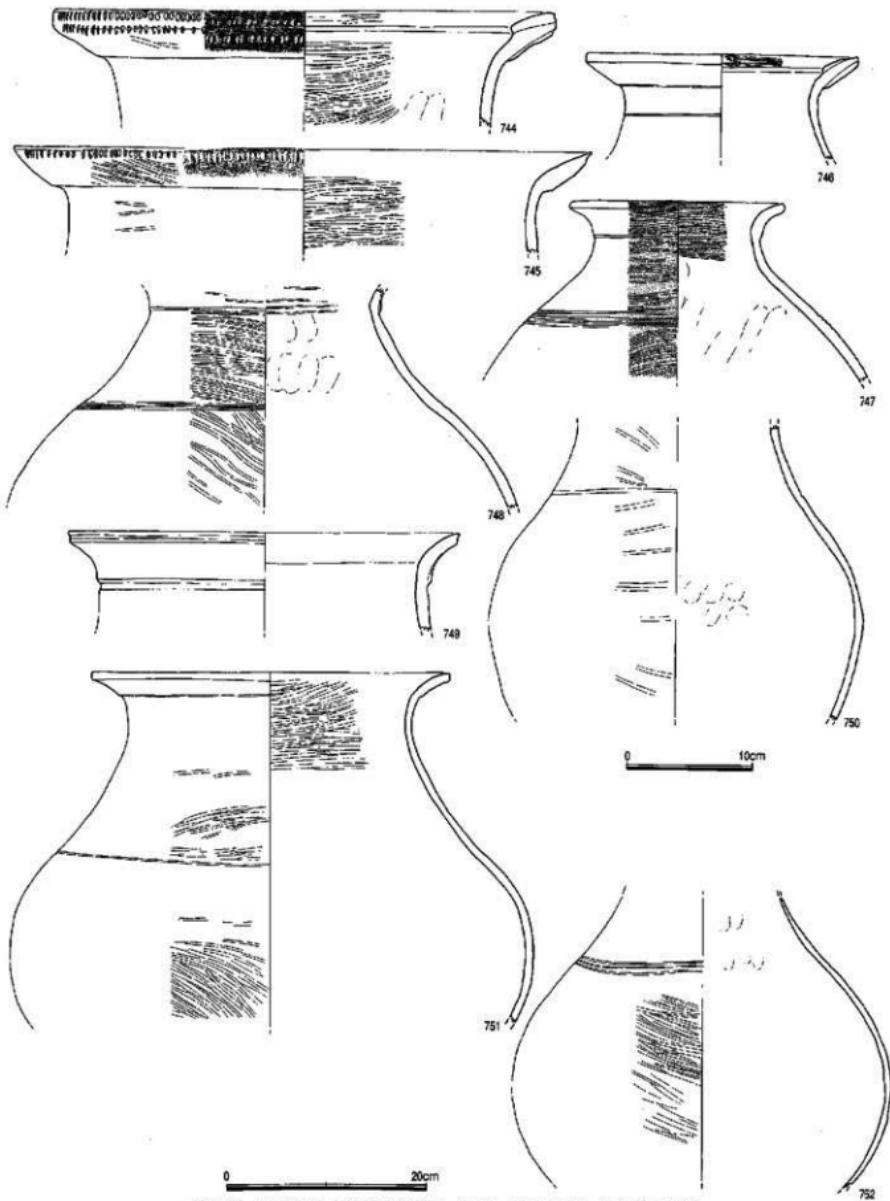


第93図 SU123出土遺物実測図1 (1/3)

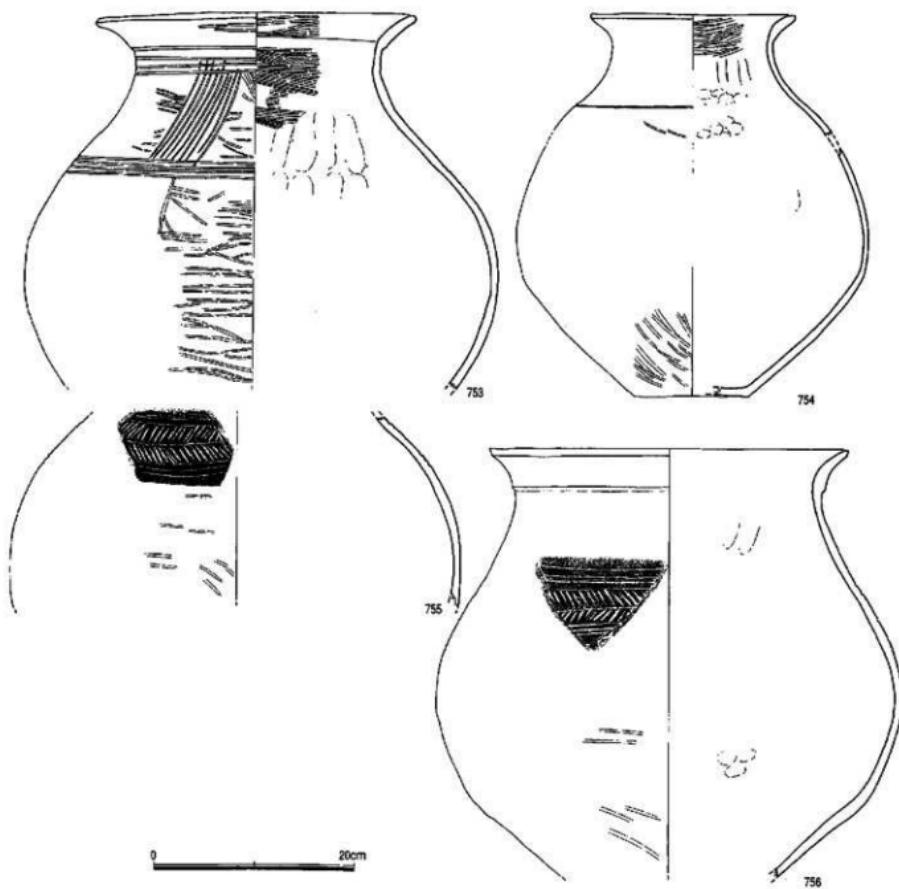
### S U 1 2 1 (第89図)

B区西端で検出しSUI22とわずかに切り合うが先後関係は不明である。この群は他に比べ平面規模が一回り大きくなっている。平面は径2.9mの円形を呈し、深さは55cmを測る。本来の壁面はオーバーハングしている。遺物はコンテナ4箱で甕・壺・高坏、石製品、黒曜石剥片が出土している。他の貯蔵穴と比べ遺存状態の良い甕が多く出土している。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第90・91図)** 698-707は甕である。全体に胴部の張りが強くなり、701・702・704は頸部がしまり気味になる。口縁部は如意形を呈し703以外は端面に刻み目を有する。外面調整も703が全面になでを行なうほかは刷毛調整を行なっている。また702・707はLJ縁部内面にも横刷毛を行う。700・703・704・705は焼成後に底部外側からの穿孔を行う。701はほぼ完形で器壁が厚く他の甕に比べ非常に重量感がある。702は胴部最大径部分に沈線を巡らせる。705は口縁部が厚手でわずかに内面に張り出している。707は折衷系である。外面刷毛目を施した後断面三角形の突帯を貼り付けこれにも刻みを行う。708-710は壺である。708は口縁部が外方に強く開き屈曲部外側には沈線を有する。肩部にも沈線を巡らせ、沈線間に4条一組の綫8組を刻む。また肩部沈線下には重張文を描く。調整は外面及び頸部内面まではヘラ磨き、胴部内面はなでである。709は口縁部外側に痕跡的な段を残し、この部分に2条の沈線を巡らせる。710は小型品で屈曲部外側に段を残す。711・712は蓋である。外面に刷毛を行い、712は裾部内面も横刷毛を行う。いずれも裾部内面に煤が付着する。713は高坏の脚であろう。胎上は比較的精良である。714は安山岩製の石包丁未製品である。穿孔中の痕跡が残る。715-718は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスの石包丁破損品である。719は安山岩質凝灰岩ホルンフェ



第94図 SUI123出土遺物実測図2 (751・752は1/5、その他は1/4)



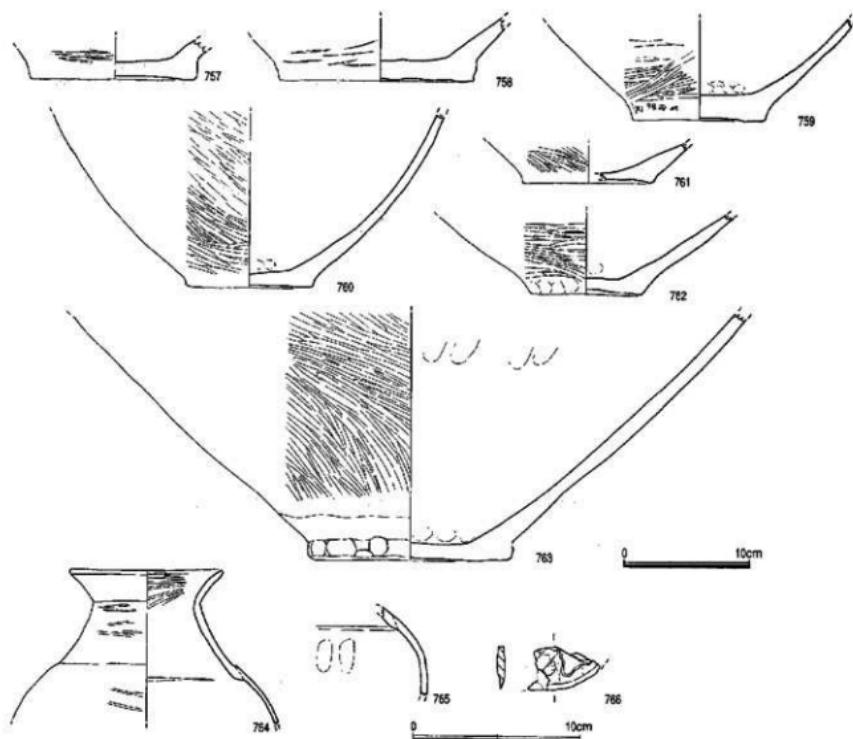
第95図 SU123出土遺物実測図3. (1/5)

ルスの石包丁を転用した石鎌であろうか。719は投弾を転用し研磨により刀をつけてノミ状の工具としている。720・721は右斧転用の敲打器である。

#### S U 1 2 2 (第89図)

B区中央で検出しSU121と対になる。平面は径3.0mの円形を呈し、深さは80cmを測る。壁面はオーバーハングし、床面は中央に向かって緩く傾斜する。1層～3層は人為的な埋め土でほとんど遺物は含まれていない。甕・壺、黒曜石剥片、堅体1点が出土している。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物（第92図）** 722～725は甕である。722・723は刻みがなく外面刷毛目を行う。722は口縁部内面にも刷毛を行う。724は口縁部をほぼ直角に折り曲げる。端部下端に刻みを有する。725は外面板などでを行う底部である。726は鉢である。外面は磨きを施すが屈曲部外面及び口縁部内面には刷毛



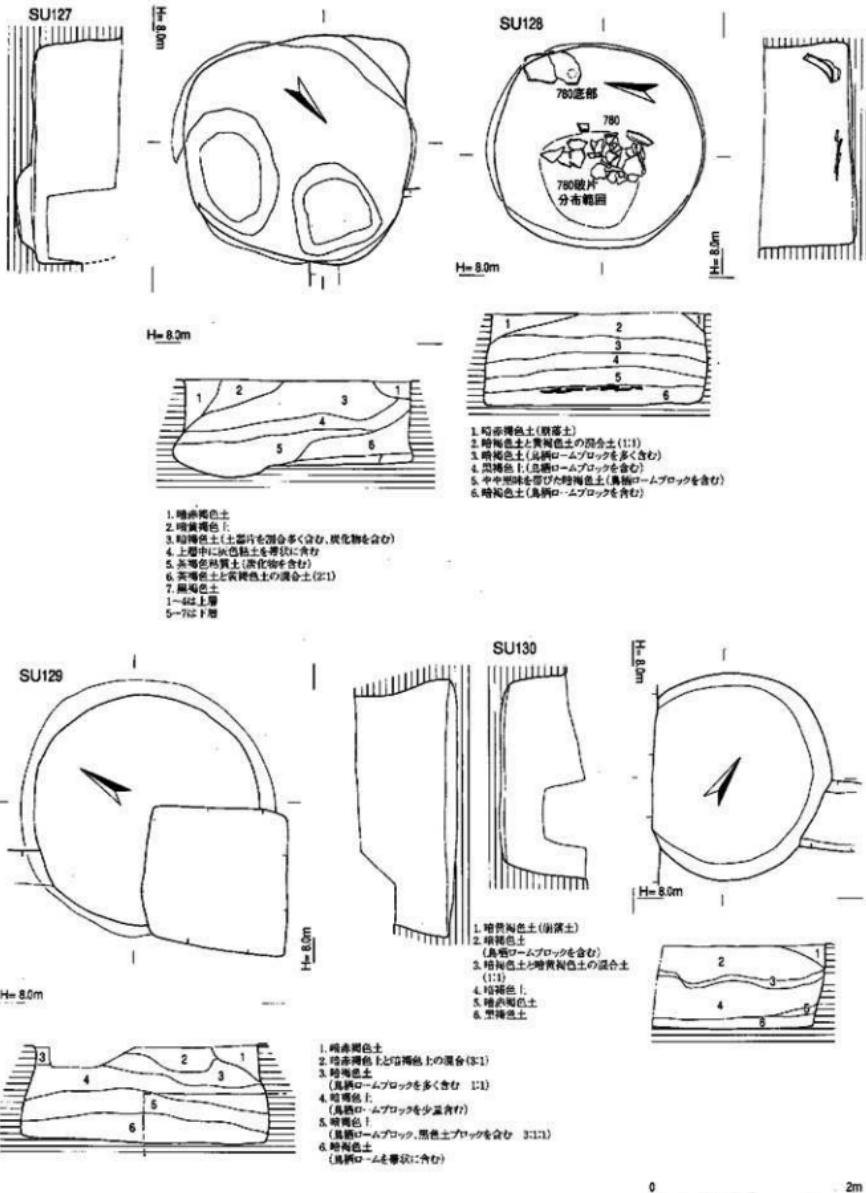
第96図 SU123出土遺物実測図4 (757~763は1/4、その他は1/3)

が残る。727~733は壺である。727は外面に磨きをおこない。2次的な焼成を受けており内外面ともに器面が剥落している。728は小型品である。内外面磨きを行う。729・730は内外面なでである。731には口縁部外面の肥厚は見られないが、痕跡的に段を作り出している。732・734は肩部の破片である。732は貝殻施文による重弧文とヘラ描きの横線を施す。733は3条の沈線を描く。734は現状で厚さ2.5cmを測る堅壁である。内面には還元面が残り、胎土にはスサを混入している。735は石製紡錘車である。剥落破損している。

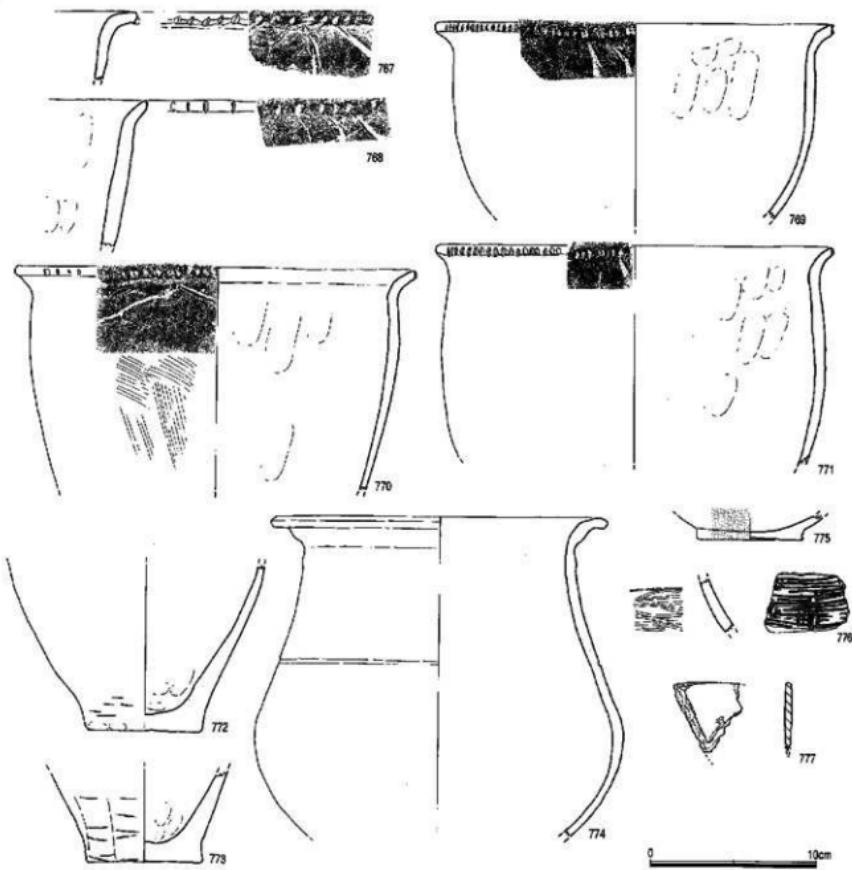
#### S U 1 2 3 (第89図)

B区西側で検出する。平面は一辺2mの正方形を呈し、深さは100cmを測る。壁は直立しているが本来壁面はオーバーハンプ正在进行する。埋土は下層が人為的な埋め上で遺物は少量で、大半が上層出土である。甕・壺・鉢が出でており、なかでも壺が主体を占める。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第93~96図)** 736・737は如意形口縁を呈する壺である。外面に刷毛を行い、端部全面に刻みを行う。738~740は尖唇文系の壺である。底部外面にはもみ痕が残る。741~743は鉢である。

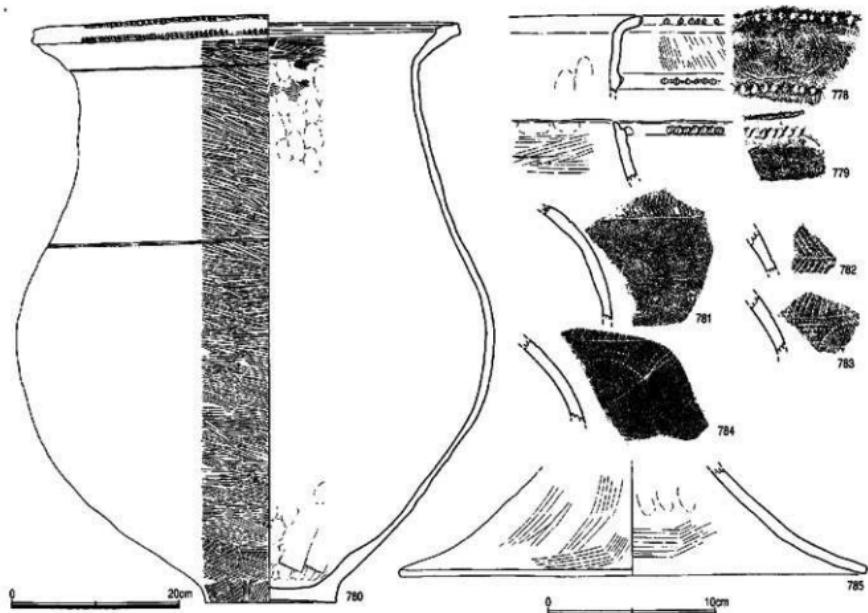


第97図 SU127・128・129・130実測図 (1/50)



第98図 SUI127出土遺物実測図 (1/3)

内外面横方向の磨きを行うが、741は屈曲部外面に縦刷毛が残っている。744～756は完形～上半部分の大・中型壺である。744～746は口縁部上下面に粘土帯を貼り付け肥厚させる。745では上面部分が剥落している。端部には刻みを有し屈曲部には段をつける。746も上下に粘土帯を貼り付ける。頸部に沈線を1条刻む。747は外面～口縁部内面に黒塗りを施す。屈曲部に沈線を施し段を省略する。754は口縁屈曲部分の段を完全に省略するが他は部位が残存するものについては屈曲部分には段が残っている。747・748・750・751・752・754は肩部に1条もしくは複線のヘラ描き沈線を刻む。753は頸部と肩部の沈線間に7～10本1単位の縦線6組を刻む。755・756は肩部沈線間に有輪羽状文を刻む。750のみ2次的な熟痕跡が残る。757～763は底部～下半部分の破片である。758は外面たたきが残っている



第99図 SU128出土遺物実測図 (780は1/6、その他は1/3)

るが他は外面磨き内面なで行う。757・760は外底面にも磨きを行う。また758には外底面にもみ痕を残す。764・765は小型壺である。肩部内面に接合の段が残る。764は外面屈曲部分及び肩部に痕跡的な段がつく。766は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石包丁破損品である。

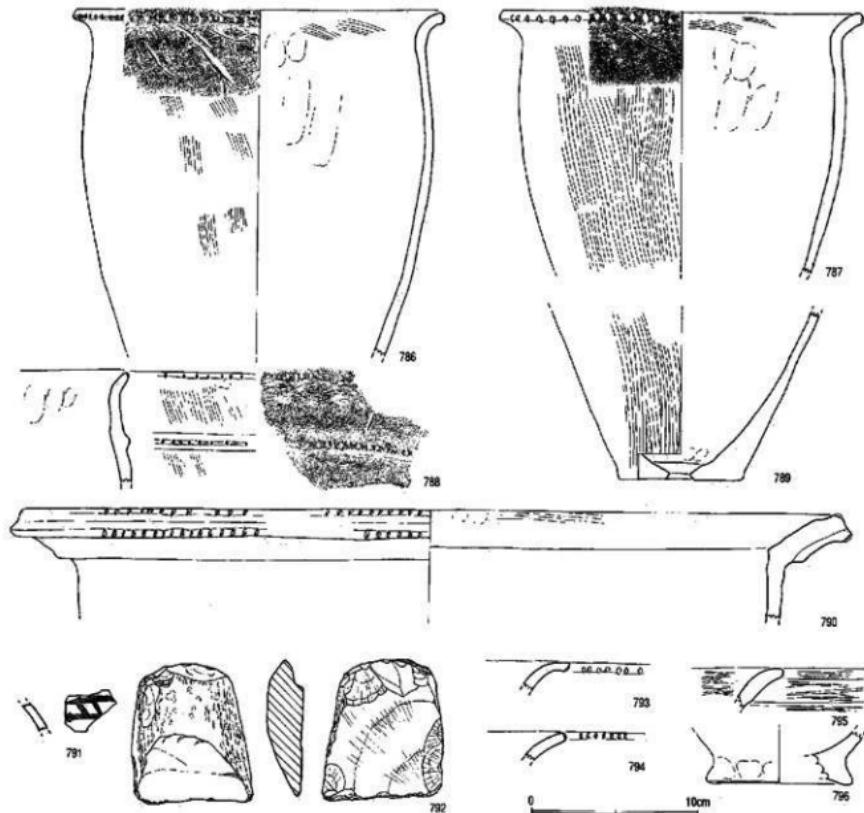
#### S U 1 2 7 (第97図)

B区西側で検出しSU128と対になる。平面は径2.2mの円形を呈し、深さは80cmを測る。壁は現状では直立しているが、本来壁面はオーバーハングしている。床面東側には深さ15cm程の窪みが2箇所にある。壺・壺・鉢が出土する。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第98図)** 767~773は壺である。767~771は上半部分破片である。刻みは767が下端部分に行われているほかは口縁端部全面に行われている。外面調整は770が刷毛目による以外はなでにより整形されている。772は外面板なで行う。773は外面にたたき痕跡が残る。774は2次的比熱を受けた壺である。口縁部外面の段ではなく、肩部に1条の沈線が刻まれる。775は黒塗りの小壺底部である。776は小型壺である。外面連続する横線と縱線を組み合わせて一部は格子状となるものである。縱線は現状では5本1単位となっている。777は安山岩質凝灰岩製の石包丁破損品である。

#### S U 1 2 8 (第97図)

B区西側で検出しSU127と対になる。平面は径2.0mの円形を呈し、深さは100cmを測る。壁は現状では直立しているが、本来壁面はオーバーハングしている。6層上面に大型の壺1個体が破碎され、中央から西側にかけて意図的に敷かれたような状態で出土した。復元すると壺は完形品となる。他に



第100図 SU129・130出土遺物実測図 (1/3)

は甕・壺・鉢の小破片が出土する。前期後半に位置付けられる。

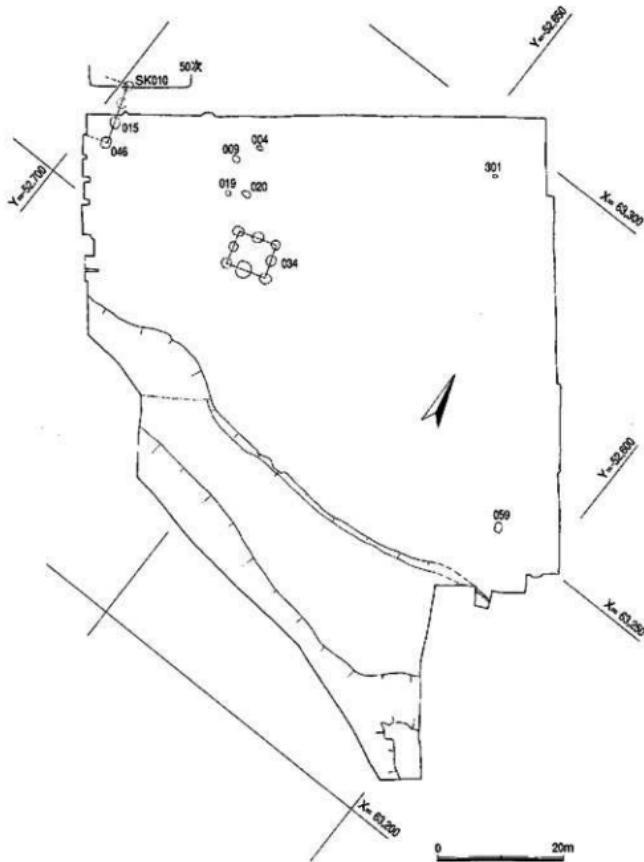
**出土遺物 (第99図)** 778は折衷系の甕である。口縁端部及び突帯部分に刻みを行う。779は突帯文系の甕である。780は6層上面出土の大型壺である。ほぼ完形に復元できる。口縁部の上下両面に粘土帯を貼り付け、上下の両端部に刻みを行う。外面調整は口縁部に横刷毛が残り以下頸部から胴部中位までは横位から斜位の磨きを行う。肩部の横先是強い磨きによって刻まれる。中位以下は磨き以前の横刷毛が残り下半1/4には磨きは行われない。また底部付近は縱刷毛である。内面は口縁部は横刷毛、頸部は縱方向の指なで、胴部は板状工具によるなでを行う。781～784は文様を有する壺の胴部である。781はヘラ状工具による無軸羽状文。782はヘラ引き輪のうちに貝殻施文による羽状文を施す。783はヘラ引きによる横線を刻み、後に貝殻施文により横線以上には斜線、横線以下には重弧文を施し空白部分を横線で充填している。784も783と同様であるが重弧文間の横線が省略される。785は蓋である。外面刷毛を行い、内面は中位に横刷毛が残る。

### S U 1 2 9 (第97図)

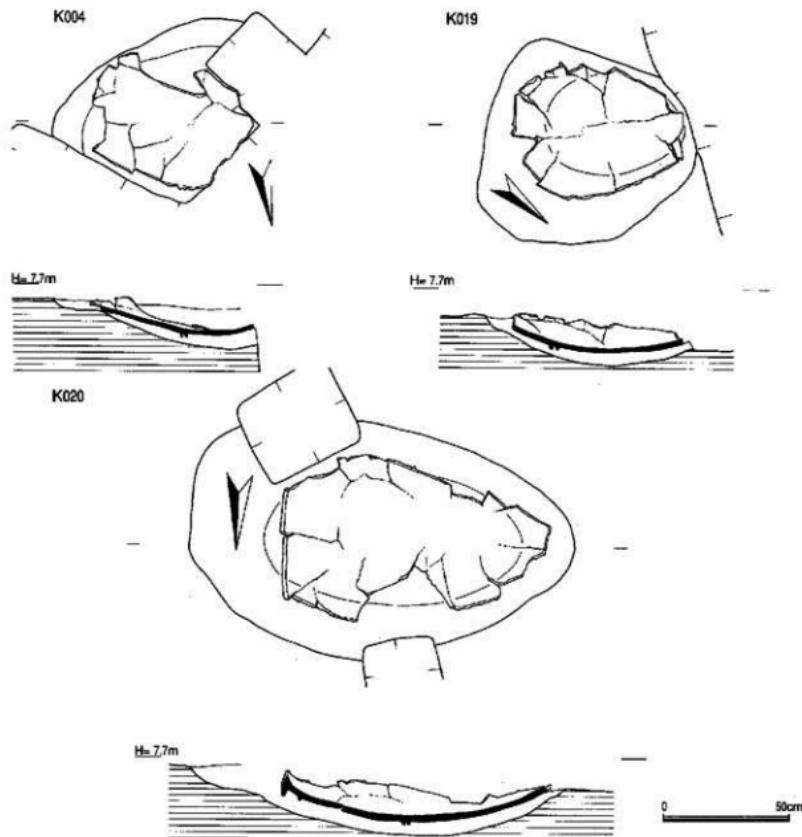
B区西側で検出する。平面は径2.2mの円形を呈し、深さは100cmを測る。本来壁面はオーバーハングしている。埋土にはロームの混合が多く見られ、人為的な埋め戻しも考えられる。そのため遺存状況に比べ遺物量は少なく甕・壺の小破片が出土するのみである。前期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第100図 786~792)** 786・787は如意形口縁の甕上半部である。刻みは口縁下端部に施す。外面は細かい刷毛目による。788は折衷系の甕である。789は甕の底部である。焼成後に底面外部からの穿孔を行う。790は大型の壺口縁部である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け屈曲部は段をつける。791は小壺の胴部である。赤色顔料による施文が行われるが遺存状態が悪く意匠は不明瞭である。有輪の羽状文か。792は石斧木製品である。

### S U 1 3 0 (第97図)



第101図 甕棺基・木棺基・ピット及び関連造構配置図 (1/800)



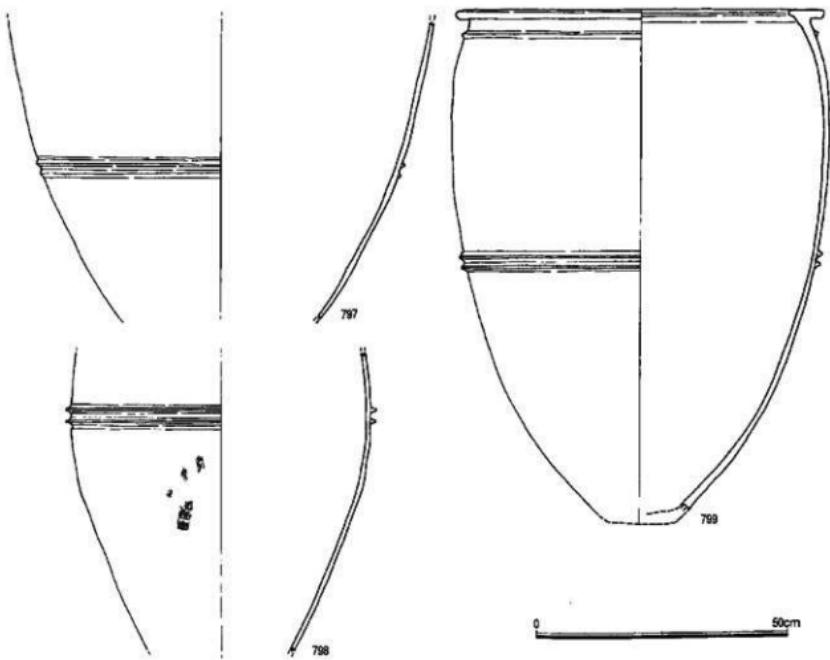
第102図 K004・019・020実測図 (1/20)

B区西側で検出する。SUI23・129・130は形状・規模から積極的に対をなす貯蔵穴が認められない。1/3が擾乱されているが平面は径2.1mの円形を呈し、深さは80cmを測る。壁は現状では直立しているが、本来壁面はオーバーハンプ正在进行している。遺物は少量で甕・壺、黒曜石剝片が出土する。前期後半であろう。

**出土遺物 (第100図 793-796)** 793・794は如意形口縁の甕である。795は壺の口縁部破片である。外面の段は磨きによりつけられており痕跡的になる。796は突帯文系の甕底部である。

#### 10. 壺棺墓 (K)

壺棺墓はA区の中央部で3基検出しているがいずれも削平が著しく下窓の一部が残存するのみである。北側に隣接する21次・50次調査区では28基の壺棺および8基の壺棺抜き取り土坑とともに墓域を



第103図 K004・019・020出土遺物実測図 (1/10)

区画する溝が検出されている。これらは中期中頃～後半に築造された埴丘墓と想定されている。本調査区においては貯蔵穴・竪穴住居の遺存状態からみて21次調査地点と同程度の削平が考えられるが、甕棺の削平程度は埴丘墓の中央部に位置していたとされる甕棺の削平程度に似ており、区画溝は確認できていないが南側にも盛り土を有した埋葬遺構群が展開していた可能性が考えられる。

#### K 0 0 4 (第102図)

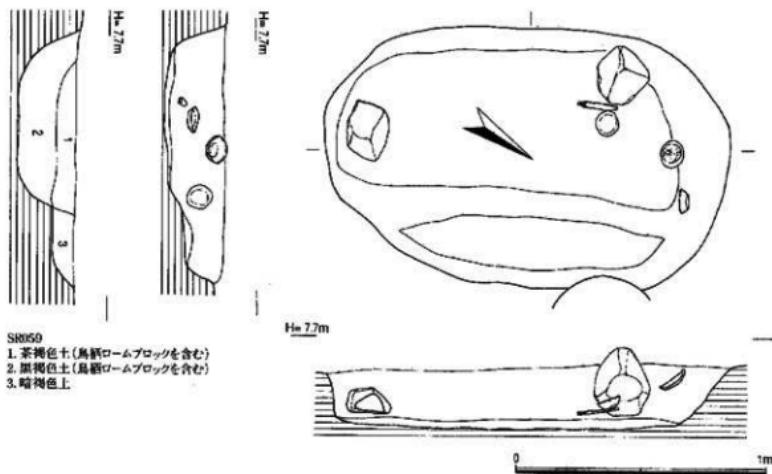
3基のうち最も北側で検出する。主軸をN-77°-Wとする。削平で墓坑の深さ15cmほどしか残っておらず、甕の胴部の一部が残存するのみである。中期中頃であろうか。

**出土遺物 (第103図 797)** 口縁部および底部が欠失し、胴部下半部分のみ残存する。胴部下位に断面三角形の突帯を2条貼り付ける。調整は内外面ともに丁寧なまでに行う。胎土には径3～5mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。

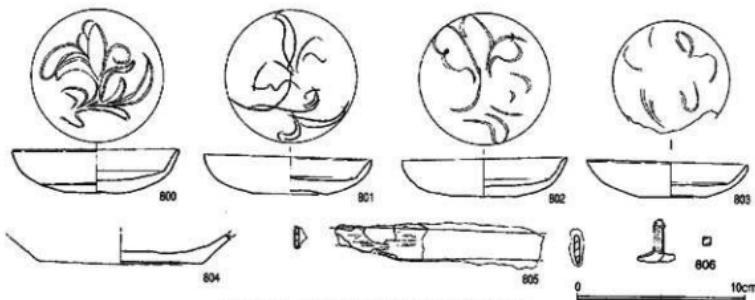
#### K 0 1 9 (第102図)

K004の南側で検出する。主軸をN-40°-Wとする。削平で墓坑の深さ20cmほどしか残っておらず、甕の胴部の一部が残存するのみである。中期後半のものであろうか。

**出土遺物 (第103図 798)** 口縁部および底部が欠失し、胴部中位から下半部分のみ残存する。胴部中位の最大径の位置に断面「コ」字形の突帯を2条貼り付ける。調整は内外面ともに丁寧なまでを



第104図 SR059実測図 (1/20)



第105図 SR059出土遺物実測図 (1/3)

行うが突帯以下に一部縦刷毛が残っている。胎土には径1~3mmの砂粒を含み焼成は良好である。

#### K 0 2 0 (第102図)

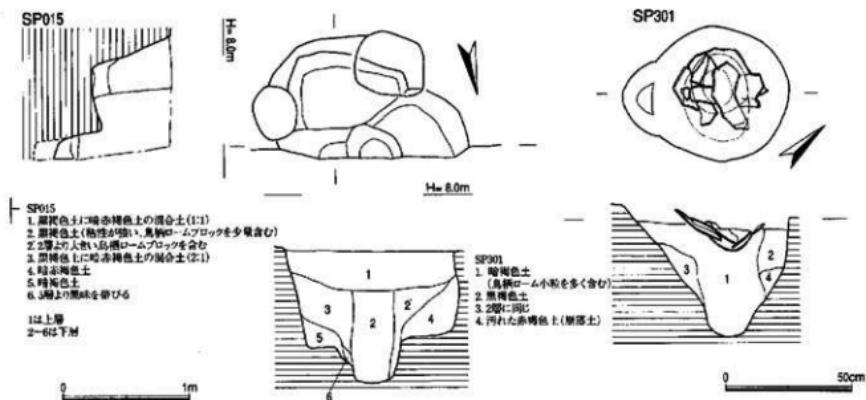
K019の東側で検出する。主軸をN-82°-Eとする。削平で床面に張り付いている口縁部から胴部下半までが残存している。中期後半に位置付けられる。

**出土遺物 (第103図 799)** 底部を欠失している。口縁部は鋸状を呈し胴部最大径が中位より上にくる。突帯は口縁下に1条の三角形突帯、胴部中位に2条のコ字突帯を貼り付ける。調整は内外面ともに丁寧なまでに行う。胎土には径3~5mmの砂粒を含み焼成は良好である。

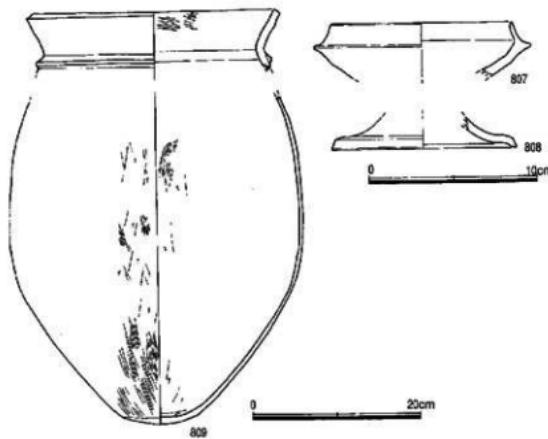
### 11. 木棺墓 (SR)

#### S R 0 5 9 (第104図)

C区東側で検出する。土層断面などでは木棺部分は確認できなかったが釘が出土しており形態的に



第106図 SP015・301実測図 (1/40、1/20)



第107図 SP015・301出土物実測図 (807・808は1/3、809は1/6)

ある。また800・803は2次的に熱を受けている。804は土師器壊である。摩滅が著しい。805は小刀である。刃の部分には木質が付着している。806は鉄釘であろうか。先端部がT字状となり留め金具様となっている。

## 12. ピット (SP)

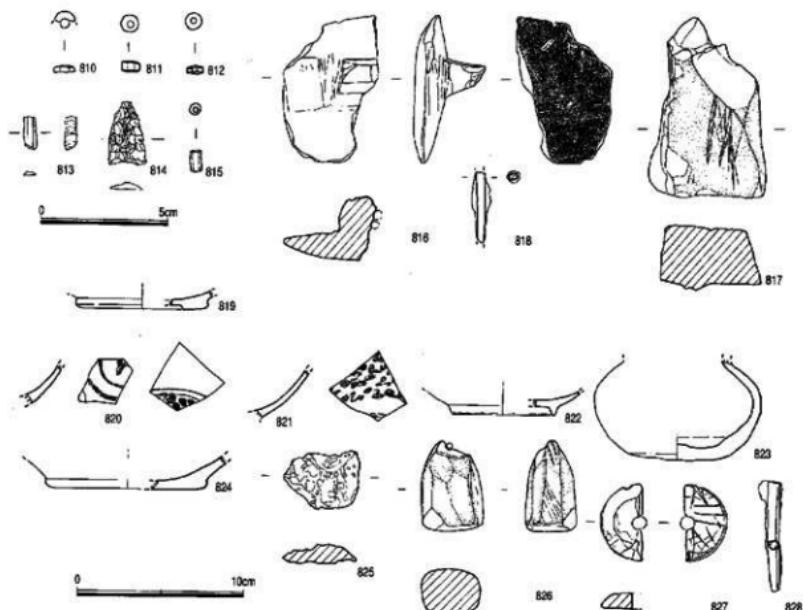
### SP015 (第105図)

A区西側で検出する。北側を搅乱で欠失し平面形態は不明瞭であるが、断面は南側から階段状に掘

も木棺墓と考えられる。掘り方は長軸1.6m、短軸1mを測る。東側に一段平坦面を有し、主体部分は下端で1.4m×0.55mを測る。南北両端に人頭大の自然礫が入っている。北側が頭位鑿と考えられ、完形の陶磁器皿3枚と鉄製小刀が出土している。12世紀の後半に位置付けられる。

### 出土遺物 (第105図)

800～803はいずれもⅦ類の白磁皿である。いずれも内底面に化文が彫りこまれる。また外底部のみ露胎となっている。800～802は完形で



第108図 その他の出土遺物実測図 (810~815は1/2、その他は1/3)

り下げられている。土層から柱痕跡が確認できおよそ径40cm程度である。SK046・50次調査SK10とともに大型の建物を構成するものと考えられるが、折り返して対応するピットが確認されておらず今回は建物としての報告は行っていない。不明瞭SK046から50次SK10までの長さは10m、SK046とSP015の柱間は3.6mである。また主軸方位はN-8°-WにとりSB034にほぼ同じである。小田編年のⅢ b期に対応する。

**出土遺物 (第107図 807・808)** いずれも須恵器である。807は壊身で蓋受けは内側するが比較的高い。808は高环の脚踏部分で端部を嘴状に折り曲げる。

**S P 3 0 1 (第106図)** A区東側で検出する。南側断面はややスロープを有しており、柱抜きとり時に広げたものと考えられる。上面から甕1個体が出土する。本来は柱抜き取り後に完形で投棄されたものと考えられる。

**出土遺物 (第107図 809)** 長胴の甕である。口縁部は「く」字に開曲し頸部に三角突帯を貼り付ける。底部はやや凸レンズ気味の丸底を呈する。胴部外面は縦刷毛のうち上部3/4にヘラ削りを行う。また内面はヘラ削りを行うが一部に縦刷毛が残る。

### 13. その他の遺物 (第108図)

810~819はピット出土遺物の一部である。810~812は滑石製小玉である。813は黒曜石製の細石刃

である。814は黒曜石製の石鎚ある。815は碧玉製の管玉である。816は滑石製品である。9cm四方の平坦面には細かい線が刻まれる。土器の当て具か。石鍋の転用品である。同じビットから白磁V類椀、瓦器椀が出土する。817は粘板岩製の磁石である。綾目で上面と側面を磁面とする。上面には刃部を研いでできた溝が刻まれている。818は鉄釘である。819は蛇の目高台を有する白磁碗で、底部は露胎となる。

820～828は旧河川内埋土出土遺物の一部である（第5図土層図参照）。820～825はB区出土である。820は肥前系の磁器碗である。821・822は明代の染付である。これらは河川内埋土の最上層から出土しており、河川の完全な埋没は少なくとも中世末～近世初頭以降になるものと考えられる。823は須恵器壺である。河川内埋土出土遺物の主体を占めるものは中世前半に位置付けられる遺物であるが図示を割愛した。824から827はC区河川内出土である。中世の遺物は特にC区で多く出土している。これはC区台地上で中世の遺構（主にビット）が多く検出されていると相関している。824は蛇の目趙州窯系青磁碗である。残存部分外面は露胎である。825は銀治津である。径5mm以下の気孔が多く見られる。826は釣鐘形の壺で上端の一部を欠失する。重量91.12gを測る。827は滑石製紡錘車である。828はC区水田土出土の鉄釘である。

#### 14. 小結

今回の調査では本来台地の高所にあたり遺構が集中していると考えられる対象地北側の大きな削平にもかかわらず弥生時代前期前半から中世前期にいたる遺構・遺物を検出することができた。ここでは遺構変遷の概略を述べるために変えたい。

##### 弥生時代前期前半～中期初頭（Ⅰ期）

貯蔵穴が形成される時期であるがこれ以外の遺構は検出できていない。隣接する21次・50次調査区を合わせると合計で67基の貯蔵穴が確認されている。分布は台地の中でも旧河川に近い南側にまとまる傾向があるが、21次調査区SK047などは比較的台地の高所側に寄っており、現状よりもさらに北側にも貯蔵穴群が広がっていく可能性がある。時期的には前期前半に掘削が開始され前期中頃～後半にかけて最盛期を迎え中期初頭には使用が終了するようである。平面形態は方形～長方形のものと円形のものに大きく分けることができる。（長）方形の掘り方を呈するものが比較的古い段階に多いとされているが本調査区の成果では時期と平面形態の相関関係は見られなかった。また貯蔵穴の配置については規則性を抽出することができなかったが、形態的に似通った貯蔵穴が多くの場合2基で1対をなすように配されていることが読み取れる。またこの際切りあい関係を有し一方が埋没した後に掘削されるものや、切りあわないように壁際ギリギリで接するように掘削されるものなどがある。また後者の亜形としてSU007・043のように平面的には2基の貯蔵穴に見えるものの上層観察や床面レベルの同一性から1基の貯蔵穴として使用されたと判断できる例もある。SU043では中央部には間仕切り上の土盛りを行っており1基としての使用を裏付ける結果となっている。対になるものは時期的に近接したものが大半であるが、時期的な隔たりを持つものもありこのような配置を取る意図については不明である。近接して掘削することによって竪穴内の湿気除去などに効果を發揮したと考えられるがこのためならば貯蔵穴が群集する可能性が高いと考えられる。現状では貯蔵穴を使用する小集団ごとに場所を選定し掘削を行った可能性を考えておきたい。またSU023・032・053・054・099では炭化米がまとまって出土している。特に023・032・099では埋土に焼土・炭化物が含まれ、032では壁面に被熱の痕跡が残っている。貯蔵穴内で炭化米を製造した事例として注目される。

##### 弥生時代中期後半～古墳時代前期（Ⅱ期）

弥生時代に位置付けられるものとしては甕棺墓3基、井戸8基、竪穴住居跡2基、掘立柱建物1基を検出する。甕棺墓は21次調査区の検討から中期前半に造墓が開始され中期後半には区画溝が掘削されるとともに墳丘墓の形成が行われ、後期初頭にまでの埋葬遺構が確認され、祭祀は後期前半まで行われていることが明らかとなっている。本調査区では中期中頃～後半の甕棺墓3基と1基の抜き跡状の遺構が確認されているが、遺存状態が不良で21次調査に示された墳丘墓内の甕棺墓と同様な状態である。盛り土上からの掘削も想定できるが可能性にとどめたい。またこの時期は井戸の掘削が開始されており、50次調査例とあわせると中期後半～末7基、後期前半1基、後期中頃4基、終末3基が確認されている。また竪穴住居は円形住居1基、終末の（長）方形住居は21次調査とあわせると4基が確認されている。削平が著しく住居の遺存状態は悪いがこの時期に大規模な集落が展開していたことを示すものである。

またこれに統く古墳時代前期には本調査区では井戸1基（S E 060）を検出するのみである。ここからは甕・壺などとともに小型壺3個体を接合した祭祀用の土器が出土している。21・50次調査区では溝・竪穴住居跡が検出されている。

#### 古墳時代後期（Ⅲ期）

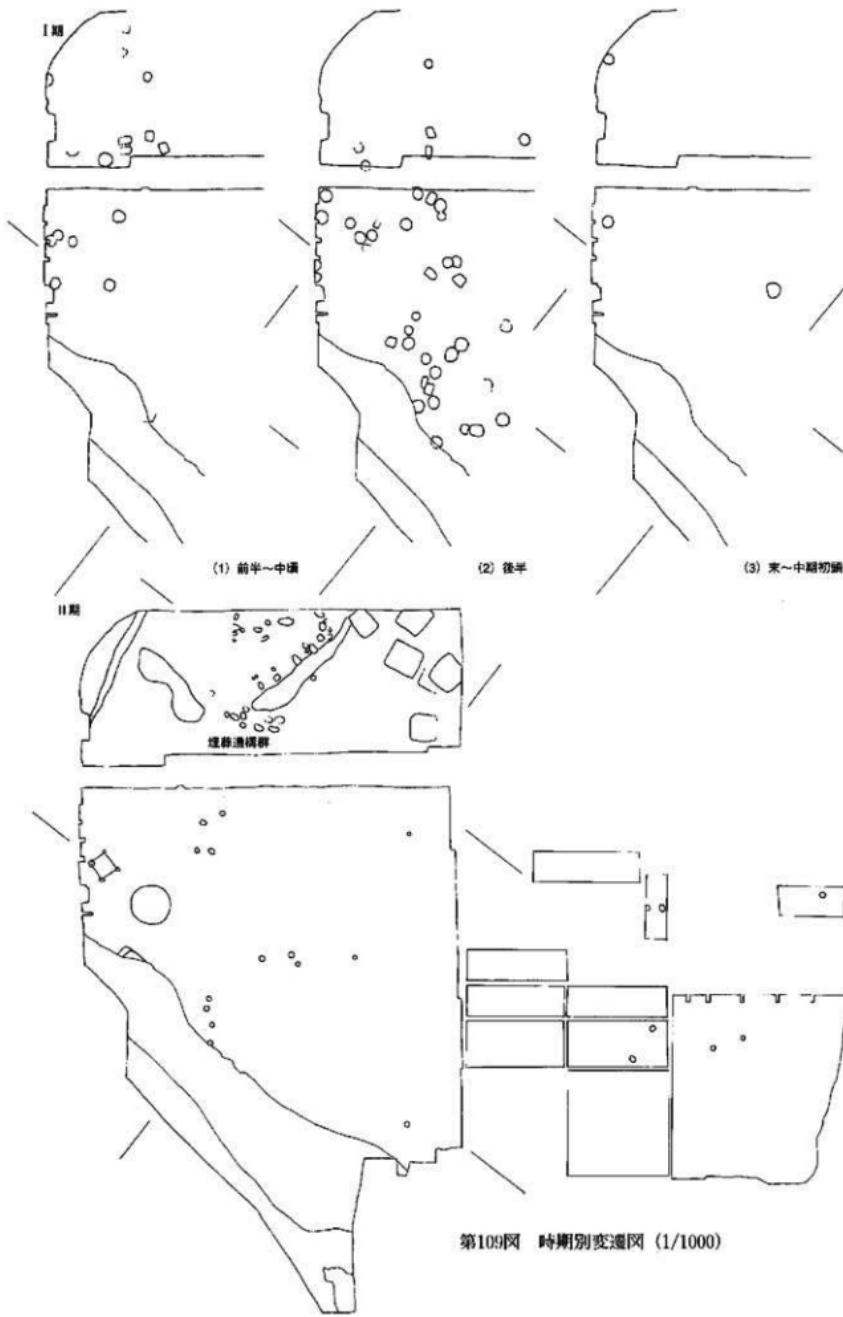
6世紀の後半～7世紀中頃に位置付けられる。この直前に劍塚北・劍塚古墳が相次いで築造されている。本調査区では大型の掘立柱建物（S B 034）、東隅の竪穴住居跡群、井戸1基（S E 068）が検出されている。南側10次調査地点検出の大型建物はS B 034と主軸をほぼ同じくしている。調査区西隅の柱穴列も同様の大型建物を構成する可能性が高い。また周辺14・21・50次調査区からは同時期の井戸・竪穴住居跡も確認されている。

#### 古代前期（Ⅳ期）

井戸3基（S E 003・090・110）・竪穴2基（S C 091・092）を検出する。S E 003はやや先行する時期である。形状が特異で浄化用施設など注目する点が多い。S E 090からは焼成前に漢字を刻んだ壊が出土し、S E 110出土の井筒は櫛を転用した可能性も考えられる。また14・21・50次調査区からは同時期の井戸が7基検出され、初期の越州窯青磁・凹面鏡・灰釉陶器・瓦が出土している。更に10・14次調査区では真北の方位をとる建物群とこれを区画する溝が確認されている。官衙的施設が展開していた可能性が高く、全体像は不明瞭ながらもこの時期の井戸・建物の集中は注目される。

#### 中世前期（Ⅴ期）

井戸1基（S E 061）・木棺墓1基（S R 059）のほかに調査区東隅部分ではこの時期のピットを比較的多数検出している。調査区西側のピット群からはこの時期の遺物はほとんど検出されていない。またC区の旧河川堆積物中から多くの白磁・青磁が出土しており近接する台地上にこの期の遺構群が展開していたと考えられる。さらに南側の10・14次調査区では同時期の遺物は僅少であることから台地の北東側にむかって中世遺構が広がるものと考えられる。



第109図 時期別変遷図 (1/1000)

## 付 編

### 彩文土器と赤色顔料の保存処理及び自然科学的調査についての予察

福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎・片多雅樹

那珂遺跡群64次調査出土の彩文土器（弥生土器）6点と、中世の遺構から出土した赤色顔料塊1点について、彩文の剥落止めを中心とする保存処理と、併せて赤色の由来成分の分析を行った。

彩文土器の保存処理は、クリーニング後、彩文の剥落止めとしてアクリル樹脂（パラロイドB-72）を塗布した。一方の彩文が転写された現場の土と一緒に切り取って持ち帰り、彩文部分を保護するために同様にアクリル樹脂を塗布し、強化保存を図った。胎土が脆弱な個体は、接合するだけでは再び破損することが想定されたため、アクリル樹脂を喰食含浸させて胎土を強化した上で、セルロース系接着剤を用いて破片の接合を行った。

今回は併せて赤色顔料の材質分析も行った。赤色顔料については別府大学本田光子氏等による研究があり、弥生時代においては鉄(Fe)を原料とするベンガラ、水銀(Hg)を原料とする朱の二種類が主に用いられていたことが知られている。従って元素分析でどちらの元素が検出されるかによって、大まかな顔料の種類を知ることが可能である。最近では特に無機系の元素を幅広く同定することができる蛍光X線分析装置が文化財の分野に普及しており、当センターでも平成11年度の施設増築・改修工事に伴い導入された。分析にはエダックス社製のエネルギー分散型微小部用蛍光X線分析装置(eagle- $\mu$  prove)を使用した<sup>1)</sup>。分析条件は次の通り。

X線管球：モリブデン(Mo) 対陰極

検出器：半導体検出器

印加電圧・電流：40kV・100~160μA

測定時間：300秒

測定雰囲気：真空

測定範囲：300μφ

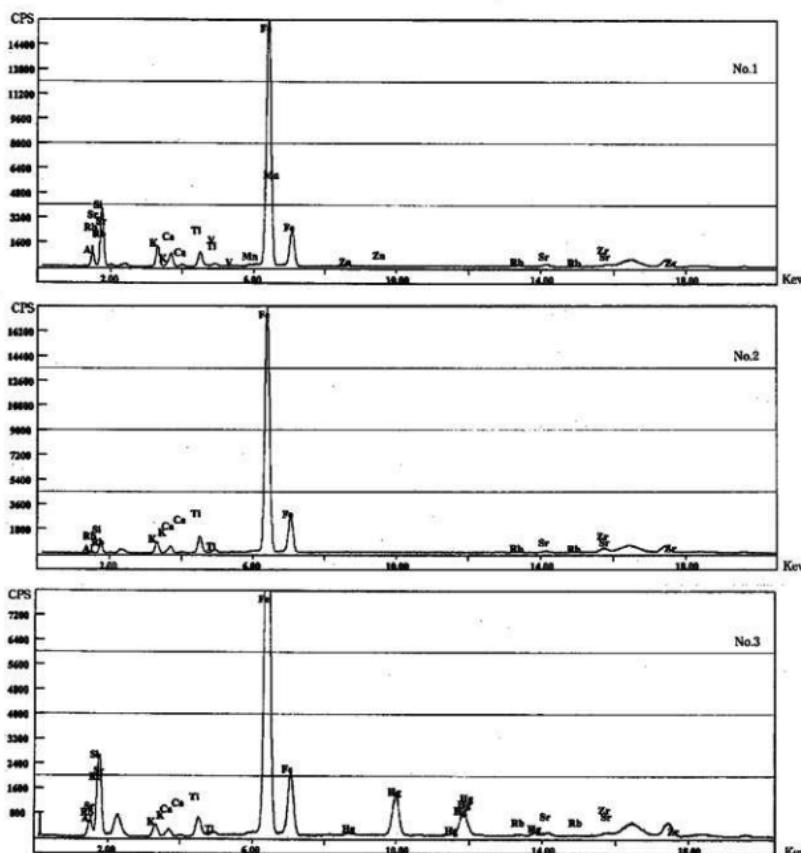
分析の結果を総合すると別表のようになる。今回の分析は赤色顔料の由来元素が何であるか調べることが上目的で定量値は必要ないことから、結果は検出された元素を「十」印で表すこととする。分析によって鉄(Fe)が検出された場合、土器の胎土や若干残している可能性のある埋土にも鉄(Fe)が成分の一つとして含まれているため、確実にベンガラと同定するには本来、更にX線回析装置による化合物の結晶構造解析や顕微鏡による観察などの手段を経る必要があるが、今回は時間の関係で行っていない。また、朱のなかにもベンガラと併用されているものがあることが知られているが、今回的方法ではそこまで調査することができなかった。機会を見つけて改めて詳細を報告したい。

#### 註1)

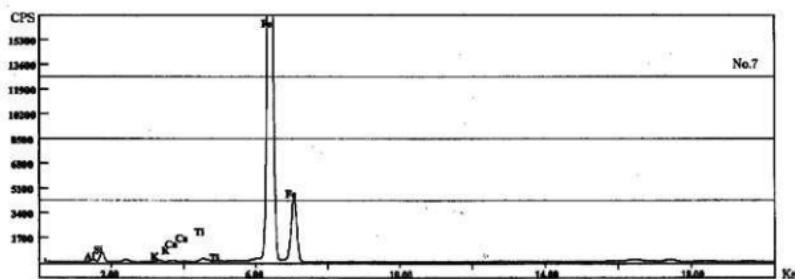
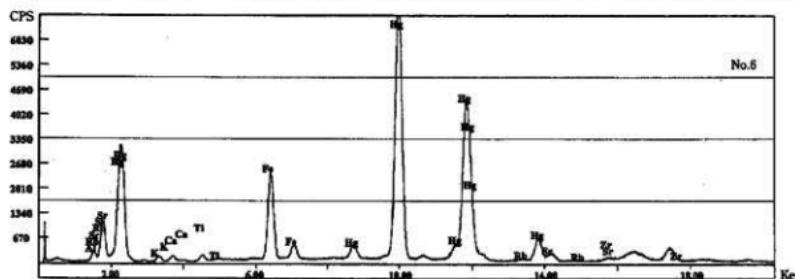
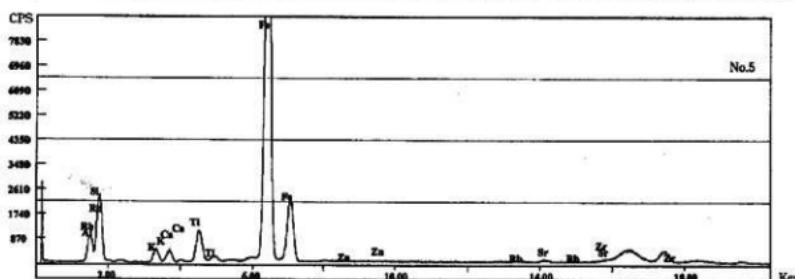
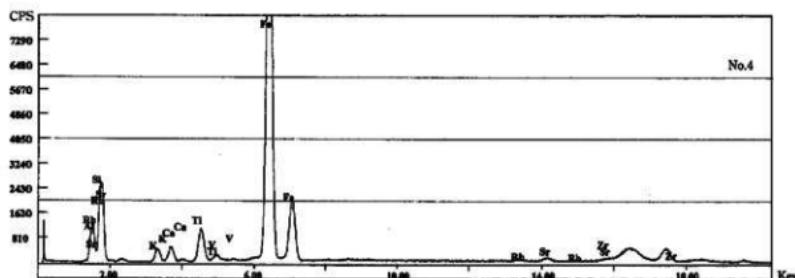
この装置はX線を特殊なキャビラリーを用いてエネルギー強度を落すことなく絞り、300μの微小範囲内のデータを得ることができることから、少數の付着サンプルでも分析が可能である。また青銅鏡程度の資料であれば十分に入る広めのチャンバーとサンプルステージを有し、比較的大型の資料も非破壊でそのまま分析することができる。X線は上面照射方式で、分析箇所は備え付けのカラーCCDカメラにより分析曲面上に映し出して確認しながら分析を行う。

No.	資料名	出土遺構	Fig	鉄(Fe)	水銀(Hg)	推定される顔料
1	彩文土器	SU016下層	第16図 438	+	検出されず	ベンガラ
2	彩文土器	SU016下層	第16図 435	+	検出されず	ベンガラ
3	彩文土器	SU016下層	第16図 437	+	+	朱
4	彩文土器	SU016上層	第16図 436	+	検出されず	ベンガラ
5	彩文土器	SU016上層	第16図 439	+	検出されず	ベンガラ
6	彩文土器	SU016上層	第16図 434	+	+	朱
7	赤色顔料塊	SU016	図示なし	+	検出されず	ベンガラ

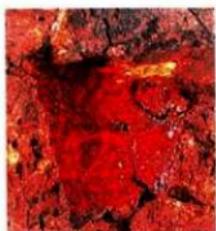
分析結果一覧



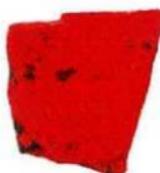
蛍光X線分析チャート（1）



蛍光 X 線分析チャート (2)



No.1



No.2



No.4



土に転写された彩文

土器片の現状

画像処理による  
彩文の復元



No.3



No.5



No.7

その他の破片・顔料



写真1 A区全景（東から）



写真2 A区西半全景（南から）



写真3 B区全景（南から）



写真4 B区全景（南西から）



写真5 B区全景（西から）



写真6 C区東半全景（東から）



写真7 B区段落ち部分（北西から）



写真8 C区段落ち部分（北から）



写真9 C区東壁上層1



写真10 C区東壁土層2



写真11 SB034（南から）



写真12 SB034（西から）



写真13 SB055（南から）



写真14 SC045（西から）



写真15 SC058（南から）



写真16 SC076（南から）



写真17 SC078（南から）



写真18 SC083（東から）



写真19 SC091（北から）



写真20 SC092（南から）



写真21 SC124（南から）



写真22 SK001（西から）



写真23 SK002（東から）



写真24 SK012（東から）

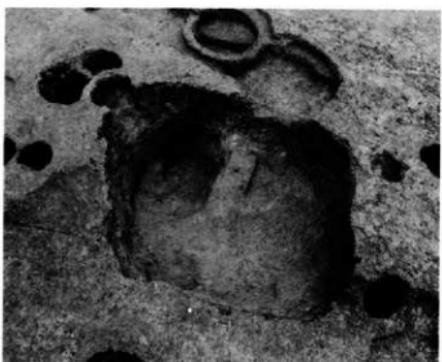


写真25 SK046（西から）



写真26 SK049（東から）



写真27 SK049土層

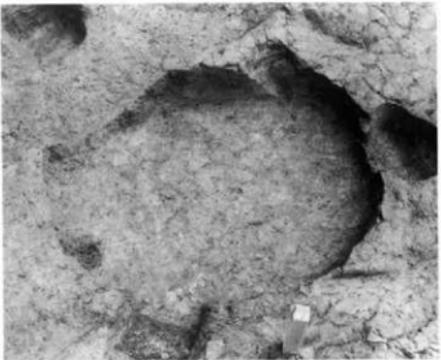


写真28 SK104（西から）



写真29 SK125（北西から）

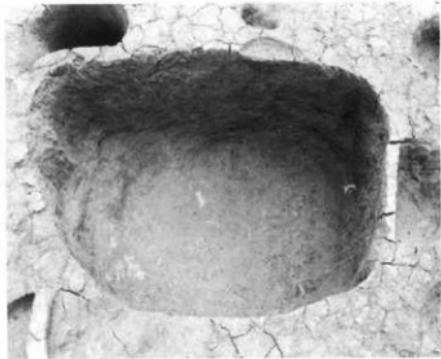


写真30 SK126（東から）



写真31 SE003（南から）

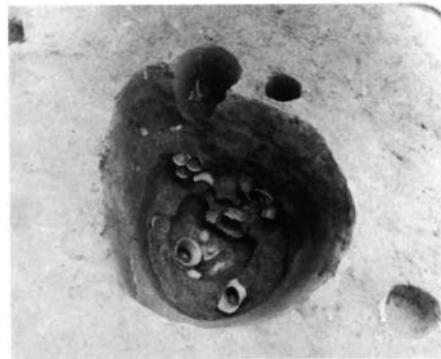


写真32 SE060上層出土状況（北から）



写真33 SE060出土状況（西から）



写真34 SE060最下部出土状況（西から）

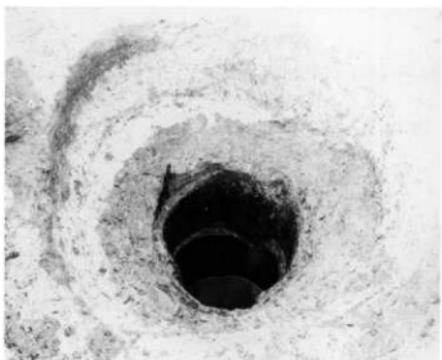


写真35 SE061（南から）



写真36 SE061井筒（南から）



写真37 SE061完掘（南から）

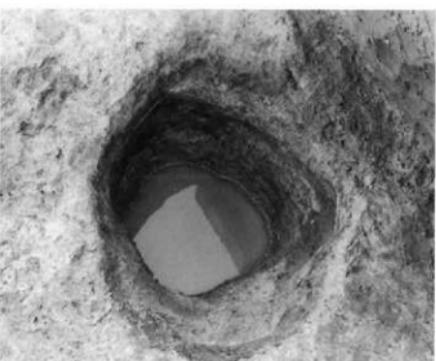


写真38 SE073（北西から）



写真39 SE090（西から）



写真40 SE096上層出土状況（北から）



写真41 SE096（西から）

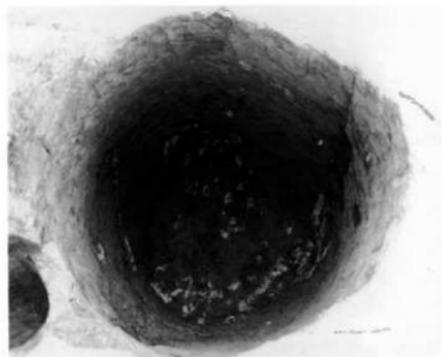


写真42 SE102（南から）

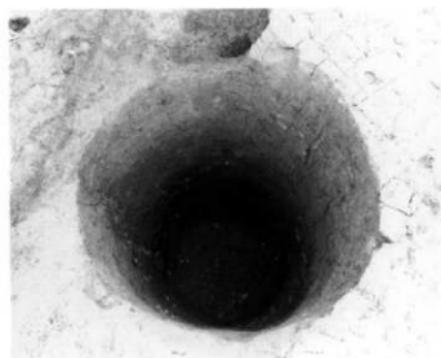


写真43 SE107（西から）



写真44 SE103（北から）



写真45 SE110（西から）

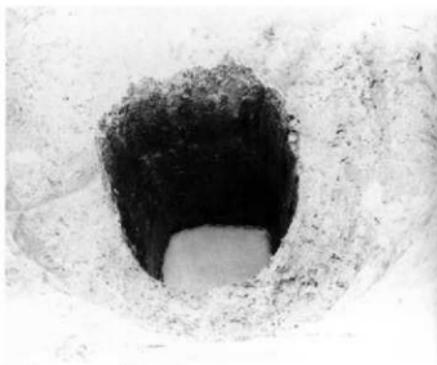


写真46 SE110井筒（西から）



写真47 SE110井筒A



写真48 SE110井筒組み合わせ状況

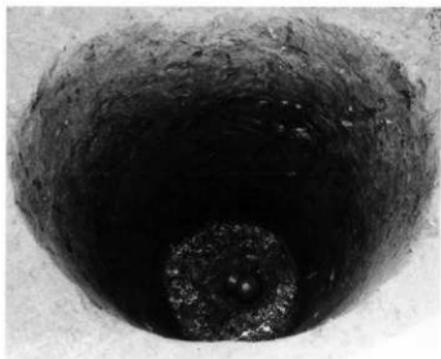


写真49 SE112（北から）



写真50 SE117（北から）

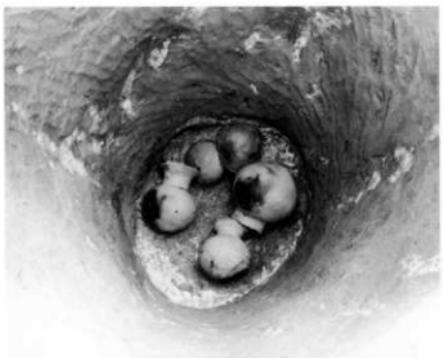


写真51 SE119出土状況（北から）

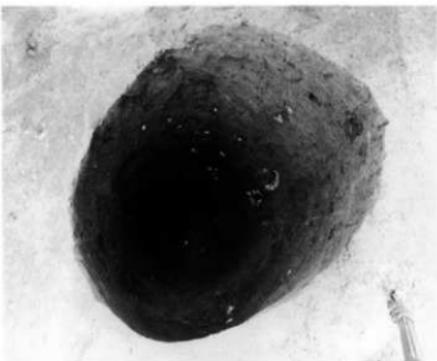


写真52 SE120（西から）



写真53 SU005（南から）



写真54 SU005上層



写真55 SU006（南から）



写真56 SU006土層



写真57 SU007（東から）



写真58 SU007土層



写真59 SU013（東から）



写真60 SU013土層



写真61 SU014（北から）

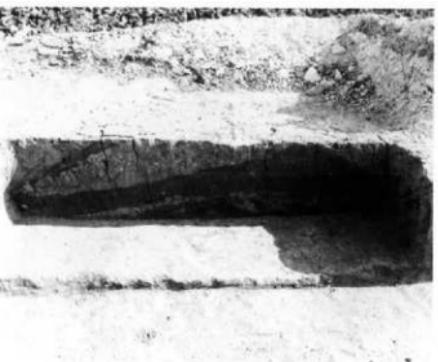


写真62 SU014土層



写真63 SU016（北から）



写真64 SU016土層



写真65 SU018（東から）



写真66 SU018土層



写真67 SU022（北から）



写真68 SU022土層



写真69 SU023（南から）



写真70 SU023土層



写真71 SU023北側炭化物出土状況（西から）



写真72 SU023南側炭化物出土状況（西から）



写真73 SU024（東から）



写真74 SU024土層



写真75 SU026（北から）



写真76 SU026土層



写真77 SU031（西から）



写真78 SU031土層



写真79 SU032炭化物出土状況（西から）

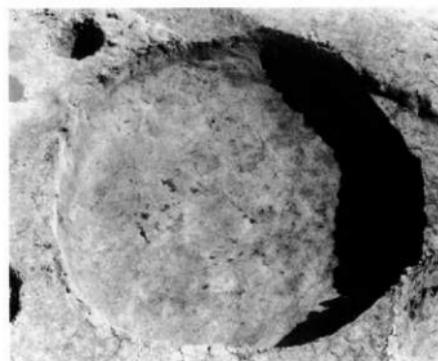


写真80 SU032（西から）

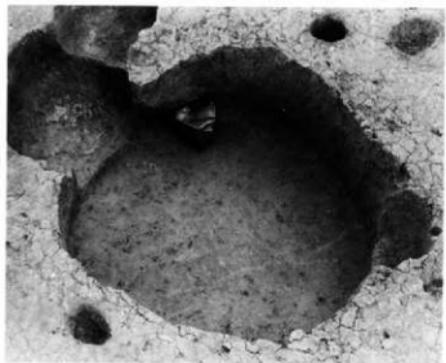


写真81 SU033（北から）



写真82 SU033土層



写真83 SU043（西から）



写真84 SU043土層



写真85 SU047（南から）



写真86 SU047土層



写真87 SU050（西から）



写真88 SU050土層



写真89 SU051（西から）



写真90 SU051土層



写真91 SU052（西から）



写真92 SU052土層



写真93 SU053（西から）



写真94 SU053上層

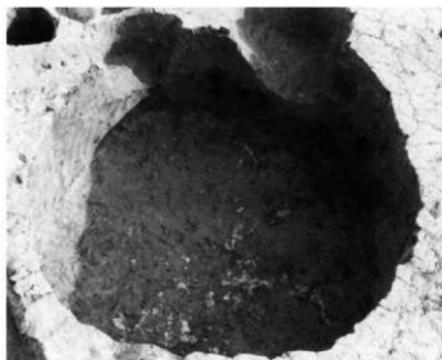


写真95 SU054（北から）



写真96 SU054上層



写真97 SU098（北から）



写真98 SU098上層



写真99 SU099（西から）



写真100 SU099土層

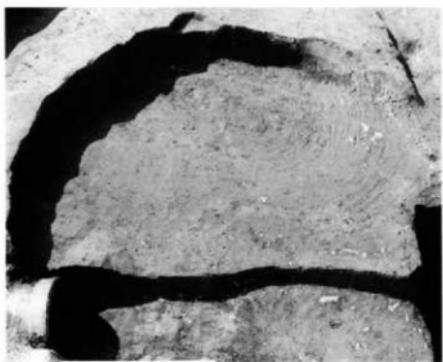


写真101 SU100（南から）



写真102 SU100土層



写真103 SU106（西から）



写真104 SU106土層



写真105 SU108（西から）



写真106 SU108上層



写真107 SU111（西から）



写真108 SU111上層



写真109 SU121（西から）



写真110 SU121上層



写真111 SU122（西から）



写真112 SU122土層



写真113 SU123（東から）



写真114 SU123上層

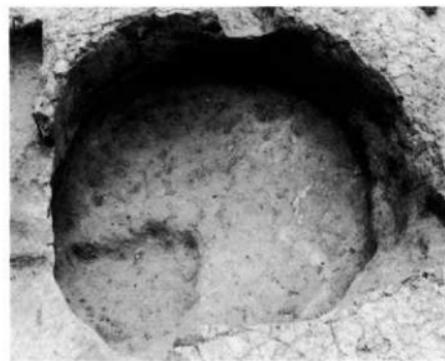


写真115 SU127（北から）



写真116 SU127土層



写真117 SU128（西から）



写真118 SU128土層



写真119 SU129（西から）



写真120 SU129土層



写真121 SU130（西から）



写真122 SU130土層



写真123 K020（北から）



写真124 SR059（南から）



写真125 SP015（北から）



写真126 SP301（南から）



写真127 SD062出土墨書き陶器（102）



写真128 SE090出土土師器環（163）

---

## 那珂 24

—那珂遺跡群第64次調査報告—

2000年（平成12年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1丁目10番15号

---